

# 沖縄県立博物館紀要

## 第 28 号

BULLETIN OF

THE OKINAWA PREFECTURAL  
MUSEUM

No.28

2002

### 目 次

嵩原建二：沖縄島で留鳥として生息する希少な3亜種の繁殖記録について.....	1
園原 謙：沖縄縣教育會附設郷土博物館について .....	13
小濱継雄・嵩原建二：沖縄県の外来昆虫 .....	55

沖 縄 県 立 博 物 館  
OKINAWA PREFECTURAL MUSEUM

# 沖縄県立博物館紀要

第 28 号

沖 縄 県 立 博 物 館

## 目 次

### CONTENTS

嵩原建二：沖縄島で留鳥として生息する希少な3亜種の繁殖記録について .....	1
Kenji TAKEHARA : Notes on Breeding records of rare three residential birds (subspecies) in Okinawa Is. The Ryukyus	
園原 謙：沖縄県教育會附設郷土博物館について .....	13
Ken SONOHARA : A note of <i>Okinawa-ken kyouikukai fusetsu kyouodo</i> <i>hakubutsukan</i> , heimat museum	
小濱継雄・嵩原建二：沖縄県の外来昆虫 .....	55
T. KOHAMA and K. TAKEHARA : Exotic Insects in Okinawa	

## 沖縄島で留鳥として生息する希少な 3亜種の繁殖記録について

嵩 原 建 二

(沖縄県立博物館)

Notes on breeding records of rare three residential  
birds (subspecies) in Okinawa Is., The Ryukyus

Kenji TAKEHARA

(Okinawa Prefectural Museum)

### 1. はじめに

沖縄県内には40余種の留鳥が生息している。特に沖縄島北部ではヤンバルクイナやノグチゲラ、アカヒゲ、アマミヤマシギなどの沖縄島固有種や琉球列島固有種など貴重な鳥類が生息している。また、沖縄は動物地理区の東洋区と旧北区の境に位置していることから東洋区系の北限種も多く生息しており、八重山諸島の石垣島や西表島などに生息するカンムリワシやキンバト、ズグロミゾゴイ、ムラサキサギなどがそれにあたる。こうした貴重な鳥類の大部分が、国や県の天然記念物としての指定や国内希少野生生物種の指定を受け、その保護を緊急に図る上から様々な生息実態調査がこれまでに数多く行われてきている。

一方、沖縄県は多くの島嶼から形成されているため、海で隔てられた島嶼環境下においては、留鳥の地理的及び遺伝的隔離が進行し、大部分の留鳥が島ごとに、あるいは本土に生息する基亜種と比較して亜種化している。このことから、前述した貴重種の保全と合わせて、島嶼に生息する希少な亜種個体群の保全についても考慮することが、重要な課題であろうと思われる。しかしながら、こうした希少な亜種個体群に関する生態的な調査は少なく、その保全に資する生態的な調査もほとんど行われてきていないので現状であろう。

本調査は県内各地で留鳥として生息し、沖縄県自然保護課編（1996）の沖縄県版レッドデータブックである「沖縄の絶滅のおそれのある野生生物」（以下沖縄版RDBと略記）の中で危急種としてランクされ、保護が求められている亜種リュウキュウオオコノハズク *Otus lempiji pryeri* と、本州でも留鳥として生息するが、県内では生息地が局在的で危急種とランク付けされているタマシギ *Rostratula benghalensis benghalensis*、同希少種としてランクされている亜種リュウキュウサンショウクイ *Pericrocotus divaricatus tegimae* の3亜種について、2001年内で繁殖に関する若干の資料が得られたので報告する。

本報告が、これらの保護すべき鳥類の種の保全に資する若干の資料と活用されることに

なれば幸いである。なお、本報告を行うにあたり、貴重な繁殖記録に関する情報を寄せていただいた那覇市在住の金城吉男氏、本部町崎本部在ベルビーチ・ゴルフクラブの山城茂彦氏と大嶺宗吉氏、沖縄環境経済研究所の上原辰夫氏に感謝申し上げます。

## 2. 調査概要及び調査方法

本調査では、2001年4月から11月までの期間に、オオコノハズクについては、新聞報道等を参考にし、情報提供者からの聞き取りを行うとともに、沖縄島北部の本部町崎本部と沖縄島南部の那覇市首里末吉町に所在する末吉公園（都市公園）における現地調査により営巣状況を調査した。

リュウキュウサンショウクイについては沖縄島中部の読谷村古堅において、タマシギについては、沖縄島北部の大宜味村喜如嘉において、それぞれ各営巣地における直接観察を行い、継続的な営巣活動の記録に努めた。

## 3. 調査結果及び考察

### (1) 沖縄版 RDB 危急種

沖縄版 RDB の危急種であるリュウキュウオオコノハズク *Otus lempiji pryeri* は、日本鳥学会編（2000）によると、県内では沖縄島や屋我地島、西表島に留鳥として繁殖分布し、主に森林地域とその林縁などに生息している。

今回本亜種の繁殖記録については、2例の観察記録がみられた。以下にその概要をまとめた。

#### 1) 市街地に隣接した地域で営巣したリュウキュウオオコノハズク

今回、市街地に隣接する都市公園内での繁殖が確認された（琉球新報 2001年4月19日付け朝刊）。その営巣場所は、沖縄島南部の那覇市の北東部に広がる総合都市公園の末吉公園内（図1. A-1）であった。本種の営巣個所は、2001年4月8日に安謝川中流部の花見橋近くに生育する樹高さ9.9m、胸高直径87cmのナンキンハゼの高さ2.65mに開口した樹洞で発見された（写真1・2）。発見当時、巣内には1個体（写真3）、近くの枝先には巣立った2個体の合計3個体の亜成鳥が確認された。その後の4月11日の観察では、最後まで巣内に残っていた1個体の巣立ちが確認された（金城吉男氏私信）。

本種は巣立った亜成鳥は、親鳥から餌をもらいながら大きくなるので、しばらくは公園内にすごすものと考えられるが、公園北側や東側に残存する常緑広葉樹林が良好であるため、本地域は本種の生息するための餌資源確保の場所としては好適な環境になっているものと思われる。

なお、沖縄県公衆衛生協会編（1996）では、本地域での本種の生息はこれまで報告され

ていないことから、今回の確認が本地域における初めての分布記録となる。

## 2) 地上のたて穴に営巣したリュウキュウオオコノハズクの繁殖例

今回沖縄島北部の本部町崎本部に所在するベルビーチゴルフ場内（図1. A-2）で地上の縦穴の中に営巣する例が観察された（琉球新報2001年5月23日付け朝刊）。営巣場所は3番ホールティグランド脇の芝地に開口した縦穴で、南側に約20度傾斜した斜面の中途にあった（写真4）。その構造はたて穴の入口の広さがおよそ東西方向に短径33cmで、南

### 凡例

●：営巣地

A-1：オオコノハズクの営巣地（那覇市末吉公園）

A-2：オオコノハズクの営巣地（本部町）

B-1：タマシギの営巣地（大宜味村）

B-2：リュウキュウサンショウクイの営巣地（読谷村）

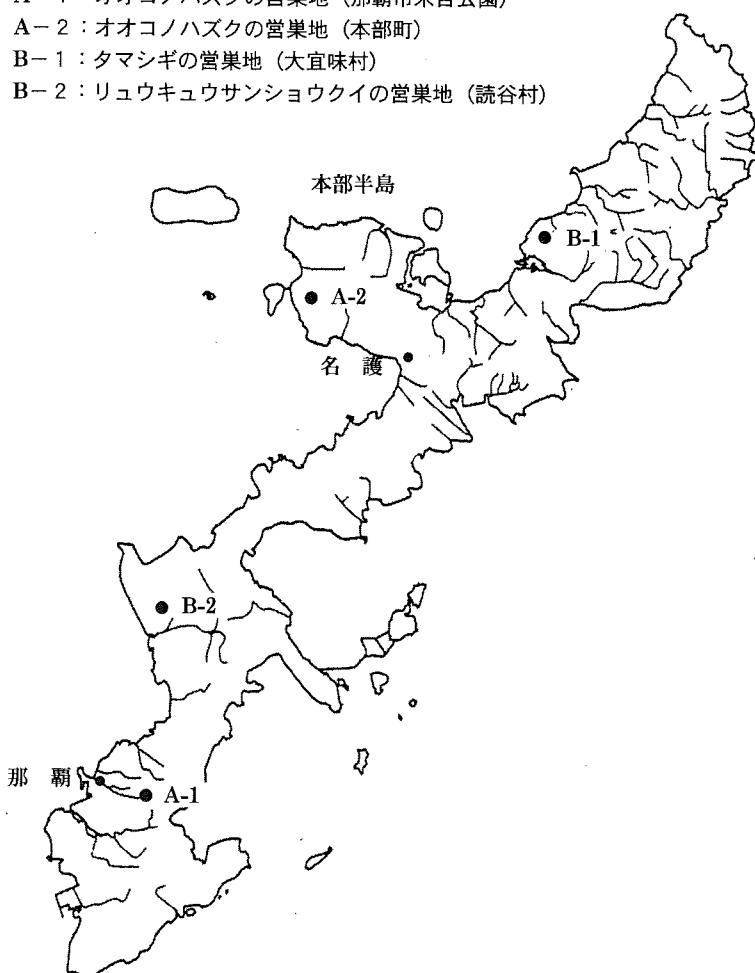


図1. 沖縄島における各営巣地の位置図

北方向に長径40cmあり（写真5）、深さは浅い部分で35cm、深い部分で47cmであった。底の部分は、東西方向に短径が29cmで、南北方向に長径が45cmで、北側部分が奥にいくにしたがってゆるやかに傾斜して深くなり、そして幾分横広がりになった袋状の構造を呈していた。

営巣地及びその周辺の環境としては、営巣地はゴルフ場内芝地で、まわりにはリュウキュウマツがまばらに3本残されていた環境であった。本地域で営巣が確認されたのは、4月26日で、確認時に親鳥の抱卵が観察された。その後5月10日には雛の鳴き声が聞こえ、親鳥と2個体の雛が確認された（写真6、7）。そして、5月21日には巣内で雛の姿を確認することができず、この日を境にして巣立ったものとされている（上原辰夫氏私信）。

本営巣場所の周辺環境は、リュウキュウマツを中心とする若い二次林で、フクロウ類が営巣可能な樹洞を有する大径木は見あたらない環境であった（写真8）。また、本営巣地は昨年から2年連続して使用したことが確認されており（大嶺宗吉氏私信）、継続的な利用も見受けられる。おそらく、本地域周辺では二次林という若齢の森林であるため、営巣する樹洞の確保が困難さをきたし、地上の豎穴を利用せざるを得ない状況になっているものと考えられた。

これまで、県内における本種の営巣記録については、嵩原（1994）により、沖縄島北部の今帰仁村玉城における地上営巣例が知られている。したがって、今回の確認は地上営巣の2例目となるものである。嵩原（1994）ではリュウキュウマツの根元に開口した樹洞の中の地表面に若干のへこみがある場所で営巣が見られた。このことから基本的には樹洞の使用になるものとも思われ、今回のように、森林から離れ草木の少ない芝地上に開口した豎穴を利用した例は、今回が初めての確認例であろうとも思われる。

また、産卵数については、今回は2個体の巣立ちが確認されている。嵩原（1994）は3卵を報告していることから、これまでの例を総合すると、本亜種産卵数は2から3の範囲になるものと思われる。

なお、本亜種の餌環境としては、森林地域から離れてはいるが、本ゴルフ場の営業時間が夜間10時までにおよぶため、ナイト用照明に小昆虫が数多く飛来し、これを恒常的に捕食し、育雛期の餌資源としても利用されていたものと考えられる。

## 2. 沖縄版 RDB 希少種

### (1) タマシギの繁殖記録

本亜種は県内では沖縄島、西表島、与那国島に留鳥として繁殖分布する（日本鳥学会編2000）。今回沖縄島で繁殖が確認された場所は、沖縄島北部の大宜味村喜如嘉であった（図1、B-1）。本地域の環境は、水田、い草、フトイなどを生産する農用地で、沖縄島で

も数少ない湿地環境となっているため、水辺を利用する鳥類の重要な生息地となっている（写真9）。

本地域では、2001年8月3日から11月下旬まで同場所における継続的な観察の中で、9月18日に雛を伴いながら採餌を行う雄個体が観察され、繁殖が確認された。

本地域では、ほとんどの留鳥が繁殖活動を終えたと考えられる8月3日に、雄個体3、雌個体3の合計6個体を確認した。したがって、本地域では少数の繁殖個体群の存在が認められ、8月4日には3番が確認された（写真10）。その後の観察では営巣や抱卵を確認することはできなかったが、9月中旬にあたる9月18日と10月8日に雛連れで採餌行動を行なっている雄親の2家族を確認した。その雛の数は前者が2個体（写真11）で後者が1個体（写真12）の2例であった。本亜種は通常3～5卵ほども産卵することから（小林1967）、本地域で観察された例では雛の数がかなり少數であった。このことは、本地域では野生化したネコを見る機会が多く、しばしばシロハラクイナの雛が捕食されることから、本亜種も同様に孵化後のネコによる捕食の可能性が示唆される。

沖縄島における最近の記録としては、1986年8月に沖縄島北部の金武町における本種の繁殖例が知られている（沖縄野鳥研究会編 1993）。したがって、本地域における本種の繁殖例は、沖縄島における23年ぶりの繁殖確認と思われ、また金武町以外における繁殖地の確認になるものと思われる。このことから、本地域は本種の繁殖地として重要な地域であることが示唆され、本種の保護や保全を図るために、捕食者の除去や本地域の環境保全が不可欠であろうと思われる。

## （2）リュウキュウサンショウクイの繁殖記録

本亜種は奄美諸島と琉球諸島（大東諸島を除く）に留鳥として繁殖分布している（日本鳥学会編 2000）。また、しばしば、九州南部や屋久島などにも飛来するとされる（小林 1982）。

今回本亜種の営巣が確認された場所は、沖縄島中部の読谷村古堅（図1. B-2）に所在する村立古堅南小学校体育館左手に植栽されたホウオウボクの樹上で（写真13）、2001年4月9日に造巣が確認された。確認時には造巣中で巣の外側部分の積み上げ中途にあり、巣は全体の約3分の2ほどの完成度であった。

営巣場所は樹高5.9m、胸高直径72cmのホウオウボクの地上から3mの高さに巣があり、横広がりでほぼ水平にのびる横枝での造巣がみられた。その後継続的に抱卵（写真14）、育雛、巣立ちまでの期間に短時間の観察を行い、一連の繁殖活動について記録した（参考資料1）。その観察記録の概要を表1として概略的にまとめて示したように、5月9日に孵化し、5月26日に巣立った雛は、巣の南方に植栽されたホルトノキの枝先にとまり、親

表1. リュウキュウサンショウクイの繁殖活動の記録

- 
- 4月9日：10:00頃造巣行動を確認
  - 4月11日：19:00頃に観察する。巣内には成鳥は見あたらない。
  - 4月24日：7:00頃抱卵を確認する。
  - 5月9日：13:00頃孵化を確認する。
  - 5月26日：12:00頃、亜成鳥2個体の巣立ちを確認する。
- 

本亜種の詳細な営巣状況をみるために、巣立ち後に巣を採取し、そのサイズや巣材についても検討した。その結果、巣のサイズは外径が長径7.8cmと短径7cmで、高さは巣の底に当たる横枝に接する部分からは3cmあった。なお、巣を固定するため巣の底よりも下部に木の皮を張り付けた部分があり、その部分からの巣高は5cmであった。

巣材は巣の中央にビニルひもが少量使用され、巣の底や外側のへりは、ホウオウボクの枯れた細い葉身を丸めて使用していた。また、巣の下部の周囲には木の皮（樹種不明）がはりつけられていた。巣の縁の厚さは3cmで、巣の深さは縁の上部から1.5cmとかなり浅い巣であった。

以上の観察結果をまとめると、本営巣個体は造巣開始時期が4月初旬で、抱卵期間が約15日内外、育雛期間が17日で、雛の数は2個体であった。

一方、亜種サンショウクイ *P. d. divaricatus* は、本土においては夏鳥として渡来し、4月から6月頃に本州以南の低山の針葉樹や広葉樹の約5～15mの高さに、枝上で又になつた場所に腕型の巣を造る。卵は青灰色の地に斑点のある卵を4から5個産卵し、雌だけが約17～18日間抱卵するとされ、孵化後約14日で巣立つとされている（柿澤・小海途 1999）。サンショウクイは、県内では数少ない旅鳥として通過していく個体や冬鳥として越冬個体が観察されるだけで繁殖はしていない。

このサンショウクイとリュウキュウサンショウクイの繁殖生態に関する比較を行うと、リュウキュウサンショウクイ国頭山地域の広葉樹林帯では、サンショウクイと同様に又のある場所に巣をかけることが知られ、イタジイの細い二叉のある場所での営巣記録が見られる（沖縄野鳥研究会 1993）。しかし、今回観察された場所は、営巣場所が市街地に所在する学校の敷地内に植栽されたホウオウボクで、木立の造巣場所は傾斜を持たないほぼ水平な横枝の上であった。これは嵩原（2001）による市街地における営巣確認と同様な樹種で、かつほぼ同様な傾きを持つ場所であった。したがって、例数は少ないが、営巣場所の選択がより市街地に進出している傾向みられ、造巣場所はサンショウクイとは若干異なり、水平に近い横枝の上でも造巣する傾向が見られる。

また、サンショウウクイは1腹産卵数（クラッチ・サイズ）が4から5（小林 1967、柿澤・小海途 1999）であるのに対し、雛の数をほぼ産卵数とするとこれまでの育雛の観察記録では2の例（沖縄野鳥研究会 1993）や3の例（嵩原 2001）が知られ、今回の確認では雛は2で、平均2.3となり、例数は少ないがサンショウウクイに比較して産卵数がほぼ半分と少ないものと思われる。この雛の数は、巣のサイズにも関係するものと思われ、サンショウウクイの巣の外径が8cm×8cmと若干大型であることから（柿澤・小海途 1999）、孵化した雛をリュウキュウサンショウウクイよりも多く収容できるものとも考えられ、産卵数も多くなっているものと思われる。

さらに、サンショウウクイとリュウキュウサンショウウクイの抱卵・育雛期間を比較すると、サンショウウクイの卵期は5～7月とされ（小林 1967）、今回の繁殖例ではサンショウウクイより抱卵開始時期がやや早いものと思われる。また、抱卵期間はほぼ同じと思われるが、育雛期間については、サンショウウクイの14日に比較して、リュウキュウサンショウウクイは17日と3日ほど長がかった。これは餌動物（餌資源）の豊富な森林地域とは異なる市街地での育雛においては、餌の供給が森林地域とはかなり異なることは自明なことで、この餌資源量の差異が、その育雛期間の差異となっている可能性がある。

また、サンショウウクイでは巣の外壁にウメキゴケをはりつけるとされているが、本亜種は木のうすい皮を利用していた。したがって、サンショウウクイとリュウキュウサンショウウクでは、その造巣形態や繁殖生態、産卵数などに若干の違いが認められる。

#### ＜引用文献＞

- 柿澤亮三・小海途銀次郎 1999. 日本野鳥の会、巣と卵図鑑. 世界文化社. 238pp.
- 小林桂助 1967. 標準原色図鑑全集5鳥. 保育社. 173pp.
- 小林桂助 1982. 原色鳥類図鑑. 保育社. 261pp.
- 日本鳥学会編 2000. 日本鳥類目録改訂第6版. 345pp.
- 沖縄県自然保護課編 1996. 沖縄の絶滅のおそれのある野生生物. 沖縄県. 479pp.
- 沖縄野鳥研究会編著 1993. 改訂沖縄県の野鳥. 沖縄出版. 299pp.
- 沖縄県公衆衛生協会編 1999. 那覇市域生物環境調査報告書. 那覇市環境保全課.
- 嵩原建二 1994. リュウキュウオオコノハズク *Otus ba kkamoema pryeri* の地上営巣について. 「すぐみち」第31号. 今帰仁村立文化センター.
- 嵩原建二 2001. 沖縄島中南部で繁殖したツミとリュウキュウサンショウウクイの2種について. 沖縄県立博物館紀要第27号. p45-50. 沖縄県立博物館.

## 参考資料① <リュウキュウサンショウクイの繁殖観察記録>

営巣地：読谷村字古堅（古堅南小学校校庭）

2001年4月9日（晴）：11:00 造巣を確認する。巣造り中で、雄鳥がくちばしをせわしく動かし、巣の外縁部を積み上げるような行動が見られた。しかし、巣の外縁部の積み上げはまだ低く、全体の3分2程度。

4月11日（曇）：18:30 造巣ほぼ完成。しかしながら、巣内には鳥体は見られず。

4月16日（曇）：19:00 日没後の観察を行う。巣はそのままで、抱卵見られず。

4月24日（曇）：12:00 1週間余り間を明けて、再び巣を観察すると雌抱卵中

4月25日（曇）：18:00 雌抱卵中

4月28日（曇）：7:30～8:00 雌抱卵中

4月29日（曇）：7:30～7:50 雌抱卵中

4月29日（曇）：18:00～19:00 雌抱卵中。観察中に雄個体が抱卵中の雌個体に餌を与える行動が2回見られる。

5月7日（曇）：18:10-18:45 雌抱卵中

5月8日（晴）：18:00-18:30 雌抱卵中

5月9日（晴）：18:20-18:45 雌抱卵中

18:36雄飛来し、巣に座る雌の腹部の下から、くちばしをさしこむように巣内のヒナに給餌し、巣の南方へ飛去する。孵化確認。

5月12日（曇）：11:30-11:45 梅雨の時期で雨が多く、雌は巣内でヒナを保温するように、巣に座っている。

5月18日（曇）：12:00-12:15 巣内に親鳥みあたらず。巣内には白いうぶ毛の生えたヒナがわずかに見える。まだ小さい。

5月22日（曇のち小雨）：15:55-14:15 巣内にヒナ2個体確認。親鳥は巣を離れて餌運びをしている。観察中の15:57頃雌個体が採餌を行い、すぐに巣の南方へ飛去する。

16:11に雌個体巣に戻る。餌は青虫。

5月26日（曇）7:15 ヒナ2個体巣内にいる。

5月26日（曇）11:15 巣内にヒナの姿が見えず巣立ったものと思われる。

ヒナは巣木の南側に植栽されたホルトノキに2個体がとなり、親鳥による給餌を受ける。雛2個体の巣立ちを確認。

写真図版 I (矢印は営巣場所)

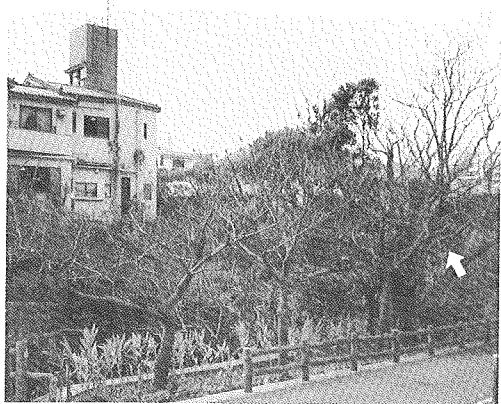


写真1 リュウキュウオオコノハズクの  
営巣環境外観 (末吉公園)

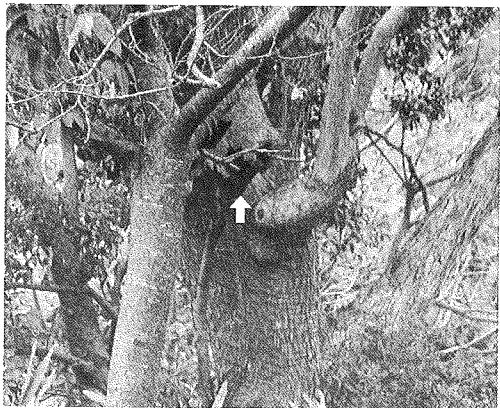


写真2 営巣したナンキンハゼの樹洞



写真3 巣内の亜成鳥  
(金城吉男氏提供)



写真4 リュウキュウオオコノハズクの  
営巣外観 (本部町崎本部)



写真5 営巣した堅穴の開口部

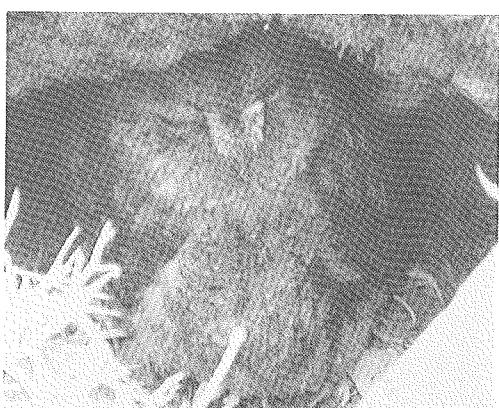


写真6 穴の中の成鳥と雛  
(上原辰男氏提供)

## 写真図版Ⅱ

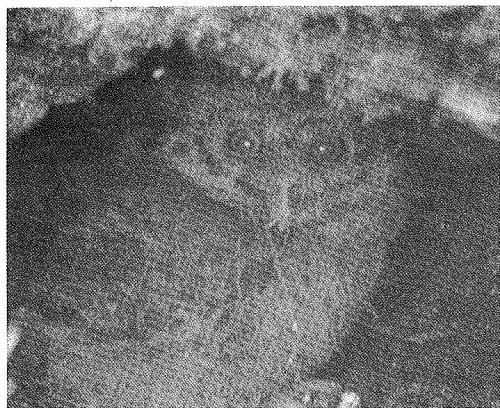


写真7 穴の中の雛（上原辰男氏提供）



写真8 リュウキュウオオコノハズクの  
営巣地周辺環境（本部町崎本部）



写真9 タマシギの営巣地概観  
(大宜味村喜如嘉)



写真10 タマシギの1番（同左）

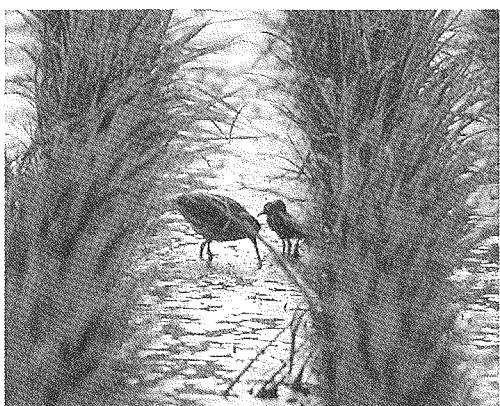


写真11 タマシギの親子  
(大宜味村喜如嘉)

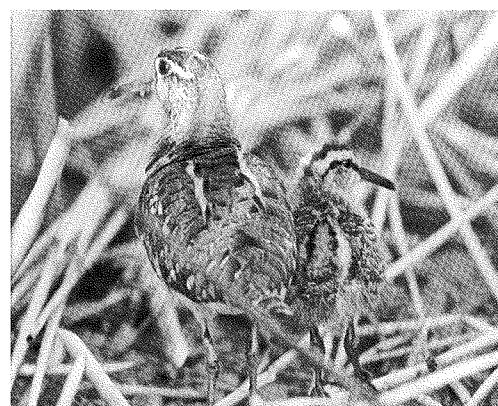


写真12 タマシギの親子（同左）

写真図版III（矢印は営巣場所）



写真13 リュウキュウサンショウクイの  
営巣地概観（読谷村古堅）



写真14 リュウキュウサンショウクイの  
抱卵（同左）

## 沖縄県教育会附設郷土博物館について

園 原 謙

(沖縄県立博物館)

A Note of *Okinawa-ken Kyouiku-kai fusetsu kyouodo hakubutsukan*, Heimat Museum

KEN SONOHARA

(Okinawa Prefectural Museum)

### 1. はじめに

現在、沖縄県下には国立、県立・市町村立の公立と、企業立や個人立のいわゆる私立を合わせて69館<sup>1)</sup> の博物館等施設<sup>2)</sup> がある。復帰後、観光施設等の拡充や地域における歴史文化に対する再認識の機運により、博物館等施設の建設が相次いだ。その施設の設置者の内訳は、国・地方公共団体36、財団11、会社12、個人10となっている。復帰前の同施設の数が4施設（公立1、財団1、個人2）であったことと比べると、県内における社会教育施設あるいは観光施設としての博物館等施設の充実ぶりは隔世の感がある。これら施設数の増加に伴い、施設に従事する学芸員の数も増加してきた。これら職員の資質向上や施設同士の連携を図ることが求められた。この求めに応じて1977年（昭和52）に沖縄県博物館協会（沖縄県立博物館内に事務局設置）が設立された。同協会も2002年で四半世紀を迎える。

日本の博物館活動をリードしてきた国立博物館にとって、2001年は新たな風が吹いた。4月1日から国立博物館・美術館は「独立行政法人」として新たなスタートを切った。国における行財政改革の一連の流れの中で位置づけられる組織の法人化は、地方公共団体でも同様な波が押し寄せてくることを予感させるものである。

国立博物館の設置は、当初文化財保護の立場から、文化財の保存・保護する施設として1950年（昭和25）に制定された文化財保護法の中で規定されていた。一方、同年に制定された博物館法では、地方公共団体や民間が設置する博物館、美術館、資料館、動物園、水族館を対象に「博物館」と規定している。日本博物館協会によれば、2000年3月31日現在、国内には3,777館（国立43、公立2,452、私立1,202、大学80）<sup>3)</sup> の博物館等施設がある。

今日、百花繚乱のような博物館設置は盛況であり、本県における設置数にしても、決して少ない数ではない。むしろ観光立県を標榜する以上、その土地の自然や歴史・文化についての知見や情報などを伝達する機関として、あるいは地域学習の場として博物館の役割は重要であり、その機能のより一層の充実が求められている。

本県における博物館の歴史を振り返るとき、戦後の博物館史は、沖縄県立博物館の歴史に重複する。同館は1995年（平成8）に『沖縄県立博物館50年史』をまとめ上梓した。同50年史の中では前史に戦前の博物館施設としての郷土博物館のことが触れられている。同館が発行する年報にも同様に沿革史の中の「前史」で郷土博物館の創設について触れられている。現在の沖縄県立博物館と沖縄県教育会附設郷土博物館は設置者が前者が公的機関であり、後者が任意の団体機関であるという相違はあるが、設立の意義については同様なものがあったと思われることから、同館の歩みの中でも前史として扱われてきた経緯がある。

本県における博物館についての歴史を考えるとき、戦乱の廃墟の中から残欠文化財の収集を中心とした資料収集や展示公開活動を、博物館活動の始まりであるとする、戦後を起点として博物館史を考えることは十分とはいえない。たとえ、沖縄戦で壊滅していようとも郷土博物館（その前身は教育参考館）の存在は、少なくとも、それより9年以上遡ることができるからである。

本稿では、首里城北殿を改築した沖縄県教育会附設郷土博物館を本県における本格的な博物館施設の嚆矢として捉えられ、設立の経緯や資料目録を再編、掲示し、収蔵資料の傾向などに言及してみたい。

## 2. 「郷土」という概念

郷土とは、一般的にふるさとを意味することばである。広辞苑<sup>4)</sup>によると、「①生まれ育った土地、ふるさと、故郷。②地方、田舎、村。」また、「郷土教育」の項目には、「郷土及び郷土的生活共同体への愛着と理解を重視する教育。郷土を教育の出発点とし、方法的にも郷土の教材を中心として用いる。ドイツの教育思潮を受けて昭和初期に普及」とある。その郷土を冠する施設名称の「郷土博物館」は、今日ではあまり施設名称として使われることが少なくなった。現在、本県で沖縄市立郷土博物館のみがその名称を用いている。この場合の「郷土」とは、その土地の自然・歴史・文化・民俗を包含する用語として使用されている。今日の博物館等施設の名称に使用される用語で流行っている名称に、「センター」がある。「中心」や「拠点」、「発信する場」という意味が付加されている。「歴史文化センター」、「自然文化センター」と用いる。従来の「博物館」という堅いイメージを一新し、より親しまれる、地域文化を創造する拠点としての博物館づくりの息吹が感じられる。元来、博物館のイメージには、目新しくないもの、また使い古されたものや、古い文物の保存場所、お蔵など、とにかく使わなくなつたもの、使えなくなつたものを集める場所、極言すれば、「物の墓場」などという暗いイメージが住民の抱く博物館像にはある。これらの先入観を払拭し、新鮮なイメージを与えるための施設名称はとても重要である。

中身で勝負とばかりに、名称に対する無頓着な姿勢よりは、博物館の個性を引き出すために名称からこだわることは理解される。

今日の「〇〇歴史文化センター」や「〇〇歴史民俗資料館」という名称同様に、かつて「〇〇郷土博物館」という名称も、全国津々浦々まで浸透した時期があった。本県初の本格的博物館の先駆となった沖縄縣教育會附設郷土博物館は昭和11年7月4日に設立された。実は、この時期に全国的に郷土博物館が積極的に設立されている。本県における設置についてもこの流行の中で位置づけることが可能である。

この郷土博物館設立運動は、大別して三つの脈絡で説明されてきたと久保内加菜<sup>5)</sup>は指摘する。「文部省による郷土愛護、国民教化政策」、「郷土教育連盟などによる郷土教育運動」、そして「昭和天皇の即位（大典）記念事業」として博物館設置の熱が急騰したという。この場合の「郷土」という概念については現在との時代的な差異がないのかどうか検討を要する。すなわち、現在的な解釈の意味なのか、あるいはその時代背景の脈絡で別な意味や意志が隠されているのかということである。

1912年（大正元）に内務省の外郭団体として史蹟名勝天然紀念物保存協会が組織された。その後の1919年（大正8）に史跡名勝紀念物保存法が発布されることになった。明治末期頃から自らの地域に存在する、今で言う文化財的資産の保護運動の萌芽がみてとれ、その機運が郷土博物館設立を醸造させていくことになる。

### 3. 沖縄縣教育會附設郷土博物館設立経緯と運営

本県初の博物館施設は、沖縄縣教育會という民間の教育団体の機関によるものであった。そのような組織が何故に博物館施設を設立、運営をおこなったのであろうか。

#### (1) 沖縄縣教育會

沖縄縣教育會は、1886年（明治19）1月25日に沖縄私立教育會として発足した本県最初の組織的教育団体である。設立の目的は、教育上の施策を翼賛、すなわち手助けし、本県教育の普及改良及び上申などを図ることとしている。創立当初の会員数は、225人で、次第に増加していく。

「沖縄教育會沿革大要」（『沖縄教育』第31号）には創設当時の状況が次のように記される。「沖縄教育會は明治19年の創立にして初め沖縄私立教育會と称す 当初本県の状態は南洋に僻在せる一孤島にして内外交通の便なく彼我諮詢の利に乏しく殊に置縣日尚ほ浅く庶績稍々緒に就くと雖も教育事業の如き未だ俄かにして之が完全を期すべからずものあり

本縣学務當局者及本縣尋常師範学校中校教官の職に在る者並に民間一部の有志者此に見る所あり相謀りて以て沖縄私立教育會を興し 官民の間に立ちて務めて学政施設の改善を計り 本縣教育の發展を期し施政上聊か翼賛する所あらんと（中略）依て県下教育者及官

民有志者を以て一団となし事務所を本県尋常師範学校内に仮設し諸般の計画に着手したり（以下略）」

以上からみれるように、沖縄縣教育會は、設立当初から縣學務課と強く結びつき、行政主導の中で成長してきた。沖縄では置縣後、旧慣温存政策がとられたが日清戦争の前後から国家主義の教育方針が強化される中で、縣教育會も成長してきたのである。この頃には、同会の總裁に県知事、会長に縣學務課長や師範學校長が就いていた。同会は、県政當局の外郭団体として、教育的分野はもちろんのこと、他の分野においても県政の側面的支援団体であったと指摘される。

会の名称は創立以来、4回変更されている。1891年（明治24）に「沖縄縣私立教育會」と改め、1898年（明治31）には「社團法人沖縄縣教育會」、さらに1904年（明治37）には「沖縄教育會」、そして1915年（大正4）には「沖縄縣教育會」と名称を替えた。

同会の事業は、「教育及び学術技芸に関する事項の研究、雑誌の発行、図書の発行、講談及講習会並びに其他本会の目的を達するに必要な事項」であった。教員相互の意見發表や現職教育などの場を提供した雑誌は、終始「論説學術資料雜誌報法令報其他教育上緊要の事項」の方針のもとに編集された。組織名称の変更同様に、雑誌名も「沖縄私立教育會雑誌」（1886年）、「沖縄私立教育會記事」（1887年2月）、「沖縄私立教育會雑誌」（1890年7月）、「沖縄縣私立教育會雑誌」（1891年8月）、「琉球教育」（1895年10月）、「沖縄教育」（1906年3月）と6回変更されている。発行は、月刊、隔月刊あるいは年2、3回程度の年もあった。

最も社会教育的な事業は、講談及び講習であったが、これらの事業は総会や常集会などをを利用して行われた。特に講習会は、1900年（明治30）以後、毎年開かれ、教員の現職教育が行われた。さらに教育普及事業として、教育品展覧会が開催され、教員、児童生徒、父兄などに学校教育についての知識普及が図られた。1894年（明治27）3月1日から5日間開催された展覧会は、14,191点が出品され、26,319人が参觀したという（「沖縄教育」第31号）。明治34年1月17日付けの琉球新報では島尻郡教育品展覧会規則が掲載されている。教育會は設立当初の6月には中頭郡の支部を設置したのを皮切りにその他の郡区に支部組織を設立し、拡大していった。そして、これらの支部（郡区単位）が地域の誇りをかけて、その実績を競い合うようになってくる。

明治37年7月21日の琉球新報では、「教育界における三郡長」とそれぞれの支部の性格について各郡長の気質になぞって論評している。

「中頭は水滸伝的でなかなか突飛なことをやる國頭は所謂キイレで善く云えば温順過ぎる島尻は中間にありて政略家と云いべきか▲換言せば齊藤氏は（島尻郡長）智的、喜入氏（中頭郡長）は情的、朝武士氏（国頭郡長）は意的人物である。【中略】島尻と中頭とは

活動して事業をおこすに勉む併し中頭は事業をおこすが樂しみで島尻は強いておこすので全然性質が違う國頭は牛歩の積か容易に手を出すぬ・・・朝武士氏は何処でも仕事に熱心して敢えて他を顧みない齊藤氏は首里と那覇能く変に処するのがうまい喜入氏に至っては宮古八重山の如き変手古な処には気が乗らない人である。」（括弧は筆者による）

さて、明治34年1月19日付け琉球新報に掲載された島尻支部教育部の教育品展覧会の規則では、次のように事細かく出品要領が記されている。以下は5月に高嶺尋常小学校内で同展覧会を開催するための規則である。

展覧会の開催は、「本会は汎く初等教育に関する諸品を蒐集陳列して公衆の縦覧に供し教育の発達上進を図るを以て目的とす」とある。開会時間は毎日午前8時から午後3時までとし、出品作品は、「県内各中等の学校其他より参考品の出品を乞ひて陳列することあるべし」とある。経費は、「部会費島尻郡各間切費の補助及び有志者の寄附金等を以て弁するもの」となっている。出品物は次のとおり4部に分けられる。

## 第1部

第1区 本郡各小学校生徒の製作品（習字、図画、作文、裁縫及び手工芸品刺繡押絵毛糸細工等）

第2区 他郡区及び他府県各小学校生徒の製作品（習字、図画、作文、裁縫及び手工芸品刺繡押絵毛糸細工等）

## 第2部

第1区 教授管理に関する新案（器具絵画、標本掛図額教授細目教案及建物敷地等の図案又は雛形諸規則諸表簿類等）

## 第3部

第1区 歴史地理に関する絵画模型地図地球儀の類

第2区 人体図及解剖模型等

第3区 動植物鉱物の標本掛図額

第4区 理化学機械口物標本模型類

## 第4部

第1区 参考品（古器物古今の有名書画類）

第3区 参考用図書雑誌類

以上のとおり、第1部は生徒用、第2部は教諭用、第3部は業者用、第4部は一般用として理解される。

## (2) 教育参考館から郷土博物館へ

沖縄県教育會は本県の自然及び文化の紹介、研究のために1926年（昭和元）から「教育参考館」の設立を計画し、翌年2月には「教育参考館設立に関する協議会」をつくり、建設委員を委嘱している。これら建設委員会は5つの部会によって組織された。第1部会は書画、書籍、写真、版木、彫刻の部会。第2部会は漆工、陶磁器、染織工、木竹工、金石工、象牙工、紙皮工、建築の部会。第3部会は政治、経済、宗教、産業、交通、風俗。第4部会は動物、植物、鉱物。そして第5部会はその他教育参考品の部会。これらの部会によって、展示計画や収集・購入資料のリストづくりが調査されてきたと考えられる。

同施設の目的について、教育會主事島袋源一郎は「置縣以来50年有余郷土文化の価値を認識せざりし為これら貴重なる資料も或いは県外に流出し或いは散逸湮滅しつつある現況にありき、本会即ち茲に鑑みる所あり」と語り、貴重な文化財の流出を危惧するとともに琉球文化に対する価値観が軽減し資料自体の湮滅を恐れていたことが伺える。同館立ち上げの資金については、毎年の小学校児童ノートの印税など数百円が蓄えられてきた。1932年（昭和7）には積立てられた基金が5千数百円になったことから、この年から資料（参考品）の収集作業が開始され、書画をはじめ旧藩時代の製作された漆鬆器、琉球紅型衣類、調度家具、陶器、石器など1千数百点が集められたという。そして、それらの収集された資料は同年に完成した昭和會館内（那霸市旭町）の教育参考館に仮陳列され、一般観覧に供された。

収集品を集める際のリストづくりは、各支部で開催された教育品展覧会の中で第4部第1区に参考品として古器物古今の有名書画類の出品要領があることから、全県的な古器物や書画類などの美術工芸品の把握ができたものと思われる。ただ、これら展覧会に旧家が所持する古美術品がどれほど出展されていたかの出品リストは現時点では確認できない。

昭和會館は、沖縄県教育會の施設として、昭和天皇即位の御大典事業のひとつとして1928年（昭和3）に計画された。県下2千数百の教職員及び男女青年団が協力して建設資金2万円を造成し、昭和6年に起工、翌年に竣工した。1932年（昭和7）11月10日に開館式が開催され、同館には教育會、郷土協會、奨學會、参考館などが入居することになった。

1934年（昭和9）3月には、郷土博物館建設実行委員会が昭和會館において開催された。同年7月12日には郷土博物館の設置場所を首里城北殿と決定し、同施設の所有者である首里市と建物使用の契約を締結した。翌年から外部の工事入札を行い、内部の陳列棚新設工事を昭和11年3月末で終了した。6月18日には昭和會館から北殿への移転が決まり、19日、20日で荷造りし22日から24日までの4日間で荷物運搬をしたという。その荷物量はトラック12回分であった。1千数百点の資料をはじめ関係備品や書類などがその主たる中味であった。6月25日から10日間で陳列作業が行われ、7月4日の開会式当日の午前中まで作業は

続いたという。

1936年（昭和11）7月30日の沖縄縣教育會代議員会において「沖縄縣教育會教育参考館は之を沖縄縣教育會附設郷土博物館と改称し、博物館の経費は参考館の予算を以て充つ」と記されている。ここに、昭和7年に設置された複合施設であった昭和會館内の教育参考館が施設を単独化させるとともに、名称も「沖縄縣教育會附設郷土博物館」に改称し、昭和7年以降収集された資料を展示公開する新たな場所を得て、本県における本格的な博物館施設として誕生することになった。

この事業の推進役を果たした団体が沖縄郷土協会であった。同団体の担当者が（主幹）が、昭和7年に沖縄縣教育會主事に就任した島袋源一郎であった。首里城北殿の賃貸者は沖縄郷土協会であった。同協会が首里市から無償貸与を受け、修理したのちに、生まれ変わった北殿を沖縄縣教育會に委譲したのである。

沖縄郷土協会は1927年（昭和2）に設立された機関で、同年に来県したレニングラード大学教授兼博物館長のシュミット博士の提案が契機であったとされる。同博士は「沖縄という貴重な文化を持つ島々に統一的研究団体や博物館が無いのは遺憾であり、是非その設立が急務である」と訴えた。そのことが郷土研究者の心に強い印象として残ることになる。その機運に促されて沖縄郷土協会が設立されることになった。シュミット博士提案の統一的研究団体と博物館は、同博士が来沖して9年後の昭和11年には達成されることになった。そこには沖縄縣教育會、沖縄郷土協会、首里市の機関団体の尽力をはじめ県下の教職員、青年団、そして多くの県民の理解と多額の浄財があった。

#### 4. 沖縄縣教育會附設郷土博物館収蔵資料の傾向

本県初の本格的博物館として誕生した沖縄縣教育會附設郷土博物館の収蔵資料数は、教育参考館時代の資料を含めると同時に同会主事島袋源一郎の精力的な資料収集活動等によって、昭和14年11月現在1,433件、点数に勘算すると少なくとも5,404点を越えた（表1郷土博物館資料目録の種別件数及び点数）。少なくとも5,404点ということは、博物館絵葉書各種、貨幣、石器や標本の部などの資料については「各種」「数種」との表記があり実数が不明であるため1件1点で算出したことによるからである。

さて、その収蔵品の傾向を図1郷土博物館収蔵品件数からみると、陶器、染織、風俗資料、書画写真及彫刻文房具の順になる。今日、沖縄工芸の代表格である漆器資料が少ないのは意外である。点数からみると、最も多い資料が紅型の型紙で3,600点となっている。その次が陶器資料で422点、書画が168点、石碑拓本143点、家具80点、古琉球服装類67点などの順になっている。これら図表は昭和14年11月15日に発行された郷土博物館資料目録（当館収蔵）に基づくものである。同目録では資料の種別毎に10部に分類され、資料の古

表1 郷土博物館資料目録の種類件数及び点数（昭和14年11月15日発行の目録より）

項目		小項目		大項目		備考
大項目	小項目	件数	点数	件数	点数	
図書及版木				90	202	点数不明あり
図表				19	51	
書画写真及彫刻文房具				192	283	
	書画	92	168			点数不明あり
	写真	50	51			
	彫刻	34	46			
	文房具	16	18			
	小計	192	283			
金石文拓本				191	191	
	石碑	143	143			
	鐘銘	13	13			
	扁額	11	11			
	古琉球彫刻	8	8			
	木彫	16	16			
	小計	191	191			
染織				243	3892	
	古琉球服装類	46	67			
	絆及縞物	37	37			
	花織絹織ヤシラミ類	15	15			
	染織手本及紙類	2	18			
	風呂敷及覆沙	3	8			
	琉球紅型類	140	3747			
	小計	243	3892			
漆器				63	73	
風俗資料				245	275	
	家具	68	80			点数不明あり
	金属製品	32	39			
	木竹器及藁細工	51	57			点数不明あり
	玩具	16	16			点数不明あり
	身装具	28	28			点数不明あり、印譜各種が漆器の部と重複6)
	度量衡器	7	11			
	石製器具	4	4			
	貨幣	6	6			点数不明あり
	舞楽器	11	12			
	武具	19	19			
	葬具	3	3			
	小計	245	275			
陶器				380	427	
	陶器	375	422			
	発掘瓦瓶	5	5			点数不明あり
	小計	380	427			
石器				5	5	点数不明
標本				5	5	点数不明
合計				1433	5404	

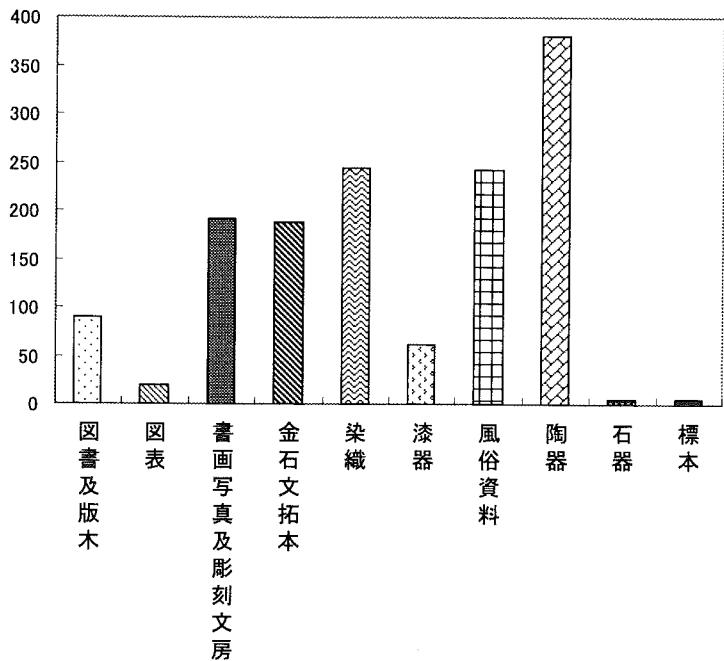


図1 郷土博物館収蔵品件数

い順に記載がなされている。また、特に数量の欄は記されていないが、資料名や摘要の欄に数量表示のあるものがある。そこで、その目録の再編集を試みたのが表2の再編した郷土博物館資料目録（五十音順）である。資料名を五十音順に配列してみた。また、数量の欄を新たに設けた。この目録では、資料名で同一名称が並ぶことになる。そこでは用途や文様が容易に比較することができたりすることで、資料の全体像がより把握しやすくなるメリットがあるように思える。

この目録によって、昭和10年代の沖縄の美術工芸、歴史、民俗、自然史資料の状況を把握する上で役に立てば幸いである。これら収集された資料を通して、当時の沖縄文化に対する価値意識の断片を知る資料になるものと思われる。この貴重な資料群は1944（昭和19）の十・十空襲後、本土疎開を検討されたが、許可されず、止むなく首里城内の洞窟に避難させられたという。戦後、同資料の管理者であった仲吉朝宏が文化財をかき集めようとしたが、一物もなかったという。これら資料の一部が当館に収蔵されていると思われるが、十分な確認の手立てがない。これら資料の所在確認などその詳細な分析は今後の課題したい。

#### 【註記】

- 1) 『平成13年度版 文化行政要覧』33~36p.p沖縄県教育庁文化課平成13年8月

- 2) 博物館法で規定される博物館とは「登録博物館」または「博物館相当施設」という。ここで用いる博物館等施設とは、登録博物館及び博物館相当施設に加え、それ以外のいわゆる博物館類似施設も含んでいる。
- 3) 『博物館研究』(Vol.36 No.3) 7 p.の平成11年度博物館園数による（平成13年3月25日・財団法人日本博物館協会編）。この算出された施設数は、日本博物館協会加盟の数である。本県の場合は、69の博物館等施設はのうち、同協会加盟施設数は、33施設しかない。したがって、沖縄を例にとって全国の施設数を推し量ると、少なくとも2倍近くの約7千施設になる。
- 4) 新村出編「広辞苑第2版補訂版」の「郷土」の項目による。
- 5) 久保内加菜 東京大学教育学部社会教育学研究室
- 6) No.966の印箱各種が「漆器の部にあり」で重複しているため、29件を28件に1件減した。

#### 参考・引用文献

- 沖縄県教育庁文化課編『平成13年度版 文化行政要覧』沖縄県教育委員会平成13年8月  
新村出編『広辞苑 第2版補訂版』岩波書店 1980年
- 財団法人日本博物館協会編『博物館研究』(Vol.36 No.3) 平成13年3月25日
- 久保内加菜『昭和初期「郷土博物館」の思想』『社会教育学・図書館学研究』第19号  
東京大学教育学部社会教育学研究室 1995年
- 田港朝昭「第6編社会教育」『沖縄縣史第4巻各論編3』琉球政府 1966年
- 琉球政府『沖縄縣史第18巻資料編8新聞集成(教育)』琉球政府 1966年
- 園原 謙「沖縄県の文化財保護史—昭和初期から琉球政府時代までの活動を中心に」  
『沖縄県立博物館紀要第26号』沖縄県立博物館2000年

表2 再編郷土博物館資料目録（五十音順）

1 図書及版本の部

No.	書名	編著者	摘要	数量
1	亜細亜言語集			5
2	伊波貝塚発掘報告	大山 柏	大正9年より発掘11年発行	1
3	王羲之書		藩政時代の習字手本	1
4	大阪繁昌記			
5	沖縄教育	縣教育會	毎号	1
6	沖縄縣尋常小學讀本	文部省	明治30年より34年迄に発行 8冊	※ 1
7	沖縄縣人物風景寫眞帳	仲宗根源和		8
8	謡の本	本土より傳來	藩政時代使用の謡本	1
9	菓子例帳	不明	旧藩時代 各種御菓子製法	1
10	樺太評論			1
11	灸術原本	不明	旧藩時代灸術手本	1
12	舊藩習字手本(二部)	不明	藩政時代の習字手本	1
13	義務教育延長記念號	縣教育會	第31号増大号	2
14	應報鑑	禍住正兄	二宮尊徳先生研究資料	1
15	教條	中山評定所	藩政時代の庶民讀本	1
16	元名書畫人名錄			1
17	公學校用國語讀本	台灣總督府	大正15年発行	1
18	孝經集註	日本 近藤元粹	漢文	1
19	考古圖鑑	京都大學	考古学陳列室図鑑	1
20	校正日本外史	賴囊	山陽先生著日本史12冊	12
21	古瓦模様集	大和史學會	南都七大寺古瓦模様集	1
22	五經字類大全	佐野元恭	詩經、書經、易經、禮記、春秋	1
23	古文孝經	日本、線引泰、	漢文	1
24	蔡溫國頭巡察詩集	蔡溫	國頭巡察中の詩集	1
25	左傳		14冊	14
26	三學経	支那(不明)	藩政時代の初学者の漢文教訓書	1
27	三字経註解備要(上下)	宋の伯厚	三字経註釈漢文	2
28	算法記	不明	藩政時代の算術教本	1
29	三民主義教科書	中華民國	支那の小學教科書(革命思想)	1
30	仕明請地帳	不明	琉球藩仕明手形帳	1
31	賣語教	支那(不明)	藩政時代の初学者の漢文教訓書	1
32	四本道家禮	不明	旧藩時代のしきたり例規集	1
33	島尻部会記念號	島尻郡部會	明治45年発行	1
34	上海繁昌記			3
35	獻替錄	支那	漢文、善を勧め惡をすてて君を	1
36	十八史略校本	元の會先之	支那の史書	1
37	朱柏廬先生家訓增註		旧藩、漢文本	1
38	小學	後藤點	漢文小學句讀四冊	4
39	書秋		8冊	8
40	清國染織刺繡圖案	農商務省		1
41	清國地誌		16冊	3
42	尋常小學國語讀本	文部省	大正6年より改正発行	1
43	尋常小學讀本	文部省	明治42年改正発行12冊	12

44	秦文寫(名城里之子親雲上)		志士林世功の筆寫本	1
45	聖諭廣訓大意(木版)	琉球和訳	康熙雍正兩皇帝の詔を布衍せる	1
46	奉文、呈文、啓文寫	不明	漢文の文案集	1
47	草木六部耕種法		12冊	16
48	總訳亜細亞言語集			5
49	統欽思堂集	蔡大鼎汝霖	詩集	1
50	孫衣言漢文集		孫衣言氏の漢文	1
51	太上感應篇(木版)	福州 丁相	琉球にて翻訳せる和文教訓書	1
52	地学教本			6
53	忠經読本	日本 近藤元粹	漢文	1
54	中山王書簡集	琉球藩	幕府及び薩摩への御書	1
55	中山詩文集(木版)	程順則	程順則其他球陽人士の詩集	1
56	地理全志			10
57	東京帝室博物館案内			1
58	東方朔秘傳書			1
59	東游草(木版)	鄭元偉外二名	中山慶賀使東遊詩集	1
60	帝室博物館年報	帝室博物館	目録と図鑑	1
61	東京帝室博物館目録			1
62	陶器講座	雄山図		1
63	童子教	支那(不明)	藩政時代の初学者の漢文教訓書	1
64	童子撫談	陳暢園	藩政時代の初学者の漢文教訓書	1
65	動物學	田中芳男	博物館発行彩色付	1
66	東遊草			1
67	奈良帝室博物館総目録	帝室博物館	目録	1
68	二十四考	元の郭居業	藩政時代の初学者の漢文教訓書	1
69	日用文稽古	不明	旧藩時代 和文(日用文)作例	1
70	日本地誌要略			3
71	博物館絵葉書各種	各博物館	風俗考古学等の資料	※ 1
72	版木	中山詩文集		1
73	版木	聖廟記		1
74	版木	燕遊草		1
75	百一新論 上下			2
76	服制並葬禮定	不明	旧藩時代 服制、忌服定等	1
77	富國捷徑	報徳教會	二宮尊徳先生研究資料	1
78	報徳學療家談	岡田良一郎	二宮尊徳先生研究資料	1
79	報徳外記	齋藤高行	二宮尊徳先生研究資料	1
80	報徳手引草	福住正兄	二宮尊徳先生研究資料	1
81	北上雜記			3
82	友禪研究	野村正次郎	京都友禪染めの研究	1
83	俞曲園先生		藩政時代の習字手本	1
84	輿地誌略			12
85	四町文言	不明	旧藩時代 那霸西村	1
86	六諭衍義(木版)	清国 范鉉	程順則普及徳川時代教訓書	1
87	六諭衍義(木版)		京都版	1
88	琉球新誌			1
89	龍動繁昌記			2
90	和文の呈文			1

2 図表の部

	題 目	作 製 者	摘 要	数量
91	石鼓山全景			1
92	唐船設計圖			1
93	喜屋武村古地圖		2百年前古地図写	1
94	舊藩生理卷物		1巻	1
95	舊藩庭作手本		6枚1組	6
96	薩摩琉球古地圖		数百年前の古地図	1
97	支那全圖		4百余州古地図	1
98	島尻郡村圖		土地整理、15葉	15
99	鍼灸圖解			1
100	接貢船設計圖			1
101	舊藩弓術手本		3幅	3
102	大日本全圖		古地図	1
103	台灣地圖			1
104	治家捷徑		蔡温著作表解	1
105	那霸泉崎古地圖			1
106	日本城郭の圖			1
107	幕府時代学校圖		各藩学校図、12葉	12
108	北京城内圖		北京古地図	1
109	琉球歴代対照表		歴代王統表	1

51

3 書画、写真及び彫刻文房具の部

書画

	題 目	作 製 者	摘 要	
110	按司禮装の圖	義村朝義氏自畫像		1
111	東久世通禧伯書		渡久山朝恭氏寄贈	1
112	殷元良花鳥の圖			1
113	于甲光	尚泰王冊封副使		1
114	王文治書		尚穆王冊封使隨員にて有名な書家	1
115	王楫書	尚貞王冊封正使	凡250年前	1
116	何冠英書		支那の書家	1
117	角倉末吉貿易船の繪		清水寺国寶額の寫	1
118	華國 芭蕉	華國		1
119	勸善懲惡(2幅)		仏教を愚民に誨ふるの圖	2
120	弓術聞書卷物			1
121	魚龍觀音		元護道院御寶物 尚敬王より拝領と伝ふ	1
122	宜湾朝保書		八田知紀の弟子	1
123	宜湾外短冊集			1
124	向元瑚畫	小橋川親方		1
125	高人鑑書(大字)	尚育王副使		1
126	高人鑑書	尚育王副使		1
127	御開印吉書			1
128	吳師虞山口親雲上 牛の繪		護国寺出陳	1
129	湖城溪南書	湖城溪南		1
130	吳著溫 山水	屋慶名氏		1
131	古琉球書手本		巻物	1
132	齊鯤書	尚灝王冊封正使	凡130年前	1

133	齊鯢書	尚灝王冊封正使		1
134	紫微鑒駕の圖		上棟式に使用せる軸物	1
135	謝曦書		支那の有名なる書家	1
136	謝曦書		支那の有名なる書家	1
137	三味線名称		圖解	1
138	周煌額(功德希有)			1
139	首里那霸鳥瞰圖模寫			1
140	尚育王書(楷書)		尚泰王の父君	1
141	尚育王書(草書)		尚泰王の父君	1
142	尚溫王軸物			1
143	尚溫王書			1
144	尚溫王卷物			2
145	尚灝王書			1
146	尚健書(伊江王子)		日高詠俊氏寄贈	1
147	尚健書(伊江王子)		1幅	1
148	尚賢書	尚賢		1
149	嶂山畫	首里の仲宗根		1
150	尚純公卷物			1
151	尚慎書	尚慎(玉川王子)	二幅	2
152	尚慎書	尚慎(玉川王子)		1
153	尚典候(詩集)		尚泰候御長子	1
154	尚典候書			1
155	鍼灸圖解		1巻	1
156	進貢船接貢船入來の圖			1
157	慎思九畫(虎)		琉球の有名なる畫家(泉川寛英)	1
158	慎思九畫(廬に鶴)			1
159	全魁額(湛淵堂)			1
160	全魁書	尚穆王冊封正使	2幅	2
161	大工廻書	大工廻		1
162	田名雪莊書	田名雪莊		1
163	長執宏書	長執宏		1
164	趙新書	尚泰王冊封正使	凡70年前	1
165	趙新書	尚泰王冊封正使		1
166	趙文楷額	尚溫王冊封正使		1
167	趙文楷書	尚溫王冊封正使	凡134年前	1
168	陳元輔書			1
169	鄭永泰書(卷物)	鄭永泰		1
170	鄭嘉訓(聯)			1
171	鄭嘉訓畫		文人畫、稀に見る所	1
172	鄭嘉訓書(大字)		琉球の有名なる書家	1
173	鄭嘉訓書(小幅)		琉球の有名なる書家	1
174	鄭嘉訓書(中幅)		琉球の有名なる書家	1
175	鄭元偉書			1
176	鄭元偉書(卷物)			1
177	鄭宏獻書			1
178	東谷和尚書	東谷和尚		1
179	渡海觀音頭畫		傳自了	1
180	渡嘉敷親雲上書			1

180	渡嘉敷親雲上書			1
181	長嶺華國(蘭と竹)		首里の人(琉球最後の書家)	70
182	日本城郭圖			1
183	野村安趙書	野村安趙	歌野村親方	1
184	費錫章書	尚穆王冊封副使		3
185	費錫章書		3幅対	1
186	筆山畫(蘭)	筆山		1
187	ペスタロッチ、スタンツ孤児院油絵	津嘉川榮興模寫		1
188	毛允良畫 蓮			1
189	毛世輝書	毛世輝(我謝盛保)		1
190	毛世輝畫(蘭)		我謝盛保の得意の蘭	1
191	屋慶名政喜觀音圖			1
192	八田知紀書	八田知紀	薩摩和歌の名人	1
193	李鼎元書	尚溫王副使		1
194	李鼎元書	尚溫王副使		1
195	琉球藩辭令		旧藩時代の辭令書各種	※ 1
196	琉球風俗畫	作者不明		1
197	琉人、支那服装		琉球使者支那に於て寫さしむ	1
198	林鴻年書	尚育王冊封正使	凡100年前	1
199	林鴻年書	尚育王冊封正使		1
200	林鴻年書	尚育王冊封正使	小型 2幅	2
201	林麟焔書			1

168

## 寫真

202	按可以下禮裝			1
203	医師留学生支那裝束			1
204	殷元良畫 鶲			1
205	殷元良畫花鳥			1
206	江戸上り御座樂			1
207	王世子御蟒緞			1
208	王妃御轎			1
209	亀甲墓			1
210	貴婦人老女			1
211	教育會寫真帖			1
212	宜湾大人和歌			1
213	久高島外間家藏中山王御衣服			1
214	結婚式			1
215	荒廃の南殿			1
216	古典劇二童敵討			1
217	蔡溫筆蹟			1
218	姉妹敵討			1
219	首里城北殿(修理後の本館)			1
220	首里聖廟			1
221	首里那覇古地図写真			1
222	首里那覇鳥瞰図写真			1
223	小学校全景			1
224	尚家おもろさうし			1
225	程順則肖像			1

226	自了畫白澤			1
227	石彫唐獅子			1
228	男子断髪装束			1
229	中山王御轎			1
230	中山王御冠			1
231	中小学校写真			1
232	綱曳行列教盛装束			1
233	程順則六諭筆蹟			1
234	傳鬼大城拝領之刀			1
235	独逸皇帝御贈呈の時計			1
236	東京行芸能団			1
237	唐御衣裳			1
238	唐御衣裳御下著			1
239	陶製唐獅子			1
240	今帰のろ及阿應理惠按司曲玉			1
241	那覇桟橋			1
242	佩玉、御膝當、御足袋、御襪			1
243	帕盛装肖像			1
244	民謡と舞踊			1
245	陽石			2
246	琉球音楽名人会			1
247	琉球三十六島全圖			1
248	琉球紅型			1
249	琉装禮服の老人(男)			1
250	林心欽書			1
251	老人夫婦			1

51

## 彫刻

252	板彫觀音像			1
253	印籠	上與那原作		1
254	御菓子型			1
255	御土產印抵木彫			1
256	親子獅子(木彫)			1
257	仮位牌			2
258	橋欄石柱			1
259	金彫盃			1
260	組立枕			1
261	黒本印籠			2
262	懸魚	首里城書院		1
263	執心鐘入夜叉の面			1
264	鐘鬼	新垣筑登之親雲上作		1
265	神社柱懸の面			3
266	石彫獅子(小型)			1
267	石棺蓋(破片)			1
268	象牙編笠彫			1
269	大工墨壺			1
270	彫刻位牌			1
271	京太郎面及び傀儡			1

272	傳自了短刀鞘		尚琳王出陳	1
273	能面			2
274	鳳凰戸		天王寺、殷元良図案	1
275	彫木刀箱		新垣大吉氏出陳	1
276	面	新垣筑登之親雲上作		1
277	孟宗竹聯額			1
278	木製燈			1
279	木彫煙草入			1
280	木彫ゆあか汲			1
281	百按司墓木彫			1
282	椰子印籠	長濱宗章作		1
283	椰子彫物(煙草入)			1
284	龍淵橋石欄羽目			8
285	琉球シャモジ			1

46

## 文房具

286	大硯			1
287	旧藩大算盤			1
288	宜湾遺品硯箱			1
289	宜湾朝保愛用香筒 (新古今和歌集彫付)			1
290	金属製筆架			1
291	見台			1
292	古琉球印材			1
293	蔡溫遺品硯箱			1
294	支那算盤			1
295	硯			1
296	八野畫硯			1
297	八野硯(尚琳男)			1
298	瓢形大硯			1
299	筆立			1
300	蒔絵文箇			1
301	矢立(三)			3

18

## 4 金石文拓本の部

No.	題 目	所 在 地	建設年月・摘要	数量
302	哀悼碑	首里記念運動場	明治26年・師範同窓会並校友	1
303	あざなばん比屋根墓	具志川村赤道原	康熙43年	1
304	阿丹川碑	首里當藏	嘉慶19年	1
305	阿弥陀碑		康熙12年・海藏院開山有盛筆	1
306	安國山樹花木記	園比屋武嶽	宣德2年・尚巴志王代建立 琉球最古の碑	1
307	安國寺和尚墓	首里靈御殿山	雍正11年	1
308	伊江御殿墓碑	首里石嶺		1
309	伊江王子尚健墓	首里石嶺	大正12年・明治維新琉球慶賀使	1
310	池城墓	今帰仁村崎山	康熙9年・池城殿内祖先	1
311	石敢當	首里赤平	不明・宜湾朝保家にありしもの	1
312	石敢當	首里汀良町	不明・伊舍堂殿内にありしもの	1
313	石田城碑文	識名はんた川	不明・文字不明	1

314	石火矢橋	豊見城村	康熙26年	1
315	醫生教習所記念	波上宮前	昭和3年・同所出身者一同	1
316	板敷橋記	一日橋	康熙28年	1
317	一翁寧公碑	首里寶口	嘉靖18年・全公功績記	1
318	一石一字碑	首里蓮華院	康熙32年	1
319	一品三拜	首里蓮華院	康熙31年	1
320	稻石記念碑	宮古平良町	宮古上布創業者	1
321	宇平橋	南風原村山川	不明・文字不明	1
322	浦添城碑	同城入口	萬曆25年・尚寧王代	1
323	雲根石髓	首里城内	乾隆21年・尚穆王冊封使全魁筆	1
324	江洲按司墓	具志川村江洲城下	不明	1
325	圓覺寺雄岳和尚墓	首里	不明	1
326	圓覺禪寺記	圓覺寺境内	弘治11年	1
327	園祖庭大和尚墓	園祖庭大和尚墓	不明	1
328	王舅達魯金大人	識名	嘉靖4年・同人壽藏の銘	1
329	奥武山公園開設記	奥武山公園	明治34年・大正天皇慶事記	1
330	大城按司墓	大里村	不明・麻氏祖先	1
331	大平橋碑	大平	萬曆25年・右ノ裏	1
332	夏氏大宗墓	越來村	咸豐3年	1
333	海安和尚墓	海安和尚墓	不明	1
334	改修牧湊橋	浦添牧港	乾隆9年	1
335	外人墓標	那霸台之瀬	英、米、佛、支各国人15名	1
336	改造池城橋	北谷町北谷	道光元年	1
337	改租記念碑	奥武山公園	明治40年・土地改正記念	1
338	歌人恩納ナベ記念	万座毛	恩納村有志者建設	1
339	活潑々地	首里城	嘉慶13年・尚灝王冊封使齋鯤筆	1
340	勝連按司塚		不明・文字不明	1
341	上儀保墓	首里	嘉慶6年	1
342	乾元亭	首里當藏	不明・村学校跡にあり	1
343	官松嶺記	同所下岡	弘治10年・官人松植を植う	1
344	菊隱和尚墓碑	首里	萬曆48年	1
345	北白川宮能久親王碑	佐敷村	大正11年・御寄港記念 沖縄史蹟保存会	1
346	儀間真常墓	那霸市住吉町	大正11年・沖縄史蹟保存會建設	1
347	宜灣朝保墓		大正11年・明治維新琉球慶賀副使	1
348	下馬碑	崇元寺	嘉靖6年・尚清王元年建立	1
349	源遠流長	首里城	道光18年・尚育王冊封使林鴻午筆	1
350	金剛土	辨ヶ嶽	康熙52年	1
351	金剛嶺	浦添経塚	不明・日秀上人遺跡	1
352	孔子廟碑記	那霸聖廟	康熙55年	1
353	廣德寺親方塚	首里末吉町	不明・全親方功績	1
354	国王頌徳碑	首里城前	嘉靖元年・尚真王頌徳	1
355	国王頌徳碑	首里鳥堀町	嘉靖22年? 文字不明かたのはな	1
356	國學碑記	首里聖廟	嘉慶5年	1
357	極樂山碑	浦添ようとれ	・英祖王墓	1
358	護佐丸墓	中城村	大正11年・琉球の楠公	1
359	御大典記念	波上宮	昭和3年	1
360	佐阿天橋	北谷村	乾隆42年	1
361	蔡氏大宗墓	那霸市外	嘉慶25年	1

362	蔡溫墓	首里	大正11年・大政治家志頭親方	1
363	蔡堅墓	那霸市外	道光10年・那霸儀間殿内祖先	1
364	佐敷興道墓	北谷城	不明・泊雍氏元祖	1
365	三殿下御上陸記念	与那原	大正12年・攝政宮・秩父宮・高松宮御立	1
366	三府龍脉碑	名護町	乾隆15年・遷都論駁論	1
367	山北今帰仁城碑	今帰仁城	乾隆14年・監守來歴記	1
368	山北今帰仁城址	今帰仁城	昭和3年・島袋源一郎斡旋	1
369	勢理客橋	浦添村	康熙30年	1
370	秀山和尚墓	北谷村玉代勢	乾隆25年	1
371	重修天女橋	首里城下	嘉慶3年	1
372	重修泊高橋	那霸高橋町	康熙33年・ヤラザ森築城	1
373	重修比謝橋	嘉手納	雍正8年	1
374	重修真玉橋	豊見城村	道光18年	1
375	重修臨海橋	那霸末吉町	道光18年	1
376	頌徳植樹碑	圓覺寺境内	弘治14年・仝上	1
377	尚巴志王遺跡	佐敷村城跡	大正12年	1
378	諸行無常	奥武の山	年代不明	1
379	新建國學碑	首里孔子廟内	嘉慶6年	1
380	新建儒學碑記	那霸聖廟	康熙58年	1
381	新建聖廟	首里孔子廟内	道光17年	1
382	新築石垣記	首里城繼世門	嘉靖25年・首里城石垣増築文字不明	1
383	新築見榮橋	那霸	乾隆9年	1
384	先王旧宅碑	西原村嘉手苅	乾隆3年・尚敬王の御筆にして内間御殿にあり	1
385	裝雲和尚墓	北谷村玉代勢		1
386	總管由来記	北谷村野國	乾隆16年・甘譜先生墓碑	1
387	袋中上人行化碑	縣立病院裏	大正13年・琉球神道記の著者袋中上人	1
388	大道松尾碑文	那霸興銀内	弘治15年	1
389	台湾遭難者碑	護国寺	明治31年・蕃人に殺害された藩民	1
390	寶樁碑	首里市儀保	嘉慶12年	1
391	田原法水記功碑	奥武山公園	大正2年・真教寺住職真宗開拓者	1
392	玉城朝薰記念	首里城	昭和8年・沖縄郷土研究會建立	1
393	秩父・高松宮殿下御立所	波上宮	昭和3年	1
394	北谷長老墓	北谷玉代勢	不明・臨濟宗大本山管長筆	1
395	忠魂碑	奥武山公園天朝山	大正4年	1
396	中山孔子廟碑記	那霸聖廟	康熙55年	1
397	中山第一	首里城	康熙58年・尚敬王冊封使徐葆光筆	1
398	腸谷靈源	首里城	嘉慶5年・尚溫王冊封使趙文楷筆	1
399	長老墓	北谷村玉代勢	乾隆31年	1
400	津嘉山森墓	具志川村	萬曆元年・知念大やくもい墓	1
401	津屋口墓	今帰仁村今泊	康熙17年・向氏具志川御殿祖先	1
402	程順則墓	那霸辻原	大正11年・琉球の儒学者君子名護親方	1
403	天恩無窮碑	国頭郡明治山	昭和7年	1
404	天界桂岩大和尚墓	たまおどん山	不明	1
405	独逸皇帝記念碑	宮古平良町	明治9年・ウイルヘルム1世陛下建設	1
406	豊見親井碑	那霸浄水場下	乾隆32年・宮古島豊見親旧宅の泉	1
407	南無阿弥陀仏	奥武の山	順治17年	1
408	西森碑記	宜野湾村マシキ村	雍正3年・天女沐浴の森川	1
409	日秀上人説法石	護国寺	大正12年	1

410	野國總管の墓	北谷町野國	大正11年・沖縄史蹟保存会建設	1
411	羽地王子朝秀墓		大正11年	1
412	羽地川改決	羽地村川上	道光10年・蔡温改決碑	1
413	比謝橋碑	嘉手納	康熙56年	1
414	飛泉漱玉	首里城	尚育王冊封副使高人鑑筆	1
415	フランス将校碑	運天港向岸	屋我地島西端にあり	1
416	ベテルハイム記念碑	護国寺	大正14年・宣教師イー・アル・ブル建設	1
417	本覺山墓碑	山川靈御殿	天啓4年・尚豐王御母	1
418	梵字碑	中城村渡口	不明・按司墓前にあり	1
419	馬氏墓	安謝港	道光26年・小祿殿内祖先	1
420	眞珠湊碑	首里城前	嘉靖元年・尚真王代眞玉橋架設	1
421	松尾碑文	首里鳥堀町	弘治14年	1
422	まわし原境口	首里平良	不明・旧藩境界石	1
423	万歳嶺記	首里觀音堂上	弘治10年 万歳を称へし所	1
424	源為朝公上陸之跡	運天港	大正11年・国頭教育部曾建設	1
425	宮里村墓碑	具志川村宮里	康熙43年	1
426	妙法蓮華経	那霸市若狭町	乾隆41年	1
427	妙法蓮華経	首里市鳥堀町	嘉慶3年	1
428	報得橋	兼城村	雍正10年	1
429	銘苅子墓	真和志村	康熙32年・天女の夫銘苅子	1
430	毛國鼎墓	安里	崇禎16年・中山正議太夫毛氏墓	1
431	八重山島義墓	那霸若狭町	明治18年・旧藩公用出羈中死者ノ墓	1
432	山里和尚墓	金武村伊芸	康熙59年	1
433	山田城毛氏墓	恩納村山田	乾隆5年・山田按司墓	1
434	やらざ森城碑	那霸港入口	嘉靖33年・ヤラザ森築城	1
435	遊山	浦添村城間	道光4年	1
436	読谷山王子墓	天久長松尾	康熙18年	1
437	落平碑	那霸市垣花	嘉慶13年	1
438	陸軍墓地	一高女校前	明治42年・置縣当初分遣隊	1
439	劉姓元祖墓	那霸辻原	不明・3基の碑あり	1
440	琉球夫子廟碑	那霸聖廟	乾隆21年	1
441	臨海橋	那霸末吉町	康熙52年・臨海寺橋	1
442	臨海橋繫船不許	那霸末吉町	康熙53年・臨海寺橋	1
443	靈脉流芬	首里城	同治5年・尚泰王冊封使趙新筆	1
444	湧田井	那霸湧田	同治3年	1

143

### 銘鐘拓本

445	圓覺寺鐘	圓覺寺	弘治8年・尚真王代	1
446	魏古城鐘	首里市役所	天順元年・尚泰久王代(越來城の墓)	1
447	国宝朝鮮鐘	波上宮	980年前の鋸造	1
448	相國寺鐘	天久聖現寺	天順元年・尚泰久王代	1
449	大聖禪寺鐘	名護護教所	景泰7年・尚泰久王代	1
450	中山王殿前之鐘	真教寺	天順2年・尚泰久王代	1
451	天尊廟鐘	天尊廟	景泰7年	1
452	天德山大鐘	圓覺寺	康熙26年・尚貞王代	1
453	天妃宮鐘	天妃宮	天順元年・尚泰久王代	1
454	天龍寺鐘	護國寺	景泰7年	1
455	萬壽寺鐘	末吉遍照寺	天順元年・尚泰久王代	1

456	臨海寺鐘	臨海寺	天順3年・尚泰久王代	1
457	靈應寺鐘	安国寺	景泰8年・尚泰久王代	1

13

## 扁額拓本

458	王文治筆	恩納村役場	數峯天遠の四字	1
459	海邦養秀	県立一中校	尚溫王筆元国学に掲ぐ	1
460	我樂嘉賓	県立図書館	長白全魁筆	1
461	歛會門	首里城	正門の額	1
462	迎恩	県立図書館	冊封使を迎えし迎恩亭の額	1
463	齊鯤筆	臨海寺	詩を彫刻せり	1
464	柔遠驛	県立図書館	福州琉球館の額	1
465	周煌筆	臨海寺	詩を彫刻せり	1
466	守禮之邦	守禮門	尚永王代	1
467	徐葆光筆	恩納村役場	松月有餘鑒の四字	1
468	瑞泉	首里城	瑞泉門の額	1

11

## 古琉球彫刻拓本(石彫及び木彫図案)

469	石灯籠	首里各所		1
470	觀蓮橋石欄	首里龍潭	牡丹、獅子、鳳凰等筆力非凡	1
471	須弥壇両側	圓覺寺	木彫、波に魚貝	1
472	礎盤	首里城		1
473	天山の石彫	首里天山	鶴亀、鹿、牡丹獅(石棺の蓋?)	1
474	佛殿礎盤の彫刻	圓覺寺	蓮弁の石彫他に類例をみず	1
475	放生池石欄	圓覺寺	国宝指定、花鳥獅子等	1
476	世持橋石欄	首里龍潭	貝類魚類水草等筆力雄渾	1

8

## (以下木彫)

477	天久宮向拝	那霸台之瀬	牡丹に獅子の木彫、力に富	1
478	沖の宮向拝	安里	欄間波の図案木彫、力に富	1
479	識名宮の向拝	真和志識名	象の木鼻及欄間の木彫	1
480	首里城弁ヶ嶽		建築拓本	1
481	守禮門	首里城前	木鼻柵梁その他の木彫	1
482	末吉宮向拝	首里社壇	象の木鼻及欄間の木彫、力に富	1
483	天尊廟	海上通り	正面向拝木鼻等木彫	1
484	天王寺御仏壇の引戸	郷土協会	雲に鳳凰の浮彫	1
485	天王寺仏壇梁	小禄村	雲龍と花鳥の木彫	1
486	天妃宮	海上通り	正面向拝木鼻等木彫	1
487	天満宮	那霸護国寺	木割及虹梁等の木彫	1
488	八幡宮向拝	安里	龍の木鼻及欄間の木彫、力に富	1
489	日時計台	首里城	旧藩時日影測定の跡	1
490	普天間宮	宜野湾村	正面左右の木彫	1
491	普天間神宮寺	宜野湾村	柱の柵その他の建築	1
492	八重山島拓本各種			1

16

## 5 染織の部

## 古琉球服装類

No.	品 目	摘要	数量
493	青芭蕉	古琉球按司の礼服	1
494	あしあげこむね		1
495	雨合羽	旧藩	1
496	大帶	5種 旧藩礼服用	5
497	オマントン御フイター		1
498	オマントン御フイター裏金襴		1
499	オマントン御フイター切地		1
500	御妹部手拭(オミナイテサジ)	海陸旅行平安祈願用	1
501	角帶	5種 旧藩平常用	5
502	唐船船頭服袋一揃	帽子、上衣、下着、胸當	1
503	旧藩王御着衣		1
504	巾胴衣	祭祀用	1
505	金襴フイーター		1
506	黒朝衣(クロテウ)	古琉球親方以下の礼服	1
507	サーチ(ハチマキ)	1種	1
508	祭祀用下袴	紋羽二重(貴族婦人用)	1
509	刺繡フイーター		1
510	下袴(カカン)	白地麻	1
511	下袴(カカン)	巾巾ヒダ付	1
512	下袴(カカン)	芭蕉(結婚式用等に用いたり)	1
513	下袴(カカン)	黒地木綿	1
514	上流 龍紋帶	男物	1
515	白麻手拭	男持	1
516	白朝衣(シロテウ)	古琉球喪服	1
517	頭巾(モウチャン)	3種	3
518	綱曳子供打掛		1
519	緞子胴衣	桜花織模様 青色	1
520	緞子胴衣	菊花織模様 赤色	1
521	緞子胴衣	扇面に鶴楓織模様 赤色	1
522	緞子綸子フイーター	10種	10
523	芭蕉胴衣	白地紹織鐵赤地	1
524	花染手拭(ハナゾメテサジ)		1
525	紅型手拭(ビンガタテサジ)	御祝用、結婚の時の御配り用	1
526	紅型胴衣(ドヂン)	紹織花模様中柄	1
527	紅型胴衣(ドヂン)	羽二重松竹梅に菊模様	1
528	紅型胴衣(ドヂン)	羽二重 松竹梅	1
529	紅型胴衣(ドヂン)	トンビヤン	1
530	紅型胴衣(ドヂン)	木綿紅型	1
531	ふいーはーさーじ		1
532	木綿胴衣	縞物	1
533	木綿胴衣	カスリ	1
534	読谷山手拭	毛糸ヌキモノ	1
535	涎掛(クブシー)	2種	2
536	与那国手拭	毛織 2種	2
537	龍服身ゴロ切地		1

538	若衆踊羽織袴	木綿及麻に描画	1
			67

絣及縞物類

539	芭蕉紅花染無地		1
540	芭蕉黃色地碁盤		1
541	芭蕉衣絣(アヤの上ウチュキー)		1
542	茶色芭蕉絣		1
543	赤苧タナシ		1
544	茶色カスリ		1
545	古琉球横絣		1
546	上布クヂリ格子(白地タナシ)		1
547	桐板紅花染絣		1
548	クヂリ格子ワタヂン		1
549	水色上布絣		1
550	水色地木綿絣		1
551	朱アヤ夏物		1
552	朱アヤ夏物		1
553	赤苧タナシ		1
554	桐板朱綾		1
555	古琉球朱アヤ		1
556	赤苧芭蕉		1
557	桐板赤苧タテ縞		1
558	紅花染赤苧		1
559	手縞灰色黒地二		1
560	手縞ワタヂン		1
561	手縞ワタヂン		1
562	手縞フイーター		1
563	首里手縞		1
564	首里紬手縞		1
565	ウコン染ワタヂン	クヂリ格子黄色首里手引紬	1
566	ウコン染ワタヂン	クヂリ格子黄色首里手引紬	1
567	袖絣		1
568	袖絣		1
569	首里紬ワタヂン	灰色小柄、御祝婦人礼服	1
570	首里紬ワタヂン	灰色小柄、御祝婦人礼服	1
571	紬ウツシワタヂン	灰色	1
572	紬ウツシワタヂン	灰色	1
573	紬ウツシワタヂン	橙色	1
574	久米島紬見本	1 冊 渡久山朝恭氏蒐集	1
575	紬地ワタヂン	男物	1

37

花織紹織ヤシラミ類

576	色物絹地花織	女物袴	1
577	色物絹地花織	女物袴	1
578	唐花染花織	木綿女物	1
579	緞子中ゴメ	黄色地に鶴菊の織紋	1
580	緞子ワタヂン	青地婦人礼服	1
581	花織ヤシラミ	木綿女物	1

582	花織ワタヂン	水色婦人礼服	1
583	ヤシラミ花織	水色、絹地女物	1
584	ヤシラミワタヂン	木綿男物	1
585	琉球花織ワタヂン	浅地木綿女物	1
586	琉球花織	木綿浅地	1
587	紺織縞物	紺地	1
588	紺織トンビヤン	男物赤縞入	1
589	紺織楊皮染	男物タテ縞	1
590	紺織横縞	紺地	1

15

## (染型手本及紙類)

591	藍染手本	13種	13
592	紅型染手本	5種	5

18

## (風呂敷 及覆沙)

593	大風呂敷	松竹梅	1
594	紅型風呂敷	6種(上布及木綿)	6
595	覆紗	旧藩王家御使用品	1

8

## (琉球紅型類)

596	麻布紅型	小柄 紅青黒の草花	1
597	藍地紅型	小柄	1
598	藍地紅型	小柄	1
599	藍地紅型	中柄 梅花	1
600	藍地紅型	中柄 松に鳥	1
601	藍地紅型	中柄 花模様	1
602	藍地紅型	中柄 松竹梅	1
603	藍地紅型	小柄 松梅	1
604	藍地紅型	小柄 黄紅白紫の花模様	1
605	藍地紅型	小柄 花	1
606	藍地紅型	小柄 竹模様	1
607	藍地紅型	船に波	1
608	藍地紅型	船に波 紅黄黒の草花	1
609	藍地紅型	中柄 花鳥	1
610	藍地紅型	中柄 松竹梅に鶴亀	1
611	藍地紅型	中柄 梅に桜花	1
612	藍地紅型	中柄 松竹梅に鳥	1
613	藍地紅型	大柄 水草に魚	1
614	絹地紅型	中柄桃色梅花模様	1
615	絹地紅型	中柄扇面、クリヰ、梅花散ラシ(袴物)	1
616	絹地紅型	桃色、牡丹に菊模様(襦袢)	1
617	絹地紅型	羽二重フイーター桃色桜花及牡丹波網干	1
618	絹地紅型	羽二重フイーター 黄色地菊花紅葉に扇	1
619	絹地紅型	羽二重フイーター 大柄菊花(綿人)	1
620	絹地紅型	黄色地 松竹梅	1
621	切地	9種 大中小柄花鳥各種模様	9
622	紅葉に梅	小柄	1
623	刺繡	菊に藤	1

624	上布紅型	小柄 竹に蝙蝠模様	1
625	上布紅型	小柄 浅地松竹梅	1
626	上布紅型	小柄 波に桜花鳥	1
627	上布紅型	小柄 藍地 黄紫青紅白の草花	1
628	上布紅型	中柄 花鳥	1
629	白地木綿紅型	小柄 花鳥	1
630	白地木綿紅型	小柄 流水に花	1
631	白地木綿紅型	小柄 牡丹に菊梅	1
632	白地木綿紅型	小柄 扇面に花	1
633	白地木綿紅型	小柄 菊花	1
634	白地木綿紅型	小柄 扇面に花	1
635	白地木綿紅型	小柄 波に花	1
636	白地木綿紅型	小柄 桃色	1
637	白地木綿紅型	中柄	1
638	白地木綿紅型	中柄 桜花	1
639	白地木綿紅型	小柄 ワタデン	1
640	白地木綿紅型	小柄 黄地	1
641	白地木綿紅型	小柄 桃色	1
642	縮緬紅型	大柄花模様	1
643	手引木綿紅型	小柄 桃色地 百姓ワタデン	1
644	手引木綿紅型	小柄 百姓ワタデン	1
645	手引木綿紅型	小柄 福木皮染萌黄色	1
646	手引木綿紅型	小柄 福木黄色地桜花紫白水色	1
647	手引木綿紅型	小柄 福木黄色地水色に赤草花	1
648	手引木綿紅型	小柄 福木桜に紅葉	1
649	手引木綿紅型	小柄 笠に紅葉	1
650	手引木綿紅型百姓ワタデン	小柄	1
651	桐板紅型(トンビヤン)	大柄 鶴亀花鳥	1
652	桐板紅型(トンビヤン)	大柄 葦雁網干	1
653	桐板紅型(トンビヤン)	小柄 扇面	1
654	桐板紅型(トンビヤン)	小柄 藍地 黄紫青白桜花	1
655	桐板紅型(トンビヤン)	小柄 藍地 黄白桜花	1
656	桐板紅型(トンビヤン)	中柄 桜花 カキツバタ	1
657	桐板紅型(トンビヤン)	小柄 浅地 紅緑黒の草花	1
658	桐板紅型(トンビヤン)	小柄 藍地 梅花に楓	1
659	桐板紅型(トンビヤン)	小柄 浅地 花鳥	1
660	桐板紅型(トンビヤン)	中柄 浅地 松竹梅	1
661	桐板紅型(トンビヤン)	小柄 扇面に花鳥	1
662	桐板紅型(トンビヤン)	小柄 浅地 松竹梅	1
663	桐板紅型(トンビヤン)	小柄 扇面に梅	1
664	桐板紅型(トンビヤン)	小柄 藍地 草花白の染抜	1
665	桐板紅型(トンビヤン)	小柄 藍地 松梅	1
666	桐板紅型(トンビヤン)	小柄 藍地 水草 水虫	1
667	桐板紅型(トンビヤン)	大柄 花	1
668	桐板紅型(トンビヤン)	白地に花鳥	1
669	桐板紅型(トンビヤン)	中柄 藍地に花蝶	1
670	桐板紅型(トンビヤン)	小柄 浅地 松葉に桜	1
671	桐板紅型(トンビヤン)	小柄 藍地に草花	1

672	桐板紅型(トンビヤン)	小柄 藍地に花鳥	1
673	桐板紅型(トンビヤン)	大柄 下り藤二牡丹と鳳凰	1
674	桐板紅型(トンビヤン)	大柄 草花紅黄紫青白	1
675	芭蕉紅型	中柄 花鳥	1
676	紅型々紙	3600種	3600
677	紅型解物及切地	大柄 松竹梅に菊 手引木綿1反	1
678	紅型解物及切地	大柄 松竹梅鶴亀1反	1
679	紅型解物及切地	中柄 ツバキ模様1反	1
680	紅型解物及切地	中柄 菊に椿 1反	1
681	紅型解物及切地	大柄 鶴亀 1反	1
682	紅型解物及切地	大柄 山水に鶴亀1反	1
683	紅型解物及切地	小柄 梅花	1
684	紅型解物及切地	中柄 稲妻に花	1
685	紅型解物及切地	小柄 白地に扇面傘草花 半反	1
686	紅型解物及切地	小柄 水色梅に牡丹 半反	1
687	紅型解物及切地	小柄 水色梅に松竹梅 半反	1
688	紅型解物及切地	小柄 藍地花に蝶 新染半反	1
689	紅型解物及切地	小柄 水色流水に桜紅葉	1
690	紅型解物及切地	小柄 黄色福木皮染 半反	1
691	紅型解物及切地	小柄 白地流水に梅紅葉 半反	1
692	紅型解物及切地	大柄 流水に菊梅鶴山水古 1反	1
693	紅型解物及切地	小柄 百姓ワタチン赤地に草花半反	1
694	紅型解物及切地	小柄 白地扇面に波桜花 半反	1
695	紅型解物及切地	小柄 紅地梅花 半反	1
696	木綿紅型	大柄 浅地に梅桃牡丹秀逸品拾	1
697	木綿紅型	中柄 波に舟 裕	1
698	木綿紅型	中柄 裕 (?裕か)	1
699	木綿紅型	大柄 裕 (?裕か)	1
700	木綿紅型	中柄 裕 (?裕か)	1
701	木綿紅型	大柄 桃に牡丹	1
702	木綿紅型	大柄 单衣	1
703	木綿紅型	中柄 脊衣	1
704	木綿紅型	大柄 桐に鳳凰	1
705	木綿紅型	中柄 蝶 花鳥	1
706	木綿紅型	中柄 牡丹に桜	1
707	木綿紅型	大柄	1
708	木綿紅型	大柄 牡丹に南蛮模様	1
709	木綿紅型	大柄	1
710	木綿紅型	大柄 籠花 牡丹に燕	1
711	木綿紅型	菊花模様	1
712	木綿紅型	中柄 鶴に松竹梅	1
713	木綿紅型	大柄 菊花脣衣	1
714	木綿紅型	中柄 桜花 カキツバタ	1
715	木綿紅型	大柄 松竹梅	1
716	木綿紅型	大柄 花模様	1
717	木綿紅型	団扇に菊模様	1
718	木綿紅型	踊衣裳下り藤に菖蒲	1
719	木綿紅型	裕中模様山水に鶴	1

720	木綿紅型	中柄 单衣山水に菊梅鶴	1
721	木綿紅型	中柄 松竹梅(風呂敷)	1
722	木綿紅型	大柄	1
723	木綿紅型	中柄 松竹梅に桃 補	1
724	木綿紅型	小柄 鴛鴦	1
725	木綿紅型	小柄 赤地桜花に筐	1
726	木綿紅型	大柄 松竹梅	1
727	木綿紅型	小柄	1
728	木綿紅型	中柄	1
729	木綿紅型	小柄 松梅	1
730	木綿紅型	小柄 桜花	1
731	木綿紅型	小柄 浅地 波に桜花	1
732	木綿紅型	小柄 花模様	1
733	木綿紅型	小柄 桜花	1
734	木綿紅型	小柄 花鳥	1
735	木綿紅型	小柄 花模様	1

3747

## 6 漆器の部

No.	品 目	摘 要	数量
736	毛彫沈金 御重箱	名工新垣の作、無比の逸品	2
737	朱塗 湯つぎ	茶飯ゆつぎ用	1
738	沈金 御米盤(大型)	主として祭祀用、元侯爵家御藏品	1
739	沈金 御米盤(大型)	かつぎ御米盤、玉貫瓶一对外箱共	3
740	沈金 御徳盆	主として祭祀用、元侯爵家御藏品	1
741	沈金 御椀		1
742	沈金 菓子器	六角形(小型)	1
743	沈金 黒塗食籠		1
744	沈金 サシクイー	小道具入	1
745	沈金 木椀		1
746	沈金 料紙文庫(硯箱共)	凡そ130年前の製品、逸品	2
747	堆錦 印籠	山水朱塗	1
748	堆錦 印籠	獅子黒塗	1
749	堆錦 印籠	獅子黒塗	1
750	堆錦 印籠	獅子黒塗	1
751	堆錦 御米盤(中型)		1
752	堆錦 菓子器	海草に金魚の図案	1
753	堆錦 中央卓	凡そ150年前の作品、郷土協会出陳、無比の逸品	1
754	堆錦 東道盆		1
755	堆錦 四段御重	凡そ7,80年前の作品、流水に桜花模様	1
756	堆錦 四段御重	凡そ7,80年前の作品、水に貝模様	1
757	堆錦 料紙文庫	凡そ130年前の作、逸品、硯箱共1組	2
758	蒔絵 印籠	山水	1
759	蒔絵 大型四段御重	琉球蒔絵	1
760	蒔絵 御米盤(小型)	唐子絵、唐草模様	1
761	蒔絵 御道具箱	女持、支那製唐子絵	1
762	蒔絵 御盆	長方形、支那製唐子絵	1
763	蒔絵 砚屏	1組	1
764	蒔絵 香箱	唐子絵、唐草模様	1

765	蒔絵 御酒盃台	支那製唐子絵	1
766	蒔絵 折盆(三方)	支那製唐子絵、唐草金模様入	1
767	蒔絵 東道盆	支那製箔絵	1
768	蒔絵 東道盆		1
769	蒔絵 東道盆		1
770	蒔絵 野弁当		1
771	蒔絵 弁当	亀甲紋	1
772	蒔絵 弁当	山水、唐子絵	1
773	蒔絵 弁当	山水、外間カメ子寄贈	1
774	蒔絵 丸盆	高級品の象嵌あり、祭祀用高台	2
775	蒔絵 木盃	金蒔絵	2
776	蒔絵 四段御重	草花に輪車	1
777	蒔絵 四段御重	唐子絵山水	1
778	螺鈿 印籠	山水図案	1
779	螺鈿 印籠	山水図案	1
780	螺鈿 印籠	山水図案 寿老人	1
781	螺鈿 印籠	梅花	1
782	螺鈿 御菓子器	支那製厚貝象嵌	1
783	螺鈿 御菓子器	支那製厚貝象嵌	1
784	螺鈿 御菓子皿	薔薇模様入大皿	1
785	螺鈿 御酒盃台		1
786	螺鈿 御椀	冊封使歎待用と伝わる、伊江男爵御寄贈品	1
787	螺鈿 鏡台	支那製厚貝象嵌	1
788	螺鈿 積屏(文房具衝立)	凡3百年前の作品 琉球国王御愛用の品と伝わる逸	1
789	螺鈿 香箱	青磁小香炉及香入共	2
790	螺鈿 五段御重箱	貝粉散らし、数十年前の製品	1
791	螺鈿 三方	唐草模様	1
792	螺鈿 食籠(方言クイチクン)	凡2百年前の作品 聞得大君御使用品と伝わる	1
793	螺鈿 食籠(台付)	凡150年前の作 郷土協会出陳逸品	1
794	螺鈿 煙草盆		1
795	螺鈿 茶盆	1組大小2個	2
796	螺鈿 茶盆	大1個	1
797	螺鈿 茶椀蓋		1
798	螺鈿 料紙文庫	凡150前の作 積箱共一組	2

73

## 7 風俗資料の部

### 家具

No.	品 目	摘 要	数量
799	井筒花生		1
800	稻摺臼		1
801	御願道具	祈祷用、2種	2
802	大形提灯	1組	1
803	御香箱		1
804	御香箱		1
805	御米盤	箱擔ぎ御米盤入箱	1
806	御汁入	挽物	1
807	御箸類	象牙、貝、木製等	※ 3
808	角製煙草入	他行携帶用	1

809	掛軸入筆筒		1
810	掛軸入箱	大中	2
811	唐臺	支那製机	1
812	刻煙草入		1
813	刻煙草入	他行携帶用	1
814	キセル各種	石キセル、高麗キセル、金属キセル	3
815	木枕(一束)	春慶塗琉球製	1
816	櫛箱	文物2点、男物1点	3
817	黒塗折盆	三方、祭祀用	1
818	香箱		1
819	小御道具箱	黒塗金ふち入	1
820	古琉球錢箱		1
821	古琉球錢箱(小形)		1
822	古琉球盆		1
823	塩請盆	結婚式用	1
824	地機	旧式布織機 宮城能亮氏寄贈	1
825	十人辨当	図書館出陳	1
826	小平枕	朱塗黒塗	3
827	寿司桶		1
828	すずりぶた	旧藩馳走盛用	1
829	煎茶一式		1
830	象牙箸		1
831	碎菓器		1
832	大平枕	朱塗黒塗	2
833	煙草盆	靈前用	1
834	煙草盆	元侯爵家御用品御紋入	1
835	煙草盆	野外用、室内用	1
836	玉貫手拭下げ		1
837	茶庫(大形)	紫泥	1
838	茶庫(小形)	琉球焼	1
839	茶の湯一式	抹茶用	1
840	唐櫃(トーケー)	朱塗唐草金模様入	※ 1
841	灯籠(大形)	御靈前用	1
842	灯籠(小形)		1
843	巴入御菓子器		1
844	鳥帽子筒	御姉妹部小道具入紋所入	1
845	二の膳		1
846	帕箱	各旧家紋所入数種	※ 1
847	針箱	婦人用	2
848	火熨斗		1
849	ぶくぶく茶立	挽物及び茶具	※ 1
850	婦人用煙草盆		1
851	船筆筒(かはすずり)	重要書類入又は船中旅行用	1
852	船筆筒(大形)		1
853	鼈甲菓子皿		1
854	辨当	ガジュマル製貝擦ふちとり	1
855	辨当	挽物入	1
856	法螺菓子罐(宮古島)		1

857	水風呂(すいふろ)	湯わかし用、旅行用	1
858	水盛盆	結婚式用盆は支那製	1
859	飯櫃	挽物	1
860	湯つぎ	黒塗、元侯爵家用	1
861	ゆほう盆	1組	1
862	琉球旧式製紙器具	首里市儀保町製紙場	1
863	琉球製櫃(大形)	侯爵家紋所入	1
864	琉球製櫃(高形)	衣類保管用	1
865	脇息	琉球製	1
866	脇息	貴婦人用	1

83

## 金属製品

867	鎧	銀の象嵌あり	2
868	鎧	普通品	2
869	金鉢	綱曳、爬龍船等の場はやし用	1
870	銀製印籠	鯉型印籠	1
871	鉦鼓(大中小)	綱曳、爬龍船等の場はやし用	3
872	鈴(風鈴等)		1
873	錫製懷中酒入		1
874	錫製酒入	弁当箱用四角形	1
875	錫製酒台	靈前用	1
876	錫製玉貫瓶	1双祭祀用	2
877	錫製玉貫瓶	1双祭祀用	2
878	錫製茶庫	小型箱入	1
879	錫製茶壺	函入2個1組	2
880	錫製つる瓶	1個	1
881	錫製瓶しい	祭祀用	1
882	錫製よし瓶	祭祀祈願用	1
883	茶釜	茶の湯用鐵製釜	1
884	銅鐘(大形)	大鏡、鏡懸共一揃	1
885	銅鐘(大形)	函入	1
886	銅鐘(中形)	函入	1
887	銅鐘(中形)	函入	1
888	銅鐘(小形)	函入	1
889	銅製香炉	外間カメ子寄贈	1
890	銅製燭台		1
891	銅製煙草飲具	支那より伝来	1
892	銅製ヌンクー鍋		1
893	銅装玩具	出産時等夜伽用玩具	1
894	銅装炬燼		1
895	念仏鉢	浄土念佛宗用品	1
896	白銅燭台	靈前用	1
897	ハンセイ鐘(中形)	綱曳、爬龍船等の場はやし用	1
898	ハンセイ鐘(小形)	綱曳、爬龍船等の場はやし用	1

39

## 木竹器及藁細工

1

899	井筒花活		1
900	苧バーケ		1
901	ウヅミ籠		1
902	櫂		1
903	風旗(和船)		1
904	風旗(唐船)		1
905	家庭用果物壓搾器		1
906	釜蓋		1
907	漁用竹製品		1
908	切支丹改札		1
909	組木枕		1
910	刑罰用首枷		1
911	米バーケ		1
912	棕櫚簍		5
913	草履	王以下各階級	※ 1
914	ソーケ		1
915	竹編漆塗菓子器		1
916	竹編巾着		1
917	竹編簾		1
918	竹編煙草入		1
919	竹編辨當		1
920	竹製花立		1
921	竹筒酒入(彫刻付)		1
922	竹筒酒入		1
923	竹筒錢入		1
924	竹筒辨當		1
925	竹夫人(盛夏老人の涼を納める器)		1
926	竹枕		2
927	男女クバ笠		2
928	男女麦藁笠		1
929	釣籠		1
930	手提灯		1
931	陶工轆轤		1
932	トウミ		1
933	農具用クツワ		1
934	農用竹製品		1
935	馬具		1
936	藤籠辨當		1
937	藤製丸籠		1
938	宮古ウルグスガマ		1
939	宮古シーブ		1
940	宮古マーグ		1
941	宮古マンクニー		1
942	宮古マンデラ		1
943	宮古ムイ		1
944	畚		1
945	木綿花繅器(螺旋形)		1

946	椰子一輪挿		1
947	椰子酒入		1
948	椰子酒入(小形)		1
949	ワラグツ		1

57

## 玩具

950	馬乗(張子)		1
951	クリ舟		1
952	コマ	各種	※ 1
953	古琉球毬	数種	※ 1
954	獅子舞(張子)		1
955	竹皮面		1
956	チンチン馬(張子)		1
957	農村玩具		1
958	鳩(張子)		1
959	爬龍船		1
960	不寢番玩具(真鍮針金製)		1
961	不倒翁		1
962	舟		1
963	舞子(張子)		1
964	メントウ箱(玩具箱)		1
965	琉球風俗人形		1

16

## 身装具

966	印籠各種	漆器の部にあり	
967	ウチュクイ類		※ 1
968	王子按司用男物金簪		1
969	王子以下官帽(ハチマキ)		※ 1
970	大帶類		※ 1
971	男物指輪		1
972	親見世若衆用銀簪		1
973	女物土族銀簪		1
974	女物平民真鍮簪		1
975	各種手巾		1
976	飾り指輪	女物縁起よき時に用いる	※ 1
977	かしれ一	旧藩時代小児髪飾	1
978	唐船々頭帽		1
979	クブシー(腹掛)		1
980	土族用男物銀簪		1
981	支那靴		1
982	頭巾類		1
983	スス玉	1連	1
984	陶製曲玉	1連	1
985	南京玉	1連	1
986	爬龍船力ヂ取帽		1
987	平民女物木簪		1
988	平民女物鼈甲簪		1
989	平民用男物真鍮簪		1

990	別珍紙入類煙草入類		※ 1
991	曲玉一連(永良部阿應理惠接司佩用)		1
992	曲玉一連(のろくもい佩用)		1
993	曲玉各種	宮古、八重山発掘	※ 1
994	ミンサー帶類		※ 1

28

## 度量衡器

995	唐尺	風水判定用	1
996	金銀貨幣計算器	徳川時代	1
997	古琉球衡		1
998	刃秤		1
999	柵瓶	五勺、一合、一升	3
1000	木柵	一升、五合、一合	3
1001	羅針盤		

11

## 石製器具

1002	石臼(小形)	薬物ねり用	1
1003	石製壓搾器	製糖用	1
1004	茶臼		1
1005	ぽいと搾	布哇土人用、宮城長順氏寄贈	1

4

## 貨幣

1006	一厘錢(各種)		※ 1
1007	古錢各種		※ 1
1008	紙幣(徳川時代)		1
1009	その他各種貨幣		※ 1
1010	鳩目錢		1
1011	琉球通寶		1

6

## 舞楽器

1012	安南三味線	蛇皮張、東恩納寛惇氏寄贈	1
1013	紹掛糸巻	1組	1
1014	三板		1
1015	噴呴	俗にガクと称す	1
1016	鼓及バラン鼓		2
1017	日本三味線		1
1018	笛		1
1019	福州三味線	蛇皮張、東恩納寛惇氏寄贈	1
1020	満州三味線	池宮城喜輝氏寄贈	1
1021	琉球三味線	蛇皮張、南風原型	1
1022	琉球三味線江戸與那	東恩納寛惇氏寄贈	1

12

## 武具

1023	踊棒(宮古島)	徳川時代作	1
1024	刀掛		1
1025	甲冑		1
1026	さい		1
1027	支那剣		1

1028	短刀	徳川時代作	1
1029	短刀	徳川時代作	1
1030	短刀	大村王子黒金座主を殺せし刀と伝わる	1
1031	鐵兜		1
1032	てつちゅう		1
1033	薙刀		1
1034	布哇毒刀	図書館	1
1035	木剣		1
1036	矢筒		1
1037	槍掛		1
1038	弓	徳川時代作	1
1039	琉球製刀		1
1040	六尺棒		1
1041	脇差	支那旅行用	1

19

## 葬具

1042	石棺(方言石厨子)	1
1043	陶棺(焼物厨子)	1
1044	木棺	1

3

## 8 陶器の部

No.	品 目	数量
1045	藍色アンビン(壺屋)	1
1046	藍色果物皿(壺屋)	1
1047	藍絵皿(壺屋)	1
1048	青葉香炉	1
1049	青南蛮甕	1
1050	青釉香爐	1
1051	青ヨシ瓶	1
1052	赤絵入茶家	1
1053	赤絵花瓶(黒田)	1
1054	赤絵皿	1
1055	赤絵皿	1
1056	赤絵皿	1
1057	赤絵ドンブリ	1
1058	赤絵火入	1
1059	油入	1
1060	油壺(琉陶園)	1
1061	アメ色南蛮甕	1
1062	飴葉水滴	1
1063	飴釉香爐	1
1064	飴釉酒家(壺屋)	1
1065	一輪挿(琉陶園)	1
1066	御庭焼火入	1
1067	御庭焼琉球急須	1
1068	大形花瓶	1
1069	大形カラカラ	1
1070	大形土瓶雲に鶴亀	1

1071	大形ヨシ瓶	1
1072	大皿(壺屋)	1
1073	大花瓶	1
1074	大碗	1
1075	置獅子大手水鉢	1
1076	置獅子	1
1077	沖縄製埴輪	1
1078	男物水油壺	1
1079	女物アラヒ粉壺	1
1080	女物水油壺	1
1081	懷中酒入	2
1082	懷中酒入	1
1083	懷中酒入	1
1084	懷中酒入	1
1085	懷中酒入	1
1086	懷中酒入	1
1087	懷中酒入	1
1088	懷中酒入	1
1089	懷中酒瓶	1
1090	懷中用酒入	1
1091	花瓶	1
1092	カラカラ(黒田)	1
1093	唐草模様入土瓶	1
1094	咸豐年製火入	1
1095	黄交趾壺	1
1096	桔梗形丼	1
1097	黄交趾四角大皿	1
1098	黄南蛮甕	1
1099	ギヤマン酒盃	4
1100	金地一輪生	1
1101	草色青磁香炉	1
1102	草色琉球大形ヨシ瓶	1
1103	果物小鉢(壺屋)	1
1104	雲形入琉球土瓶	1
1105	黒素焼タラフ	1
1106	交趾菓子器	1
1107	交趾花瓶	1
1108	交趾花瓶	1
1109	香磁徳利	1
1110	交趾南蛮甕	1
1111	交趾焼茶具	1
1112	廣東素焼花挿	1
1113	高麗煙管	1
1114	香爐	1
1115	香爐	1
1116	古我知焼茶壺	1
1117	古我知焼鶴亀	1
1118	黒釉アンビン(壺屋)	1

1119	黒釉一輪挿(琉陶園)	1
1120	黒釉ソース入(壺屋)	1
1121	黒釉徳利(琉陶園)	1
1122	五彩一輪挿	1
1123	五彩一輪挿	1
1124	古薩摩写灯明	1
1125	古薩摩丁字風呂	1
1126	如重香爐	1
1127	小壺(黒田)	1
1128	小壺(黒田)	1
1129	古万古急須	1
1130	古万古瓶	1
1131	古琉球赤絵香爐	1
1132	古琉球赤絵茶入	1
1133	古琉球梅模様入徳利	1
1134	古琉球置物家形	1
1135	古琉球鶯鶯酒入	1
1136	古琉球懷中酒入	1
1137	古琉球花瓶	1
1138	古琉球花瓶	1
1139	古琉球花瓶	1
1140	古琉球花瓶	3
1141	古琉球観音	1
1142	古琉球菊型土瓶	1
1143	古琉球五彩皿	1
1144	古琉球古薩摩ウツシ	1
1145	古琉球酒台	1
1146	古琉球皿	1
1147	古琉球三彩大碗	1
1148	古琉球四角酒入	1
1149	古琉球四角酒入	1
1150	古琉球白薬酒入	1
1151	古琉球白焼	1
1152	古琉球青磁ウツシ一輪挿	1
1153	古琉球知花花立	1
1154	古琉球知花ヨシ瓶	1
1155	古琉球茶碗	1
1156	古琉球酒家	1
1157	古琉球中皿	5
1158	古琉球中皿	5
1159	古琉球中皿	1
1160	古琉球丁字風呂	1
1161	古琉球丁字風呂	1
1162	古琉球丁字風呂	1
1163	古琉球手水鉢	1
1164	古琉球ドンブリ	1
1165	古琉球丼	2
1166	古琉球海鼠筒形花立	1

1167	古琉球白磁		5
1168	古琉球花活		1
1169	古琉球花挿		1
1170	古琉球ヒビ焼香爐		1
1171	古琉球ヒビ焼マカリ		1
1172	古琉球平ドンブリ		1
1173	古琉球マカリ		5
1174	古琉球三島ウツシ		1
1175	古琉球三島写酒入		1
1176	古琉球焼花瓶		1
1177	古琉球焼白香爐		1
1178	古琉球焼達磨大師像		1
1179	古琉球焼三彩大皿		1
1180	古琉球龍紋スカシ彫香爐		1
1181	古琉球蠟立		1
1182	古琉球洗粉入壺		1
1183	古琉球蓮華形御酒入		1
1184	古琉球蓋付		1
1185	肴鉢		1
1186	薩摩南蛮写		1
1187	サメ焼急須		1
1188	皿		1
1189	獅子耳香炉		1
1190	紙錢花鉢		1
1191	紫泥		1
1192	紫泥一輪挿		1
1193	紫泥急須		1
1194	紫泥酒入		1
1195	紫泥茶家		1
1196	紫泥酒家		1
1197	紫泥蓋付茶碗		1
1198	支那香爐		1
1199	支那朱泥急須		1
1200	支那素焼大花瓶		1
1201	支那焼急須		1
1202	支那ルリ香爐		1
1203	朱色急須		1
1204	朱泥茶壺		1
1205	上焼ヨシ瓶		1
1206	白色小香炉		1
1207	白焼黒釉葉		1
1208	白焼酒入		1
1209	白焼茶壺		1
1210	白焼徳利		1
1211	白焼ヨシビン		1
1212	素焼サークー		1
1213	素焼サークー		1
1214	素焼酒家		1

1215	素焼徳利		1
1216	素焼土瓶		1
1217	素焼南蛮		1
1218	素焼花差		1
1219	青交趾水差		1
1220	青磁大皿		1
1221	青磁菓子器		1
1222	青磁酒入		1
1223	青磁小香炉		1
1224	青磁蓋付小壺		1
1225	青磁ヨシ瓶		1
1226	染付		1
1227	染付花瓶		1
1228	染付神酒瓶		1
1229	大土壤		1
1230	辰砂一輪挿		1
1231	辰砂大花瓶		1
1232	辰砂水挿		1
1233	知花青葉花瓶	1対	2
1234	知花花瓶		1
1235	知花花瓶(耳付)		1
1236	知花香爐		2
1237	知花香爐		1
1238	知花香爐		1
1239	知花香爐		1
1240	知花香炉		1
1241	知花酒入		1
1242	知花皿		1
1243	知花小徳利		1
1244	知花白徳利		1
1245	知花水盤		1
1246	知花青花挿		1
1247	知花染付油入		1
1248	知花茶壺鐵砂		1
1249	知花壺		1
1250	知花徳利印度写シ		1
1251	知花花活		1
1252	知花花立		1
1253	知花花立		1
1254	知花焼大茶壺		1
1255	知花焼置獅子		1
1256	知花焼花瓶小		1
1257	知花焼香爐		1
1258	知花焼香爐		1
1259	知花焼香爐		1
1260	知花焼摺鉢		1
1261	知花焼瓢箪酒入		1
1262	知花焼瓶		1

1263	知花焼水入		1
1264	知花ヨシ瓶		1
1265	茶庫		1
1266	茶瓶南瓜形		1
1267	朝鮮青磁皿		1
1268	朝鮮青磁碗		1
1269	筒形花瓶		1
1270	鼓形花挿		1
1271	壺		1
1272	壺屋焼小徳利(琉球南蛮)		1
1273	釣花瓶		1
1274	鶴亀桔梗茶家		1
1275	鶴亀酒家		1
1276	鐵砂絵具皿		1
1277	鐵砂茶碗		1
1278	鐵砂釉南蛮甕		1
1279	天目酒入		1
1280	天目茶碗		1
1281	天目茶碗		1
1282	天目茶碗		1
1283	陶器カラカラ		2
1284	陶器染付鉢		1
1285	陶製鉢(古琉球)		1
1286	灯明		1
1287	巴紋入酒入		1
1288	七官青磁香爐		1
1289	海鼠花活		1
1290	南京朱泥龍紋茶家		1
1291	南蛮		1
1292	南蛮甕		1
1293	南蛮甕		1
1294	南蛮甕		1
1295	南蛮甕		1
1296	南蛮甕		1
1297	南蛮甕(素焼)		1
1298	南蛮小徳利		1
1299	南蛮小徳利		1
1300	南蛮茶釜		1
1301	南蛮壺		1
1302	南蛮手カラカラー(壺屋)		1
1303	灰色鶴瓶		1
1304	蓮形皿		1
1305	蓮形蠅台		1
1306	蓮形ドンブリ		1
1307	八卦形陶盤		1
1308	ハンネラ土器		1
1309	火入琉球青磁草色		1
1310	瓢形ヨシ瓶		1

1311	平酒家(壺屋)		1
1312	平瓶(黒田)		1
1313	紅型染用皿		1
1314	福州大南蛮甕		1
1315	福州南蛮		1
1316	蓋付鉢(壺屋)		1
1317	古壺屋大鉢		1
1318	弁当酒入角瓶		1
1319	ポーフラ(煎茶用)		1
1320	骨甕鋳型		1
1321	マカイ		1
1322	抹茶茶碗(壺屋)		1
1323	丸形紙錢焙		1
1324	神酒入	1 対	2
1325	三島一輪挿		1
1326	三島写大形手水鉢		1
1327	三島写香爐		1
1328	三島菓子器		1
1329	三島急須		1
1330	三島瓢箪形		1
1331	耳壺形花挿(琉陶園)		1
1332	紫焼火入		1
1333	八重山離れ焼水壺		1
1334	ヨシ瓶		1
1335	ヨシ瓶		1
1336	ヨシ瓶ツルカメ		1
1337	琉球赤皿		1
1338	琉球油壺		5
1339	琉球一輪挿		1
1340	琉球一輪挿		1
1341	琉球大鉢		1
1342	琉球置獅子		1
1343	琉球懷中酒入		1
1344	琉球菓子皿		1
1345	琉球花瓶		1
1346	琉球花瓶		1
1347	琉球花瓶		1
1348	琉球花瓶		1
1349	琉球花瓶		1
1350	琉球花瓶		3
1351	琉球花瓶		1
1352	琉球花瓶雲龍スカシ彫		1
1353	琉球香爐		2
1354	琉球五彩酒瓶		1
1355	琉球古薩摩茶碗	3 個	3
1356	琉球古薩摩ツル瓶		1
1357	琉球古薩摩天目		1
1358	琉球古陶器火鉢		1

1359	琉球酒入		1
1360	琉球酒瓶		1
1361	琉球皿		1
1362	琉球四角酒入		1
1363	琉球紫泥焼カラカラ		1
1364	琉球白酒家		1
1365	琉球白焼花瓶	1 対	2
1366	琉球白焼酒盃		1
1367	琉球白焼染付		1
1368	琉球白ヤキヒビ入		1
1369	琉球透シ彫龍紋大香爐		1
1370	琉球青磁		1
1371	琉球青磁鉛色ホリ付花瓶		1
1372	琉球青磁花瓶		1
1373	琉球青磁雲模様入ツル瓶		1
1374	琉球青磁香爐		1
1375	琉球青磁香爐		1
1376	琉球青磁香炉水盤型		1
1377	琉球ソバ壺		1
1378	琉球染付		1
1379	琉球染付唐草紋碗		1
1380	琉球染付香爐		1
1381	琉球大花瓶		1
1382	琉球知花花瓶		1
1383	琉球茶壺		1
1384	琉球茶壺		1
1385	琉球酒家	3 個	3
1386	琉球酒家		1
1387	琉球中皿小皿	2 個	2
1388	琉球手水鉢		1
1389	琉球天目ヨシ瓶		1
1390	琉球海鼠焼四角酒入		1
1391	琉球南蛮		1
1392	琉球南蛮一輪挿		1
1393	琉球南蛮壺		1
1394	琉球南蛮徳利		1
1395	琉球南蛮ヤマ形		1
1396	琉球花挿		1
1397	琉球三島五彩酒家		1
1398	琉球三島南蛮香爐		1
1399	琉球三島鉢		1
1400	琉球三島火入		1
1401	琉球焼飴色油壺		1
1402	琉球焼色模様入一对瓶		2
1403	琉球焼高麗煙管		1
1404	琉球焼香爐		1
1405	琉球焼鮫壺		1
1406	琉球焼白香炉		1

1407	琉球焼酒家		1
1408	琉球焼対瓶		2
1409	琉球焼対瓶紫色		2
1410	琉球焼灯明		2
1411	琉球焼南蛮写花瓶		1
1412	琉球焼蓬莱花瓶		1
1413	琉球ルリ焼灯明皿	1 対	2
1414	琉球ルリ焼神酒入	1 対	2
1415	琉球古薩摩茶碗		1
1416	琉球火入		2
1417	龍紋南蛮甕		1
1418	琉球南蛮飴色油壺		1
1419	爐		1

422

## 発掘瓦甕

1420	浦添城	陶器並南蛮甕破片	※ 1
1421	勝連城	陶器並南蛮甕破片	※ 1
1422	崎山御嶽	瓦甕	※ 1
1423	首里城	陶器並南蛮甕破片	※ 1
1424	其他	県古城址数十ヶ所採取(土器陶磁片)	※ 1

5

## 9 石器の部

1425	凹石		※ 1
1426	石簇		※ 1
1427	石弾		※ 1
1428	石斧		※ 1
1429	其他貝塚発掘の貝器牙器骨器		※ 1

5

## 10標本の部

1430	貝殻標本	口種	※ 1
1431	鉱物標本		※ 1
1432	植物措葉	口種	※ 1
1433	丹頂剥製		1
1434	蝶類標本		※ 1

5

数量欄の※印は、点数不明のため、都合上一点として算出した。

## 沖縄県の外来昆虫

小濱 繼雄・嵩原 建二

(沖縄県ミバエ対策事業所・沖縄県立博物館)

Exotic Insects in Okinawa

Tsuguo Kohama and Kenji Takehara

(Fruit-fly Eradication Project Office, Okinawa

Prefectural Government; Okinawa Prefectural Museum)

### はじめに

沖縄県で最初に記録された外来昆虫は、1903年に報告されたアリモドキゾウムシである。それ以来、2001年までに8目107種の外来昆虫が沖縄県で記録されている。これに対し、日本全体で記録されている外来昆虫は284種である (Kiritani, 1999)。沖縄県の面積は国土の0.6%でしかないので、いかに多くの外来昆虫がこの小さな地域に侵入しているかが分かる。外来昆虫には重要な害虫が多いので、農業に対する経済的な損失がひじょうに大きい。しかも沖縄県では毎年のように新たな侵入害虫が侵入しているのである。最近本土産カブトムシが定着し、沖縄在来のカブトムシの存在を脅かすようになっている (堀、1987)。他にも人為的な昆虫の島間移動の事例が相次いで報告されており (楠井、1979; 上野、1989; 川田、1996; 藤田、1997; 竹内、2001)、島の昆虫相に重大な影響を及ぼしつつある。このように沖縄県における外来昆虫対策—移入防止と定着防止は緊急な課題となっている。

沖縄県の外来昆虫については、高良 (1954; 1955)、高良・東 (1969; 1971)、東・金城 (1978)、東 (1985a; 1986)、小浜 (1997)、Kiritani (1999) などによってまとめられている。本報告では、その後に追加された種を含め、1903年から2001年までに沖縄県で記録された外来昆虫をまとめて示したものである。本資料が今後、沖縄県における外来昆虫の問題を検討し、対策を立てるための参考になれば幸いである。

### 沖縄県の外来昆虫

#### ナナフシ目 (竹節虫目) PHASMIDA

トゲナナフシ *Neohirasea japonica* (de Haan) (ナナフシ科 Phasmatidae)

本州、四国、九州に分布する (平嶋、1989)。1994年に沖縄島の沖縄市で発見された。

1996年および1999年にも捕獲されており、沖縄市周辺に定着しているようである（佐藤、2000）。八丈島には本土から観葉植物の苗とともに移入され、害虫化したことがある（菊池・平野、1969）、おそらく観葉植物の苗とともに本土から沖縄島に持ち込まれたと推定される。

#### ゴキブリ目（網翅目）BLATTARIA

##### ハイイロゴキブリ *Nauphoeta cinerea* (Olivier) (ハイイロゴキブリ科 Oxyhaloidea)

衛生害虫。原産地は東アフリカで世界各地に船などで運ばれたと考えられる。世界の熱帯・亜熱帯に広く分布し、国内では南西諸島に生息する（朝比奈、1991；加納・篠永、1997）。沖縄県には戦後に東南アジアから移入されたようである。

##### イエゴキブリ *Neostylopyga rhombifolia* (Stoll) (ゴキブリ科 Blattidae)

東洋の熱帯に広く分布する衛生害虫。原産地は東南アジアと推定され、沖縄県には第二次世界大戦前に侵入している（朝比奈、1991；加納・篠永、1997）。国内では奄美大島以南の木造家屋に普通に見られたが、年々個体数が減少して衛生害虫としては重要でなくなつた（岸本・比嘉、1986；加納・篠永、1997）。

##### トビイロゴキブリ *Periplaneta brunnea* (Burmeister) (ゴキブリ科 Blattidae)

世界の熱帯・亜熱帯に分布する衛生害虫。北米に多いといわれているが（岸本・比嘉、1986）、原産地は不明である（加納・篠永、1997）。日本では1960年に愛媛県の三崎町で最初に確認され、その後各地で報告されるようになった。南西諸島や小笠原諸島に多くみられる（加納・篠永、1997）。沖縄県には第二次世界大戦後に侵入、局地的に生息し、個体数は少ない（岸本・比嘉、1986）。北米から沖縄県に移入されたと考えられる。

#### カメムシ目（半翅目）HEMIPTERA

##### ヒゲナガヘリカメムシ *Notobitus meleagris* (Fabricius) (ヘリカメムシ科 Coreidae)

中国・台湾に分布する竹の害虫で若い竹を吸汁する（安永ら、1993）。1970年代に石垣島（友国、1989）へ、1982年には沖縄島（東、1986）へ侵入した。いずれも台湾から侵入したと推定されている（東、1986）。1988年には徳之島と奄美大島からも記録されている（友国、1989）。

##### カンシャコバネナガカメムシ *Caverelius saccharivorus* (Okajima) (ナガカメムシ科 Lygaeidae)

サトウキビの害虫でガイダーとも呼ばれる。原産地は台湾で、日本では1914年に那覇市国場で発見された。1911年に台湾から当時の優良品種の苗が導入され、国場で栽培された経緯があり、苗とともに台湾から持ち込まれたようである。八重山諸島には1920年代に、南北大東島へは1957年ごろ移入されたと考えられている。その後、奄美大島、種子島、宮崎県に分布を拡げた。いずれもサトウキビ苗の移動により分布を広げた（東、1977）。

コメグラサシガメ *Amphibolus venator* Klug (サシガメ科 Reduviidae)

アフリカ原産で、インドおよびタイからも見つかっている。日本では、沖縄島において1999年に発見された。本種は貯穀害虫の天敵として知られ、貯穀害虫調査において沖縄島那覇市の精米施設および沖縄市の穀物貯蔵施設で見つかっている。タイから米とともに侵入したと考えられている（高橋・Romero、2001）。

ケブカサシガメ *Pergrinator biannulipes* Montrouzier et Signoret (サシガメ科 Reduviidae)

世界中に広く分布し、貯穀害虫などの天敵として知られる。タイの精米施設や穀物貯蔵施設にも生息している。日本では、貯穀害虫調査において沖縄島那覇市の精米施設で1999年に発見された。発見された施設においてはタイ米を輸入しており、米とともにタイより侵入したと考えられる（高橋・Romero、2001）。

クロフツノウンカ *Perkinsiella saccharicida* Kirkaldy (ウンカ科 Delphacidae)

オーストラリア原産のサトウキビの害虫で（高野・柳原、1939）、サトウキビの苗とともにハワイや台湾に侵入した（高野・柳原、1939）。奄美・沖縄にはハワイから台湾を経て侵入したようである（栄・松田、1965）。沖縄県内の各島に広く分布するが、あまり重要な害虫ではない。

マンゴーキジラミ *Microceropsylla nigra* (Crawford) (ネッタイキジラミ科 Carsidaridae)

インド、フィリピン、台湾などでマンゴーの害虫として知られる。日本では1986年10月に沖縄島北部で発見された（宮武、1988；東、1992）。近年、沖縄県ではマンゴーの栽培が盛んになり、東南アジアから苗が輸入されており、これらの苗に付着して侵入したと考えられる（東、1992）。

ウーリーコナジラミ *Aleyrothrixus floccosus* (Maskell) (コナジラミ科 Aleyrodidae)

北南米、南欧、地中海周辺でカンキツ類の害虫として有名で、フィリピンにも最近侵入した。日本においては1997年に西表島で最初に確認され、1998年夏には石垣島と西表島で見つかっている（上宮、1998）。

シルバーリーフコナジラミ *Bemisia argentifolii* Bellows & Perring (コナジラミ科 Aleyrodidae)

果菜類や花卉類の害虫で世界に広く分布する。米国フロリダ州で1986年ごろから多発はじめ、瞬く間に世界各地に分布を拡大した（矢野、1994；松井、1995）。本種の加害によりカボチャの葉の白化症（シルバーリーフ）やトマト果実の着色異常を引き起こす（松井、1992；外間ら、1993）。日本においては、1989年10月ごろから全国各地で施設栽培のポインセチアで発生し問題となった。全国的な発生調査の結果、北海道から沖縄県まで発生が確認された（大戸、1990）。本種はタバココナジラミに外見がよく似ているため、しばらくタバココナジラミの新系統として扱われていたが、両者は遺伝的に異なることが分かり、別種のシルバーリーフコナジラミとして記載されている（矢野、1994；松井、1995）。

タバココナジラミ *Bemisia tabaci* (Gennadius) (コナジラミ科 Aleyrodidae)

世界的に広く分布するワタやサツマイモなどの害虫。沖縄県においては1964年に採集された標本が残っているだけで、侵入源、侵入方法は不明である。沖縄島ではインゲン、ジャガイモ、サツマイモなどで被害が時折みられるが、発生状況について調査されてない（東、1985a）。

オンシツコナジラミ *Trialeurodes vaporariorum* (Westwood) (コナジラミ科 Aleyrodidae)

世界的に広く分布する花卉・果菜類の害虫。原産地は北米西部および南西部と推測されている（中沢、1978）。日本では1974年に初めて確認されて以来、急激に分布を広げ、施設栽培果菜類の代表的な害虫のひとつとなった（中沢、1978；矢野、1993）。本種は観賞植物の苗とともに日本へ侵入したが、そのひとつのルートは、北アメリカから入ったポインセチアであったと推定されている（中沢、1978）。沖縄県では1976年2月に沖縄島の那覇市で発見された。1975年10月に岐阜市から移入された花卉苗が発生源と見られている（外川内、1976）。

イセリアカイガラムシ *Icerya purchasi* Maskell (ワタフキカイガラムシ科 Margarodidae )

オーストラリア原産で、世界的なカンキツ類の害虫。明治時代にカリフォルニア、台湾などから輸入したカンキツの苗木に付着して持ち込まれ、瞬く間に日本各地のカンキツ栽培地に広がった（河合、1980）。沖縄県においては1916年に台湾から摩文仁村（現在の糸満市摩文仁）にカンキツ苗とともに持ち込まれた。南大東島へは1921年頃、台湾からソウシジュの苗とともにに入った（屋代、1959）。きわめて多食性でカンキツ以外に多種の植物につく。現在沖縄県ではカンキツの害虫としては問題になってない。

パイナップルコナカイガラムシ *Dysmicoccus brevipes* (Cockerell) (コナカイガラムシ科 *Pseudococcidae*)

新大陸原産の種で、世界中の熱帯・亜熱帯地方でパイナップルやサトウキビの重要害虫となっている。日本では南西諸島、小笠原に発生する（河合、1980）。沖縄県においては1933年に石垣島で最初に確認された（東、1985a）。1930年と1936年に台湾から八重山に輸入したパイナップル種苗とともに伝播したものといわれている。1957年には八重山から移入した種苗とともに大宜味村（沖縄島）に侵入し、その後久米島でも発生した（琉球植物防疫所、1965）。

メキシココナカイガラムシ *Phenacoccus mandeiensis* Green (コナカイガラムシ科 *Pseudococcidae*)

1993年6月に那覇市内のマンゴーで侵入が初確認された。国内では東京都小笠原にも発生するが、被害は小さいようである（沖縄県病害虫防除所、1993a：金城ら、1996）。当初は *Phenacoccus gossypii* Townsend et Cockerel とされたが、これは誤りで、上記の学名が正しい（上里、私信）。

マンゴーカタカイガラムシ *Milviscutulus mangiferae* (Green) (カタカイガラムシ科 *Coccidae*)

世界中のマンゴー栽培地帯に発生している種で、国内では小笠原でも発見されている。沖縄県では1995年5月に西原町のハウス施設内のマンゴーで発生しているのが確認された（金城ら、1996）。台湾か東南アジアからマンゴーの苗とともに持ち込まれた可能性が高い。

ミドリワタカイガラムシ *Pulvinaria psidii* Maskell (カタカイガラムシ科 *Coccidae*)

東洋の熱帯地方原産の種と思われるが、現在では世界中の熱帯・亜熱帯地方に広く分布し、小笠原にも発生する（河合、1980）。ハワイではカンキツ類、各種果樹類などの害虫として知られる（沖縄県病害虫防除所、1993a）。沖縄県では1993年7月に名護市で初め

て確認された（沖縄県病害虫防除所、1993a；金城ら、1996）。

オスベッキーマルカイガラムシ *Aonidiella orientalis* (Newstead)

（マルカイガラムシ科 Diaspididae）

インド、フィリピン、北アフリカ、オーストラリア、南北アメリカ、ミクロネシア等に広く分布し、マンゴーやグワバ、観葉植物などを加害する（沖縄県病害虫防除所、1993a）。1993年8月に那覇市首里でパパヤの果実および茎についているのが発見され、1996年11月には宜野座村でマンゴーに寄生しているのが確認されている（金城ら、1996）。

マンゴーシロカイガラムシ *Aulacaspis tubercularis* Newstead

（マルカイガラムシ科 Diaspididae）

ジャワ、インド、イラク、モーリシャス、アフリカなどに分布し、マンゴーの害虫として知られる（長嶺ら、1996）。沖縄県においては1993年に初めて確認された（金城ら、1996）。

ランシロカイガラムシ *Diaspis boisduvalii* Signoret (マルカイガラムシ科

Diaspididae)

新熱帯区の原産と考えられるが、世界中に広がり、温室害虫として著名。日本では温室のみに発生する（河合、1980）。沖縄島では1989年6月に初めて確認された。カトレアでの発生が多い（安田・上原、1994）。

アナナスシロカイガラムシ *Diaspis bromeliae* (Kerner) (マルカイガラムシ科

Diaspididae)

メキシコ原産の種と考えられるが、世界中のパイナップル栽培地帯に分布する。日本では各地の温室に一般的に見られるほか、南西諸島のパイナップルに発生する（河合、1980）。沖縄県においては1933年に八重山で発見されており（東、1985a）、台湾から持ち込まれたと推定されている（東、1985a；1986）。

パイナップルクロマルカイガラムシ *Melanaspis bromiliae* (Leonardi)

（マルカイガラムシ科 Diaspididae）

台湾、カナリー諸島、セイセル島、ハワイ、ミクロネシアなどから記録され、世界各地のパイナップル栽培地帯に発生しているようである（河合、1980）。日本では1972年に石垣島で発見された。タイから石垣島に導入したパイナップル苗とともに持ち込まれたものと考えられている（東、1985a）。

ハイビスカスシロカイガラムシ *Pinnaspis hibisci* Takagi (マルカイガラムシ科  
Diaspididae)

近年、台湾から発見された種で、沖縄島では1970年代に発見された。沖縄島の市街地に多発しており、国外から持ち込まれたと考えられている（河合、1980）。

ヤノネカイガラムシ *Unaspis yanonensis* (Kuwana) (マルカイガラムシ科  
Diaspididae)

原産地は中国南部。明治時代に日本に侵入し、全国のカンキツ栽培地帯に広がった（河合、1980）。沖縄県では1981年11月に名護市三原で発見された（沖縄県農業試験場、1982）。発見後、数年に亘って緊急防除が行われれた（沖縄県農業試験場、1982、1983；沖縄県、1984、1985）。1983年4月には2種の天敵（ヤノネキロコバチ、ヤノネツヤコバチ）がヤノネカイガラムシの防除のため導入された（沖縄県、1984）。1988年には雌成虫がわずかに確認されたが（沖縄県農林水産部、1989）、1989年以降、ヤノネカイガラムシの発生は認められてない（沖縄県農林水産部、1990、1991）。

アザミウマ目（総翅目） THYSANOPTERA

アリガタシマアザミウマ *Franklinothrips vespiformis* (Crawford) (シマアザミウマ科  
Aeolothripidae)

原産地は中南米で、最近東南アジアに分布を広げ、タイ、マレーシアや台湾で見つかっている（新垣、1998）。捕食性のアザミウマで、ミナミキイロアザミウマなどの体液を吸汁する。日本においては1996年6月に沖縄島南部の知念村で発見された（Arakaki & Okajima, 1998）。沖縄島への侵入の経緯は不明（新垣、1998）であるが、おそらく台湾ないしは東南アジアから植物と一緒に持ち込まれたものであろう。

ミカンキイロアザミウマ *Frankliniella occidentalis* (Pergande) (アザミウマ科  
Thripidae)

原産地は米国西部で、ヨーロッパやアジアなど世界各地へ侵入した。多くの作物を加害する世界的な大害虫である。日本では1990年6月に千葉県と埼玉県で初めて確認された（早瀬・福田、1991）。日本へ侵入後、短期間でほぼ全国へと広がり、各種の作物に被害を与えた（片山、1998）。沖縄島では1999年6月に名護市において発見された（沖縄県病害虫防除所、1999）。本土から花卉の苗とともに持ち込まれたと考えられる。発見後、直ちに徹底的な防除が行われた結果、発見から約2ヶ月で本種は根絶された（沖縄県病害虫防

除所、1999；安田、私信)。

アカオビアザミウマ *Selenothrips rubrocinctus* (Giard) (アザミウマ科 Thripidae)

野菜、果樹、花卉の害虫である(小田、1993)。日本では小笠原でも発生している(大林・竹内、1996)。1991年に沖縄島のマンゴー園で発生が確認された(仲宗根ら、1996)。

ミナミキイロアザミウマ *Thrips palmi* Karny (アザミウマ科 Thripidae)

野菜類の世界的な大害虫。南アジア・東南アジア原産で、日本では1978年に宮崎県で初めて発生が確認された。国内で急速に分布を広げ、福島県から九州・沖縄までみられるようになった(河合・北村、1983；河合、1993)。沖縄県では1980年3月に沖縄市の施設スイカで多数発生しているのが発見された(鈴木・宮良、1984)。本土から苗とともに沖縄島に持ち込まれたものと推定されている(東、1985a)。

グラジオラスアザミウマ *Thrips simplex* (Morison) (アザミウマ科 Thripidae)

世界に広く分布するグラジオラスの主要な害虫。日本への侵入が警戒されていたが、1986年6月に茨城県と静岡県で発見された(Miyazaki & Kudo, 1987)。1986年9月から全国で発生調査を行ったところ、1987年4月までに秋田県から沖縄県までの14府県で本種の発生が確認された(吉沢ら、1987)。沖縄県においては、1987年2月の調査で、東風平町と具志頭村のグラジオラス畑で発見された(橋本、1987)。グラジオラスの球茎に付着して本土から侵入したものと推定されている(橋本、1987)。

コウチュウ目(鞘翅目) COLEOPTERA

カブトムシ *Allomyrina dichotoma septentrionalis* (Kono) (コガネムシ科 Scarabaeidae)

本州、四国、九州、種子島、屋久島、奄美大島などに分布する(平嶋、1989)。本土からペット昆虫として沖縄島に大量に導入され(楠井、1979)、逃亡したものが野外で繁殖しているようである(堀、1987)。沖縄島と久米島にはカブトムシの固有亜種であるオキナワカブトムシ(*A. dichotoma takarai*)とクメジマカブトムシ(*A. d. inchachina*)がそれぞれ生息しているので、本土産カブトムシが分布拡大することによって、これら沖縄産のカブトムシが将来絶滅してしまうのではないか心配されている(堀、1987)。

ドウガネブイブイ *Anomala cuprea* (Hope) (コガネムシ科 Scarabaeidae)

北海道、本州、四国、九州、対馬、種子島、屋久島に分布する(平嶋、1989)。沖縄県では1995年5月に東村有銘のマンゴーハウスで成虫が確認されたのが最初の記録である

(沖縄県病害虫防除所、1995a)。同年6月には国頭村辺土名の灯火で成虫3匹が採集されている(平野・松村、1996)。1999年までに沖縄島北部のほぼ全域に分布を広げた(河村、2001)。最初に本種が確認されたハウスでは本土(岐阜県)から購入した堆肥を使用しており、堆肥とともに持ち込まれたのは間違いないと思われる(沖縄県病害虫防除所、1995a)。

#### サイカブトムシ *Oryctes rhinoceros* (Linnaeus) (コガネムシ科 Scarabaeidae)

別名タイワンカブトムシ。ヤシの害虫。原産地はインド周辺で、モーリシャス・インド・インドシナ半島・台湾・中国南部・フィリピン・ニューギニア・トンガ・フィジー・ハイなど各地に侵入した(街路樹害虫対策検討委員会、1989)。日本では1921年に石垣島で最初に見つかっている(楚南、1922)。西表島では1967年に確認されており、与那国島には1971年以前に持ち込まれたようである。八重山の他の島では1970年代末までに、宮古諸島でも1970年代に生息が確認されている(大城・奥島、1980; 街路樹害虫対策検討委員会、1989)。沖縄島では1975年に初めて被害が認められ、南部の糸満市摩文仁では大量のヤシが枯れ問題となつた(梅林・野原、1976; 東、1985a)。沖縄島へは1970年代前半に与那国島や台湾・フィリピンから移入されたヤシ類に付着して侵入したと考えられている(梅林・野原、1976)。本種は1987年以降に奄美諸島の各島へも侵入している(田中ら、1992)。

#### ハイイロハナムグリ *Protaetia fusca* (Herbst) (コガネムシ科 Scarabaeidae)

ミクロネシア、東南アジアに分布し、日本においては小笠原から記録されている(平嶋、1989)。沖縄県では石垣島で1993年に確認され、宮古島およびその周辺の島から採集されている(松本、1994)。

#### シロテンハナムグリ *Protaetia orientalis sakaii* Kobayashi (台湾亜種) (コガネムシ科 Scarabaeidae)

インド北部、台湾および日本に分布し、いくつかの亜種に分かれる(上野ら、1985)。もともと沖縄県には生息していなかつたが、1976年に沖縄島浦添市で発見された。1977年には那覇市首里において幼虫が多数採集され、定着が確認されている(楠井、1979)。その後、石垣島(上野ら、1985)、宮古島(酒井、1985)、尖閣諸島北小島(木村、1996)および奄美大島(原島、1992)でそれぞれ採集されている。これらの島で採れた標本はいずれも台湾亜種の特徴に一致し(酒井、1985; 上野ら、1985; 原島、1992; 木村、1996)、戦後台湾より移入されたと考えられている(上野ら、1985)。

オビヒメカツオブシムシ *Attagenus fasciatus* (Thunberg) (カツオブシムシ科  
Dermestidae)

貯穀害虫。世界中に分布し、日本においては本州と沖縄島から記録がある（東・金城、1987；平嶋、1989）。1980年代に沖縄島に侵入したと推定されている（Kiritani、1999）。1999年の貯穀害虫の調査で、本種は沖縄島の精米施設と飼料貯蔵施設から見つかっている（高橋・Romero、2001）。

ホソチビコクヌスト *Lophocateres pusillus* (Klug) (コクヌスト科 Trogossitidae)

東南アジア、アフリカ、マダガスカル、北米に分布し、国内においては九州から記録されている（平嶋、1989）。沖縄県では1979年の穀類害虫発生状況調査で沖縄島、宮古島、石垣島において見つかっている。穀類加工所、保管倉庫、農協倉庫などで発生が確認されることから定着していると考えられる（宮里、1979）。1999年の貯穀害虫の調査で、本種は石垣島の精米施設から見つかっている（高橋・Romero、2001）。

オオメノコギリヒラタムシ *Oryzaephilus mercator* (Fauvel) (ホソヒラタムシ科  
Silvanidae)

世界中に分布し、日本では本州、四国、九州から記録されている（平嶋、1989）。近年、日本で見られるようになり（安富・梅谷、1995）、沖縄県からも記録されている（Kiritani、1999）。

ミスジキイロテントウ *Brumoides ohtai* Miyatake (テントウムシ科 Coccinellidae)

台湾とタイに分布する（佐々治、1992；大桃、1999）。1985年に沖縄市の住宅地で多数発生（東、1985b）し、また1986年には大阪市の港湾近郊で発生した（市川、1986）ことから、移入種であることは間違いないと考えられる（佐々治、1992）。本種はその後、石垣島で1995年と1999年に採集されており、同島に定着しているようである（大桃、1999）。また和歌山県（北畠、1993）、愛知県（長瀬・吉富、1993）、四国の香川県（高木、2001）でも相次いで発見されている。

ケブカメツブテントウ *Jauravia limbata* Motschlsky (テントウムシ科 Coccinellidae)

インド、セイロン、ネパール、タイ、ベトナム、台湾などに分布する（上野、1988）。日本では1988年2月に那覇市首里末吉で採集されたのが最初である（上野、1988）。1989年には那覇市付近で多産することが確認されている。台湾には全島に普通に産するので、台湾からの移入の可能性が高い（佐々治、1992）。

### ハイイロテントウ *Olla v-nigrum* (Mulsant) (テントウムシ科 Coccinellidae)

カナダ南部・米国・メキシコに分布する(大桃・佐々治、1989)。日本では1987年8月に恩納村安富祖で初めて確認された(上野・佐々治、1989)。その頃すでに沖縄島南部で普通に見られ(楠井、1989)、また距離的に離れた恩納村や今帰仁村でも採集されているので、沖縄島への侵入はその何年か前であったと思われる(佐々治、1992)。1989年に渡名喜島や久米島などで(上野、1990)、1990年に池間島と波照間島で、また1993年には宮古島と伊良部島、石垣島で相次いで見つかっている(金子、1994; 野田、1994)。ハワイやグアムにアブラムシの天敵として移入されたことがある(大桃・佐々治、1989)、これらの島にある米軍基地を経由して沖縄に持ち込まれた可能性が高い。ギンネムにつくギンネムキジラミを好んで食べる。

### ベダリヤテントウ *Rodolia cardinalis* (Mulsant) (テントウムシ科 Coccinellidae)

オーストラリア原産。カンキツの大害虫であるイセリアカイガラムシの天敵。世界各地のカンキツ栽培地に導入され、アメリカや日本など各地でイセリヤカイガラムシの防除に大きな成功をおさめた。日本においては1911年に静岡県が台湾から導入し、翌年から増殖配布した経緯がある。この増殖・配布事業は現在でも続けられている(梅谷、1998)。沖縄県では1923年~1928年に、静岡県からイセリアカイガラムシの天敵として沖縄島に移入し、放飼された(屋代、1959)。

### ムネミゾコクヌストモドキ *Coelopalorus foveicollis* Brair (ゴミムシダマシ科 Tenebrionidae)

分布は東洋区が中心で、ビルマ、スリランカ、インド、マラッカ、ジャワ、北ベトナム、サラワク、フィリピン、グアム、ハワイ、台湾などから記録されている。日本では沖縄島で1973年に初めて確認された。1973年に沖縄県内の穀類害虫の発生状況を製粉・飼料工場等において調査したところ、那覇市内の飼料工場と名護市の穀類倉庫から発見された(川波・伊良波、1974)。1974年、1977年、1979年の貯穀害虫調査でも沖縄島南部で見つかっている(伊良波、1975; 西平、1977; 宮里、1979)。

### オオシマゴマダラカミキリ *Anoplophora oshimana ryukyuensis* Breuning et Ohbayashi (与那国島・台湾亜種) (カミキリムシ科 Cerambycidae)

オオシマゴマダラカミキリは2亜種に分けられ、奄美・沖縄諸島に基亜種 *A. o. oshimana* が、与那国島と台湾に亜種 *A. o. ryukyuensis* が分布する(平嶋、1989)。これらの中間に位置する宮古諸島と石垣島・西表島には生息していないかった。ところが最近

になって、与那国・台湾亜種と思われる個体が石垣島と西表島で見られるようになり（上野、1989；記野、1993；藤田、1997）、石垣島では害虫化しているようである（藤田、1997）。本亜種は1980年代後半に、いずれかの産地から植物とともに石垣島に持ち込まれ、西表島へは石垣島から侵入したと推定されている（藤田、1997）。ただし、石垣島で採集された標本は与那国島産と形態的に若干違いがあるので、移入源については再検討が必要である（藤田、1997）。最近の植物の移動状況や台湾・東南アジアからの移入種の増加を考えると、台湾からの侵入の可能性もあると考える。

#### イチジクカミキリ *Batocera rubus* (Linnaeus) (カミキリムシ科 Cerambycidae)

東洋区全域に広く分布し、多くの変種、亜種が記録されている。日本では1986年9月に那覇市首里で初めて確認された。すでに過去に2例記録があり、そのうち1頭は沖縄県立博物館に所蔵されている（竹内、1987）。その後、本部町や与那城町、勝連町、沖縄市、西原町、糸満市などで見つかっており、発生地から、植栽木とともに移動し、沖縄島の各地に広がったと思われる。沖縄島ではガジュマル、アコウ、インドゴムノキ、ベンジャミンなどで発生している（松村、1993）。沖縄島で見つかったものは、斑紋などの特徴が台湾のものと一致するので、台湾から移入されたと推定されている（松村、1993）。

#### マツノマダラカミキリ *Monochamus alternatus* Hope (カミキリムシ科 Cerambycidae)

日本、朝鮮、中国、台湾、ベトナム、ラオスなどに分布する。マツノザイセンチュウの媒介者で、重要な森林害虫となっている。沖縄県においては、1973年に九州から移入された松材についてマツノザイセインチュウとともに沖縄島に持ち込まれたと考えられている（国吉、1974；我如古、1974）。その後、本種はセンチュウとともに伊良部島や西表島に侵入しており、これらの島でも松枯れが確認されている。

#### インゲンマメゾウムシ *Acanthoscelides obtectus* (Say) (ハムシ科 Chrysomelidae)

インゲンの大害虫。もともと中南米に生息していたが、全米に広がり、1875-80年の間に海を越えヨーロッパに侵入した（梅谷、1963）。日本では1951年沖縄島那覇市で発見された。戦後のガリオア、エロア物資の穀類とともに輸入されたものと考えられている。1958年の調査では沖縄島各地に蔓延していることが分かり、農家における貯蔵インゲンではかなり多数の成虫・幼虫が採集できたという（高良・東、1971）。

#### キムネクロナガハムシ *Brontispa longissima* Gestro (ハムシ科 Chrysomelidae)

インドネシア・スラウェシ・ニューギニア・ソロモン・ニューカレドニアに分布するヤ

シの害虫。日本においては1978年1月に嘉手納町砂辺のココヤシから発見された（東・金城、1978）。その後県内で分布を広げ、1982年に石垣島と西表島で、1983年に宮古島で、1985年には与那国島で発生が確認された。台湾へも侵入しており、台湾から輸入されたヤシ類とともに沖縄島に持ち込まれたと推定されている（東、1985a）。

ヨツモンマメゾウムシ *Callosobruchus maculatus* (Fabricius) (ハムシ科 Chrysomelidae)

東洋区に分布する（平嶋、1989）。アズキ、ササゲ、リョクトウなどの貯蔵豆の害虫である（安富・梅谷、1995）。日本においては1979年に定着が確認された。外来種の多い屋内害虫の中でも、最も新しい侵入種である。現在、発生が確認されているのは千葉県以西の21府県で、今後のなりゆきが注目されている（安富・梅谷、1995）。沖縄県においては、本土よりも先に第二次世界大戦後に沖縄島で発見されている（屋代、1959；高良・東、1971）。

ミカンカメノコハムシ *Cassida obtusata* Boheman (ハムシ科 Chrysomelidae)

台湾、中国南部、インドシナ、ビルマ、フィリピン、インドに分布する。日本においては1987年10月に石川市のミカン園で発見された（玉城・仲宗根、1991；東、1992）。その後の調査で、沖縄島各地で発生しているのが確認されている（東、1992）。成虫がミカンの害虫として知られ、葉裏を帯状に食害する（玉城・仲宗根、1991；東、1992）。本来の食草はイヌビユなどヒユ科植物で、食草が少なくなる時期にミカンに移って加害する（玉城・仲宗根、1991）。

ヒロヒゲツツハムシ *Diachus auratus* (Fabricius) (ハムシ科 Chrysomelidae)

北米原産。日本においては1995年3月に沖縄島の那覇空港敷地内で発見された（平野、1995）。しかしながら、その後の発生状況については情報がない。

イネクビボソハムシ *Oulema oryzae* (Kuwayama) (ハムシ科 Chrysomelidae)

別名イネドロオイムシ。日本では本州、四国、九州に、国外では朝鮮半島、中国、モンゴルに分布する（平嶋、1989）。沖縄県では1937年にある農家が台湾から与那国島にイネの種苗を輸入した際に侵入したものとされる。1944年ごろには与那国島全域に広がり、猛威をふるい、莫大な被害を与えた（琉球植物防疫所、1965）。イネわらに成虫が潜んで、伝播するので、本種の蔓延を防ぐため復帰前は与那国島から他地域へのいねわらの移動を禁止していた（琉球植物防疫所、1965）。与那国島においては一期作イネ（5～6月）に

多いという（添盛、私信）。

ブラジルマメゾウムシ *Zabrotes subfasciatus* (Bohemian) (ハムシ科  
Chrysomelidae)

アフリカ、北米、南米に分布する（平嶋、1989）。貯蔵ダイズの害虫。第二次世界大戦後に食用豆類とともに輸入され、沖縄県全域に定着するようになった（屋代、1959；高良・東、1971）といわれるが、その後の生息状況については報告がない。

ワタミヒゲナガゾウムシ *Araecerus fasciculatus* (De Geer) (ヒゲナガゾウムシ科  
Anthribidae)

世界中に分布する。国内では本州、小笠原、四国、九州、対馬、琉球列島に分布する（平嶋、1989）。沖縄県には第二次世界大戦後のガリオア、エロア物資の穀類に混じって侵入したようで、1956年に石垣島で最初に確認されている。1958年の沖縄島における調査では各地に普通に発生していることが確認されている。1960年に南北大東島、1965年に久米島、1967年に西表島で採集されている（高良・東、1971）。沖縄では貯蔵トウモロコシや穀類を加害する（高良・東、1971）。本土ではカンキツ類を加害することが報告されている（藤井ら、1985）。

アリモドキゾウムシ *Cylas formicarius* (Fabricius) (ミツギリゾウムシ科  
Brentidae)

サツマイモの世界的な大害虫として知られる。原産地は熱帯アジアといわれるが、明らかでない（高良、1955）。国内では屋久島・トカラ列島以南の琉球列島と小笠原諸島に分布する（杉本、2000）。沖縄県への侵入時期や経路は分かっていないが、1903年にはすでに被害が大きかったことが報告されているので（名和、1903）、それ以前に侵入したのは間違いない（高良、1955）。被害イモは苦みと強い臭気があり食用にならない。特殊害虫に指定されているため、本種の寄主植物であるサツマイモを沖縄県から本土に自由に持ち出すことができない（ただし、塊根を蒸熟処理すれば持ち出せる）。現在、久米島において不妊虫放飼法による本種の根絶防除が行われている（久場ら、2000）。

イモゾウムシ *Euscepes postfasciatus* (Fairmaire) (ゾウムシ科 Curculionidae)

西インド諸島原産で、中南米、太平洋諸島に広く分布する。国内では奄美大島以南の琉球列島、小笠原諸島に分布する。日本においては1947年5月に勝連町で発見された（安里、1950）。戦後の混乱期に、米軍物資にまぎれてハワイまたはサイパンから侵入したか（高

良、1954)、あるいは、南方から引き上げてきた人たちによってサツマイモとともに沖縄島に持ち込まれたと考えられている(小濱、1990)。1954年までには沖縄島全域と渡嘉敷島など周辺の多くの島でも定着した。宮古島と石垣島では1951年に発生している。石垣島には宮古島から導入された優良品種とともにに入ったようである(高良、1954)。1958年には県内のほとんどの島で被害が認められるようになった(高良・東、1971)。当時、重要な食料であったサツマイモの移動にともなって、短期間のうちに県内の各島へ分布を広げたと思われる(小濱、1990)。植物防疫法により、本種の発生地からサツマイモを本土に自由に持ち出すことができない(ただし、蒸熱処理をすれば持ち出せる)。現在、久米島において不妊虫放飼法による本種の根絶防除が行われている(久場ら、2000)。

#### アルファルファタコゾウムシ *Hypera postica* (Gyllenhal) (ゾウムシ科 Curculionidae)

マメ科牧草の害虫。ヨーロッパ原産で、1904年に米国に侵入して分布を広げており、米国ではアルファルファに大害を与える著名な害虫として知られる(森本、1988)。日本においては1982年6月に福岡空港周辺で初めて発生が確認された(森本、1988)。その後、本州、四国、九州全域に分布を拡大した(阿久根、1996)。沖縄県では1982年7月に沖縄島で発見され、1984年には久米島でも見つかっている(田尾、1984)。

#### イネミズゾウムシ *Lissorhoptrus oryzophilus* Kuschel (ゾウムシ科 Curculionidae)

原産地は北アメリカ(森本、1986)。日本では、1976年に愛知県で最初に確認された。カリフォルニアから輸入された乾草にまぎれて日本に侵入したと推定されている(森本、1986)。発見から10年間で日本全国にその分布を広げた(平井、1996)。沖縄県では、1985年4月に沖縄島金武町伊芸と屋嘉で初めて確認された(杉本・仲井間、1985)。その後の調査で、国頭村、名護市、恩納村でも確認されている。沖縄島へは本土から入ったと思われる。現在では八重山諸島まで広がり、各地でイネに被害を与えている。

#### ヤサイゾウムシ *Listroderes costirostris* Schoenherr (ゾウムシ科 Curculionidae)

原産地はブラジルで、台湾、オーストラリア、ニュージーランド、アフリカ、北米などにも侵入している。きわめて雑食性で、多種の野菜類を加害する。日本においては1942年に岡山県で最初に見つかっている。その後、北海道を除く日本各地へと広がっていった(平井、1992)。沖縄県では1960年に南大東島と北大東島で発見された(東平地、1960a)。南・北大東島は八丈島からの移住者が多く、1945年以前は八丈島との往来も多かつたので、そこから侵入したものと考えられる(ただし、八丈島での発見は1947年である)(高良・東、1971)。

ナガチビコフキゾウムシ *Sitona cylindricollis* (Fahraeus) (ゾウムシ科  
Curculionidae)

ヨーロッパ原産のマメ科牧草の害虫。ヨーロッパから北アメリカに侵入し、日本では沖永良部島と沖縄島でとれている（森本、1988）。沖縄島では1961年に見つかっており、米軍の物資とともに移入された可能性が高い（東、1986）。

バショウオサゾウムシ *Cosmopolites sordidus* (Germar) (オサゾウムシ科  
Rhynchophoridae)

世界の熱帯地域に広く分布するバナナの害虫。日本では小笠原、および奄美大島以南に広がっている（森本、1988）。沖縄県においては、1926年首里市（現在の那覇市首里）で初めて確認された（高良、1955）。大正末期頃から昭和5～6年に台湾からバナナ苗を移入し県下に配布しているので、これによって伝播されたようである。八重山諸島では台湾から1891年、1920年、1929年にバナナの苗を移入しているので、八重山諸島には沖縄島よりも一足先に台湾から侵入しているものと思われる。沖縄島では1940年頃は中南部地区に限られていたが、その後、周辺島嶼の主要栽培地に及んでいる（高良、1955）。

ヨツボシヤシコクゾウムシ *Diocalandra frumenti* (Fabricius) (オサゾウムシ科  
Rhynchophoridae)

アフリカからサモアにかけての熱帯地域に広く分布しており、ヤシ類の害虫として知られる（森本、1988）。日本においては1977年に沖縄島で発見された。台湾から輸入して街路樹として植えられたヤシ類で見つかっている（森本、1988）。沖縄島各地のヤシで見つかるが、個体数が少なく、またヤシの枯死部分を好んで食べるため、実害はほとんどない（東、1985a）。

サトウキビコクゾウムシ *Myocalandra exarata* (Bohemian) (オサゾウムシ科  
Rhynchophoridae)

マダカスカルから東南アジアにかけて広く分布しており、衰弱したタケ類やラタンを加害するといわれる。日本においては、1958年に沖縄島で発見された。沖縄県では宮古島および南大東島にも分布する（森本、1988）。

バナナツヤオサゾウムシ *Odoiporus longicollis* (Olivier) (オサゾウムシ科  
Rhynchophoridae)

別名バナナクキゾウムシ。台湾からインドにかけて分布するバナナの害虫。幼虫は茎の

中を食害する。日本においては、1969年に沖縄島のバナナから初めて発見されたもので、奄美大島、沖縄島、宮古島、石垣島に広がっている（森本、1988）。東（1985a）は台湾からバナナとともに持ち込まれたと推定している。1955年および1959年に沖縄島で行われた生息確認調査において本種は見つかってないので（高良・東、1971）、沖縄島への侵入はおそらく1960年代であろう。

バショウコクゾウムシ *Polytus mellerborgi* (Bohemian) (オサゾウムシ科  
*Rhynchophoridae*)

バナナの害虫。マダガスカルから東南アジアに広く分布し、メキシコやハワイにも侵入している。日本においては1938年に小笠原から最初に記録され、奄美大島、沖縄島にも分布している（森本、1988）。バショウオサゾウムシと同時にバナナの茎を加害している場合が多い（高良、1955；森本、1988）。沖縄島においては少なくとも1950年代に被害が確認されているが（高良、1955）、バナナ苗の輸入状況から推定して1920年代に侵入したと思われる。

シロスジオサゾウムシ *Rhabdoscelus lineatocollis* (Heller) (オサゾウムシ科  
*Rhynchophoridae*)

フィリピン原産のヤシの害虫。日本においては1976年3月に沖縄島の沖縄市知花で発見された。その後しばらく見つからなかったが、1993年3月に具志川市兼箇段のサトウキビ畑で再発見され、定着していることが確認された（金城ら、1995；Nakamori et. al., 1996）。1994年の調査によると、本部町・名護市以南の各地で発生が確認されている。また1994年には石垣島でも見つかっている。フィリピン以外で本種の定着が確認されたのは沖縄が初めてで、またサトウキビの害虫としても初めて記録される（金城ら、1995；Nakamori et. al., 1996）。原産地であるフィリピンから輸入されたヤシとともに沖縄島に持ち込まれたと考えられている（Nakamori et. al., 1996）。

カンショオサゾウムシ *Rhabdoscelus obscurus* (Boiscuval) (オサゾウムシ科  
*Rhynchophoridae*)

ミクロネシア、ポリネシア、メラネシア、ニューギニア、セレベスなど太平洋熱帯地域の島々に広く分布するサトウキビとヤシ類の大害虫。日本では小笠原（父島、母島、硫黄島）に定着している（森本、1988）。沖縄県においては1960年に南北大東島で見つかっており、ビロウを食害している（東平地、1960b；琉球植物防疫所、1965）。

ヤシオオオサゾウムシ *Rhynchophorus ferrugineus* (Olivier) (オサゾウムシ科  
*Rhynchophoridae*)

インド、ニューギニア、台湾、東南アジアに分布するヤシ類の著名な害虫である（森本、1988）。日本では1975年12月に沖縄島中部の沖縄市において発見され（梅林・野原、1976）、1979年には北中城村でもみつかっている（具志堅、1979）。最初、沖縄島中部周辺で局所的に発生が認められたが、1980年には沖縄島南部でも発生し、1982年には北部でも採集されるようになった（東、1986）。沖縄島へは台湾から輸入したヤシ類とともに持ち込まれた（森本、1988）。沖縄島では最近、全く見られなくなっており、絶滅したと思われる。

シバオサゾウムシ *Sphenophorus venatus vestitus* Chittenden (オサゾウムシ科  
*Rhynchophoridae*)

北アメリカ原産のノシバ類の著名な害虫で、幼虫は株もとや根を食害する。日本においては1979年に沖縄島の玉城村にあるゴルフ場で初めて被害が見つかった。翌年には福岡県と兵庫県下のゴルフ場でもみつかっている（Morimoto, 1985）。本種には5つの亜種があり、日本へ侵入したのはアメリカ東南部に分布する亜種である。1964年から始まったジョージア州から東京へのティフトンシバの空輸にまぎれこんで侵入したと考えられる（森本、1988）。沖縄島へは本州や九州から導入したノシバやコウライシバとともに持ち込まれたようである（甘日出、1996a）。

ハエ目 (双翅目) DIPTERA

ランツボミタマバエ *Contarinia* sp. (タマバエ科 Cecidomyiidae)

洋ランの重要な害虫でタイ原産と推定される。1989年3月に沖縄島名護市で発見され、その後沖縄島中南部でもみつかっている（安田・上原、1994）。発見以来、年々その被害が増加し、1994年には沖縄島各地の多くの洋ランハウスで発生した（松山、1996）。安田・上原（1994）は、本種と同一種と考えられるタマバエがタイに生息していること、またタイから多量の洋ランの苗が沖縄島に導入されていることから、本種はタイからランの苗とともに持ち込まれた可能性が高いと述べている。

マンゴーハフクレタマバエ *Procontarinia* sp. (タマバエ科 Cecidomyiidae)

2000年11月に沖縄島玉城村で発見されたマンゴーの新害虫。発見直後に全県的な調査を行った結果、同年11月末現在、沖縄島南部のほぼ全域と宮古島で発生が確認された（沖縄県病害虫防除所、2000b）。2001年2月までに、沖縄島、宮古島、来間島、石垣島、西表島で発生が確認されている。種名は決定されてないが、ゲアムで記録されている *P.*

*schreineri* と同種である可能性が高いという（沖縄県病害虫防除所、2001）。

#### アメリカミズアブ *Hermetia illucens* (Linnaeus) (ミズアブ科 Stratiomyidae)

北米、中南米、ハワイ、南太平洋諸島に分布する。幼虫は生ごみや畜ふんなどに発生する衛生害虫。日本へは1950年頃移入され、本州から沖縄まで広く分布する（加納・篠永、1997）。沖縄県にいつ頃侵入したか不明であるが、1958年に採れた標本がある（東、1975）。アメリカ本国からハワイ、あるいは日本本土を経由して沖縄県に持ち込まれたと思われる。

#### ウリミバエ *Bactrocera cucurbitae* (Coquillett) (ミバエ科 Tephritidae)

台湾、東南アジア、ハワイに分布する（平嶋、1989）。日本においては1919年に八重山諸島の石垣島、竹富島、小浜島で発見された。1919年にはすでにかなりの被害がでていたので、八重山諸島に侵入したのは1919年以前であった可能性が高く、侵入は台湾からの持ち込みによるものと考えられている。1929年に宮古島で、1970年には久米島で発見されている。その後、本種は急速に分布を北へ拡大し、1975年までに奄美諸島を経て、トカラ列島にまで達している。また南北大東島では1977年に見つかっている（岩橋、1979）。沖縄県では、不妊虫放飼法を用いて本種の根絶防除を行い、1993年に沖縄全域からウリミバエを根絶することに成功した（吉澤、1993）。

#### ミカンコミバエ *Bactrocera dorsalis* (Hendel) (ミバエ科 Tephritidae)

熱帯アジア、ミクロネシア、ハワイなどに分布する（平嶋、1989）。果樹類の大害虫。沖縄県では1919年に沖縄島中部で発見された。そのころ、すでに宮古・八重山諸島でも発生していることが確認されている。その後、1929年に奄美諸島の喜界島で発見され、1946年には奄美諸島全域で分布が確認されている（栄、1968）。ミカンコミバエの雄は、メチルオイゲノールという香料の一種に強く誘引される。そこで、この誘引剤で雄を誘殺し、雌の交尾相手をなくしてしまう「雄除去法」によって、根絶防除が行われた。1982年に沖縄諸島で、1984年に宮古諸島で、続いて1986年に八重山諸島でそれぞれミカンコミバエの根絶が確認された（吉澤、1993）。

#### トマトハモグリバエ *Liriomyza sativae* Blanchrd (ハモグリバエ科 Agromyzidae)

南北アメリカ、アフリカ、アラビア半島、東南アジア、中国、ハワイ、グアムなどに広く分布する。ウリ科、マメ科、ナス科などの多くの作物を加害する（岩崎ら、2000）。日本では1999年に京都府や沖縄島などで発見され、その後本州各地や九州でも見つかっている（徳丸・阿部、2001）。沖縄県においては1999年5月に那覇市で発見された。発見後に

行われた全県的な分布調査の結果、宮古島や石垣島でも確認されている（沖縄県病害虫防除所、2000a）。本土から作物苗とともに沖縄県へ持ち込まれたと推定される。

#### マメハモグリバエ *Liriomyza trifolii* (Burgess) (ハモグリバエ科 Agromyzidae)

米国東部フロリダ原産と推定されている。1970年代から急激に分布を拡大し、南米、ヨーロッパ、アフリカ、アジアに広く分布するようになった。殺虫剤に対する抵抗性があり、防除が難しい害虫である (Minkenberg, 1988)。日本においては1990年に静岡県で発見され、1992年までに関東から九州にかけて発生するようになった。国内における急激な分布拡大も、ガーベラやキクなどの苗の移動によるものと考えられている (西東、1993)。沖縄県では1993年に読谷村のキク畑から見つかった (沖縄県病害虫防除所、1993b)。1994年には宮古島と石垣島でも発生が確認されている (岸田、1996)。本土から植物の苗とともに沖縄島に持ち込まれたと推定されており、県内各地へ苗の流通にのって短期間のうちに分布を広げたと思われる。

#### チョウ目 (鱗翅目) LEPIDOPTERA

##### レイシヒメハマキ *Statherotis discana* (Felder & Rogenhofer) (ハマキガ科 Tortricidae)

レイシの害虫。台湾、フィリピン、トンキン、タイ、インド、ジャバ、ソロモン諸島に分布する。日本においては1990年6月に沖縄島の今帰仁村で初めて確認された。東南アジア地域から沖縄島へ侵入したと推測されている (東、1992)。1994年には石垣島でも発見された (新垣ら、1997)。

##### レイシホソガ *Conopomorpha litchiella* Bradley (ホソガ科 Gracillariidae)

台湾、タイ、マレーシア、ネパール、インドに分布するレイシの害虫 (Bradley, 1986)。1989年7月に沖縄島の名護市大温帯で発見された。東南アジアから苗木などに付着して沖縄へ侵入したものと考えられている (東、1992)。その後の調査で沖縄島のほぼ全域で発生していることが確認されている (新垣ら、1997)。

##### レイシシロズホソガ *Conopomorpha sinensis* Bradley (ホソガ科 Gracillariidae)

台湾、ホンコン、タイ、ネパール、インドに分布するレイシトリュウガンの害虫 (Bradley, 1986)。果実を加害する。1990年4月に沖縄島今帰仁村で発見された。その後、石垣島でも本種の発生が確認されている (新垣ら、1997)。

### ジャガイモキバガ *Phthorimaea operculella* (Zeller) (キバガ科 Gelechiidae)

別名ジャガイモガ。ジャガイモやタバコ、ナスなどの害虫。中央アメリカが原産地と考えられているが、世界中の温帯から熱帯地方に広く分布する。日本においては1954年に広島で発見されており、第二次大戦後に占領軍によって持ち込まれたジャガイモについて侵入したと推定されている（森内、1982）。沖縄県では1968年5月に糸満市米須で発見された。その後、宮古島、石垣島で、1969年には久米島、伊江島、伊平屋島、伊是名島でも発生していることが確認されている（高良・東、1969）。本土から輸入されたジャガイモとともに侵入したものと考えられる（高良・東、1969；1971）。あるいは、復帰前に米軍によってバレイショが輸入されたことがあるので、米軍によって沖縄島に持ち込まれた可能性もある（多良間・伊波、1973）。

### ハスオビイラガ *Darna pallivitta* (Moore) (イラガ科 Limacodidae)

中国、台湾、タイ、マレーシア、ジャワに分布する。1995年5月に沖縄島の宜野座村松田で日本では初めて記録された。また1996年4月には金武町でも採集された（吉本、1997）。吉本（1997）は、本種がもともと沖縄に土着していたのか、あるいは最近になって移入されたのかは分からないと述べているが、杉（1998）は移入種である可能性を指摘している。イラガ科には偶産蛾の例があまりない（宮田、1984）ことを考えると、本種は沖縄島に人为的に持ち込まれた可能性が高い。沖縄島ではドラセナなどの観葉植物を加害しており、農作業中に幼虫に刺される被害も発生している。

### ヒロヘリアオイラガ *Parasa lepida* (Cramer) (イラガ科 Limacodidae)

衛生害虫・農業害虫。インド・スリカンカ・中国・スマトラ・ジャワ・フィリピンに分布する。日本では、1920年代に鹿児島県で初めて確認された。国外から移入植物について鹿児島に侵入したと考えられている。長い間、発生地は鹿児島に限られていたが、1970年代になって、国内で急速に分布を広げ、1980年代には九州から関東まで見られるようになった。このような本種の急激な分布拡大は、庭木や街路樹の移動によるものと考えられている（宮田、1984）。沖縄県では1982年7月に沖縄島の浦添市で初めて確認された。沖縄島へは移入植物について本土から侵入したと推定されている（比嘉・岸本、1984）。カンヒザクラやカキなど庭木・果樹で発生する。幼虫は毒のあるトゲをもち、刺されると激しい痛みがあり、皮膚炎をおこすことがある（比嘉・岸本、1995）。

ガイマイツヅリガ *Corcyra cephalonica* (Stainton) (メイガ科 Pyralidae)

汎世界的な貯穀害虫。最近の貯穀害虫の調査で、本種は沖縄島の精米施設と飼料貯蔵施設から見つかっており、沖縄島に定着していると考えられる（高橋・Romero, 2001）。

スジコナマダラメイガ *Ephestia kuehniella* Zeller (メイガ科 Pyralidae)

アメリカ大陸を除く世界のほぼ全域に分布し（井上、1982）、特に温帶圏における製粉工場の最大の害虫となっている（安富・梅谷、1995）。日本への侵入定着は戦後のことと思われる。近年、北海道、九州の精米、精麦、製粉、飼料工場などで最も普遍的な害虫となっている（安富・梅谷、1995）。沖縄県では1960年に沖縄島那覇市の穀類倉庫で発生したことがあるが、防除の結果、定着にはいたってない（東平地、1962b）。沖縄県における最近の発生状況についてはよく分かっていない。

ナスノメイガ *Leucinodes orbonalis* Guenée (メイガ科 Pyralidae)

台湾、東南アジアからアフリカまでの熱帯地方に広く分布するナスの害虫（井上、1982）。日本においては1964年5月に那覇市小禄で初めて確認された。1968年には沖縄島中南部で多数発生し、ナスに大きな被害を与えた。植物の輸入状況などから、1961年～63年の間に台湾から沖縄島へ侵入したと推定されている（高良・東、1969；1971）。その後、石垣島（安田・桃木、1988）や宮古島（原口、私信）でも発生している。沖縄島では、1970年代まで発生が多く、ナスにかなり被害を与えたが、1980年代後半からはほとんど見られなくなった。しかしながら宮古島や石垣島では現在も発生している。

サツマイモノメイガ *Omphisa anastomosalis* (Guenée) (メイガ科 Pyralidae)

台湾、中国、東洋熱帯、東南アジアに分布するサツマイモの害虫で、西インド諸島やハイ諸島にも侵入した。日本ではトカラ列島以南に分布する。沖縄県においては1941年ごろサツマイモ塊根とともに台湾から波照間島に持ち込まれたのが最初といわれる（高良、1954）。1943年に西表島で、1944年には石垣島で発生が確認されている。沖縄島では1951年に成虫が採集され、1953年にサツマイモの被害が確認されている（高良、1954）。多良間島では1953年に（高良、1954）、宮古島では1960年に（琉球政府経済局農務課、1960）、それぞれ発生が確認されている。多良間島と宮古島には石垣島から導入された種苗や塊根に付いて侵入したようである。1960年代には奄美諸島へも侵入した（栄、1968）。侵入後20年あまりの間に、琉球列島のほぼ全域に分布を広げており、その伝播は寄主植物の移動だけでなく、飛翔による分布拡大もあったと考えられている（高良・東、1971）。

### シバツトガ *Pediasia teterrella* (Zincken) (メイガ科 Pyralidae)

北米原産の芝の害虫。日本においては1964年に米国から輸入されたティフトンシバとともに持ち込まれたようである。日本で最初に被害が確認されたのは1968年である。現在では本州、四国、九州、沖縄に分布する(甘日出、1996b)。沖縄県における侵入経緯はよくわかつてないが、1970年代に本土から沖縄島にシバとともに持ち込まれたと推測される。

### バナナセセリ *Erionota torus* Evans (セセリチョウ科 Hesperiidae)

インド北部・シッキム・アッサム・中国大陸南部・インドシナ・マレー半島に分布し(築山、1976)、台湾にも1986年に侵入している(朱、1988)。日本では1971年6月に北谷村(現在の北谷町)謝莉で発見された。最初に沖縄島中部の米軍基地周辺で発生したことから、ベトナム戦争中に米軍物資にまぎれてインドシナ半島から持ち込まれたと推定されている(照屋ら、1973)。発見されてから約3年で沖縄島全域に広がった(照屋、1977; 比嘉ら、1979)。1974年と1989年に大宜味村喜如嘉で、芭蕉布の原料であるリュウキュウバショウで大発生し、問題となったことがある(照屋、1997)。侵入から30年経過したが、現在でも本種の分布は県内では沖縄島に限られている。したがって、本種は海を越え、移動するチョウではないと考えられる。1995年に奄美諸島の与論島で見つかっているが(田中、1997)、これは沖縄島から持ち込まれたバナナの苗について侵入した可能性が高い。

### クロボシセセリ *Suastus gremius gremius* (Fabricius) (セセリチョウ科 Hesperiidae)

インド・スリランカ・ヒマラヤから東南アジア、中国南西部・台湾に分布する(川副・若林、1976)。日本では1973年6月に石垣島で最初に見つかった(中尾、1974)。1973年に西表島、1975年に宮古島と竹富島、1977年には沖縄島で生息が確認された(東・金城、1978; 田中、1989)。沖縄島では、最初に安謝港付近で見つかっており、その後周辺へ広がっていったようすが追跡調査によって明かにされている(比嘉、1978; 1979; 1982)。このことから沖縄島においては、本種は輸入したヤシ類に付いて人為的に持ち込まれたと考られている(比嘉、1978)。その後、本種は琉球列島を北上し分布域を広げており、1986年までに奄美諸島で生息が確認されている(田中、1989)。東・金城(1978)および東(1985a)は、本種の発生が八重山から始まり、次第に北上していることから、分布拡大は渡りによると推定している。一方で田中(1989)は、南方からの船が発着する島で早く記録され、港周辺から分布が拡大したことなどから、本種はヤシ科植物の移入による人為的な侵入と考えている。

### モンシロチョウ *Pieris rapae crucivora* Boisduval (シロチョウ科 Pieridae)

キャベツなどアブラナ科作物の害虫。原産地はヨーロッパで、台湾・中国・朝鮮・日本・ハワイ・北米・オーストラリア・ニュージーランドなどに人为的に導入された（江島、1987）。沖縄県においては、第二次世界大戦前の1925年と1938年に那覇市で成虫が採集されているが、その後は確認されていなかった（江島、1987）。沖縄島に定着したのは1958年ごろと考えられる。1958年11月に名護町（現在の名護市）で戦後初めて採集され、1959年には沖縄島の各地と久米島で発生が確認されている（長嶺、1959）。その後、1960年に南大東島（東平地、1960b）で、1962年には宮古島（高良・東、1971）と石垣島（東平地、1962a）でそれぞれ確認されており、1970年までに沖縄県全域に生息するようになった（高良・東、1971）。1953年頃から本土よりキャベツ、ハクサイなどが沖縄島に移入されており、これら野菜類に付着して持ち込まれたと考えられている。一方で、本種は海を越え移動することが知られており、すでに定着していた奄美諸島から島伝いに飛来してきた可能性も指摘されている（高良・東、1971；多良間・伊波、1973）。

### マンゴーフサヤガ *Chlumetia brevisigna* Holloway (ヤガ科 Noctuidae)

インド・スリランカ・中国・シンガポール・ジャワ・フィリピンに分布する（Yoshimatsu et al., 1993）。日本では1992年4月に石垣島のマンゴー園で発見された（Yoshimatsu et al., 1993）。農家の情報によると1991年4～5月ごろ本種の発生に気づいたという（沖縄県病害虫防除所、1992）。1992年8～9月に県内のマンゴー園で発生調査したところ、石垣島、西表島で確認されている（添盛ら、1996）。東南アジアなど南方地域からの侵入種とみられ（仲宗根ら、1996）、マンゴーの苗とともに持ち込まれたと推測される。

### ミカンアシブトクチバ *Parallelia palumba* (Guenée) (ヤガ科 Noctuidae)

台湾、ジャワ、ミャンマー、インド、スリランカ、ネパールに分布する。日本においては、1995年9月に沖縄島名護市のカンキツ圃場で発見された。10月に発生状況を調査したところ、名護市の1圃場のみの発生で、幼虫による新葉の食害が見られた（沖縄県病害虫防除所、1995c）。

### ハチ目（膜翅目） HYMENOPTERA

#### コマユバチの一一種 *Apanteles erionotae* Wilkinson (コマユバチ科 Braconidae)

バナナセセリの天敵。ハワイではマレーシアから導入し、バナナセセリの防除に効果を上げたといわれる。沖縄県においては1975年にハワイから沖縄島に導入されたという。しかし、その防除効果については明らかにされてない（照屋、1977）。

### コマユバチの一種 *Biosteres longicaudatus* Ashmead (コマユバチ科 Braconidae)

1954年、1956年、1958年および1959年の計4回、ハワイから沖縄島に導入され、今帰仁村や名護町（現名護市）、美里村（現在の沖縄市美里）に放飼された（一戸ら、1984）。一戸ら（1984）が1976～1979年に行ったミバエ類の天敵調査によると、本種は石垣島で確認されたが、導入された沖縄島では見つかってないという。

### コマユバチの一種 *Biosteres oophilus* (Fullaway) (コマユバチ科 Braconidae)

1959年にハワイから導入されている。ハワイ州政府の文書によると、1959年9月に他の寄生蜂とともに本種1500頭を導入、美里村美里（現在の沖縄市美里）に1回放飼された（一戸ら、1984）。2～3世代飼育されたが、増殖には至らなかったようである。1976～1979年に行われたミバエ類の天敵調査の結果、本種は石垣島で確認されたが、導入された沖縄島では見つかってない（一戸ら、1984）。

### ウリミバエコマユバチ *Opius fletcheri* Silvestri (コマユバチ科 Braconidae)

ウリミバエの寄生蜂で、台湾、マレー、フィリピン、インド、スリランカ、フィジーに分布する（平嶋、1989）。ウリミバエの防除のため1932～1934年に台湾から石垣島に導入された（屋代、1934）。石垣島での放飼防除は1932年に始められた（沖縄県立農事試験場、1934b）。本種は1975年に久米島（一戸、1976）で、1978年に宮古島（高嶺、1978）と伊良部島（金城ら、1981）で、1979年に沖縄島（金城ら、1981）でそれぞれ生息が確認されている。

### カンシャコバネカメムシタマゴバチ *Eumicrosoma blissae* (Maki) (タマゴクロバチ科 Scelionidae)

カンシャコバネナガカメムシの卵に寄生する。日本では1920年に沖縄島南部で初めて確認された。台湾からサトウキビ苗とともに持ち込まれたと考えられている（佐渡山、1997）。かつて沖縄県ではカンシャコバネナガカメムシの防除のため、本種の増殖放飼がおこなわれていた（沖縄県立農事試験場、1934a）。1932年に宮古島、1958年に石垣島、1972年に南大東島へ導入放飼された（佐渡山、1997）。奄美大島にも生息する（平嶋、1989）。

### バッタタマゴヤドリバチ *Scelio hieroglyphii* Timberlake (タマゴクロバチ科 Scelionidae)

1974年6月にタイから本種に寄生されたバッタ卵1000個が導入され、これらの卵から羽化したハチを沖縄産トノサマバッタの卵で増殖し、同年7月に2回にわたって合計193頭

のハチが南大東島の4地点に放飼された（高良・東、1974；田端、1974）。同年11月の調査では卵への寄生が認められており、定着したと判断されている（高良・東、1974）。また、これとは別に本種の成虫20頭が、タイから沖縄島に導入されている（田端、1974）。当時、南大東島においてはトノサマバッタが異常発生していたので、その防除のために天敵として導入されたものである。

タマゴトビコバチの一一種 *Ooencyrtus erionotae* Ferrire (トビコバチ科 Encyrtidae)

バナナセセリの卵寄生蜂。ハワイではマレーシアから導入し、バナナセセリの防除に効果を上げたといわれる。沖縄県においては1975年にハワイから沖縄島にコマユバチの一一種 *Apanteles erionotae* とともに導入されたといわれている。しかし、その防除効果については明らかにされてない（照屋、1977）。

ヤノネキイロコバチ *Aphytis yanonensis* DeBauch et Rosen (ツヤコバチ科 Aphelinidae)

ヤノネカイガラムシの天敵として1980年10月に中国から導入、静岡県柑橘試験場と農林水産省果樹試験場口之津支場（長崎県）で増殖し（西野・高木、1981；西野・古橋、1982）、各地のカンキツ栽培地で放飼され、日本に定着した。1981年に沖縄島北部に侵入定着したヤノネカイガラムシを防除するため、1983年4月に農林水産省果樹試験場口之津支場からヤノネツヤコバチとともに導入された（沖縄県、1984）。導入したこれら2種のハチはうまく定着し、ヤノネカイガラムシに対する防除効果が認められたという（沖縄県、1985）。ヤノネカイガラムシは絶滅したと考えられるので、おそらく同時にヤノネキイロコバチも絶滅したのであろう。

ヤノネツヤコバチ *Coccobius fulvus* (Compere et Annecke) (ツヤコバチ科 Aphelinidae)

ヤノネカイガラムシの天敵として1980年10月に中国から上記のヤノネキイロコバチとともに導入され、静岡県柑橘試験場と農林水産省果樹試験場口之津支場で増殖し（西野・高木、1981；西野・古橋、1982）、各地のカンキツ栽培地で放飼され、日本に定着した。1981年に沖縄島北部に侵入定着したヤノネカイガラムシを防除するため、1983年4月に農林水産省果樹試験場口之津支場からヤノネキイロコバチとともに導入された（沖縄県、1984）。導入したこれら2種のハチはうまく定着し、ヤノネカイガラムシに対する防除効果が認められたという（沖縄県、1985）。

### トビイロケアリ *Lasius japonicus* Santschi (アリ科 Formicidae)

旧北区系種で、日本での自然分布の南限は屋久島である（寺山、1986）。沖縄島では那覇市と辺野喜ダムの工事現場のみで記録されており、これらは人為的な分布であると推定されている（寺山、1986；1999）。沖縄島へは船舶などの交通機関に便乗し侵入したと考えられている（寺山、1986）。

### カワラケアリ *Lasius sakagamii* Yamauchi et Hayashida (アリ科 Formicidae)

旧北区系種で、日本での自然分布の南限は鹿児島県本土である。沖縄島那覇市の市街地からも得られているが、これは船舶などの交通機関に便乗した人為的侵入であると考えられる（寺山、1986；1999）。

### シワクシケアリ *Myrmica kotokui* Forel (アリ科 Formicidae)

北海道、本州、四国、九州、屋久島、朝鮮半島に分布する（平嶋、1989）。沖縄島読谷の採石場から得られた古い標本があるが、これは人為的分布によるものと考えられる（寺山、1999）。その後の調査がないので、本種が沖縄島に定着しているのか不明である。

### アカカミアリ *Solenopsis germinata* (Fabricius) (アリ科 Formicidae)

汎熱帯、汎亜熱帯に分布し、日本では沖縄島から記録がある（平嶋、1989）。沖縄島では1967年1月に本部半島備瀬で採集されている。土地の人たちはアメリカアリ（戦後アメリカから入ったらしい）あるいは火アリと呼んでいたという。何年かにわたって繁殖していたことは事実のようであるが、その後の生息状況は不明である（久保田、1983）。沖縄島の嘉手納米軍基地周辺と伊江島のレーダー基地でも得られており（寺山、1999）、米軍の輸送物資にともなって沖縄島に入ったものと推定される（久保田、1983；寺山、1999）。最近の南西諸島での採集例はなく、現在のところ定着していないと判断される（寺山、1999）。

### セイヨウミツバチ *Apis mellifera* Linnaeus (ミツバチ科 Apidae)

もともとは北ヨーロッパから南アフリカまでを分布域としていたが、人手によって世界のあらゆるところに運ばれて飼養されている。日本では明治初期に導入され、温暖な地域では野生化している。南西諸島では、種子島・屋久島以南に広く生息する（幾留、1999）。沖縄県では太平洋戦争前に導入されたが、戦争中に養蜂が途絶え、戦後に本土から導入された（東、1975）。沖縄島では野外で木のうろや岩の割れ目などに巣をつくっているのが見つかる（村山、1994）。

## 謝 辞

沖縄県の外来昆虫について文献・資料収集に協力いただき、また情報をいただいた新垣則雄、原口 大、比嘉正一、河村 太、金城常雄、岸田光史、真栄平彩子、宮竹貴久、佐々木健志、添盛 浩、田中 洋、照屋 匠、上里卓己、安田慶次の各氏に厚くお礼申し上げる。

## 引用文献

- 阿久根光明 (1996) アルファルファタコゾウムシ. 武田植物防疫叢書9. 近年話題の新害虫 : 120-125. 武田薬品工業株式会社.
- 新垣則雄 (1998) 害虫アザミウマをやっつける捕食性アザミウマ. インセクタリウム, 35(7):180-186.
- Arakaki, N. & S. Okajima (1998) Notes on the biology and morphology of a predatory thrips, *Franklinothrips vespiformis* (Crawford) (Thysanoptera: Aeolothripidae): first record from Japan. Entomological Science, 1(3) : 359-363.
- 新垣則雄・川崎健次郎・吉松慎一 (1997) 沖縄における果樹レイシの害虫. 沖縄県農業試験場研究報告、(18): 29-38.
- 朝比奈正二郎 (1991) 日本産ゴキブリ類. 中山書店. 東京. pp.253.
- 安里清景 (1950) 甘藷の新害虫イモゾウに就いて. 国頭農報、(8) : 5-11.
- 東 清二 (1975) 沖縄の昆虫類. 風土記社. 沖縄. pp.143.
- 東 清二 (1977) 沖縄におけるサトウキビ重要害虫の生態学的研究、特にサトウキビ品種の変遷と害虫の発生消長について. 琉球大学農学部学術報告、(24) : 1-158.
- 東 清二 (1985a) 沖縄への侵入害虫. 昆虫と自然、20(1):26-28.
- 東 清二 (1985b) 日本未記録の美しいテントウムシ. 昆虫と自然、20(14): 16.
- 東 清二 (1986) 沖縄の移入昆虫－南からの侵入者たち. 桐谷圭治編；日本の昆虫－侵略と搅乱の生態学： 115-121. 東海大学出版会. 東京.
- 東 清二 (1992) 沖縄で発見された昆虫類. 昆虫と自然、27(5) : 28-30.
- 東 清二・金城政勝 (1978) 沖縄本島から新らしく記録されるヤシ類の害虫2種. 沖縄農業, 14(2): 21-25.
- 東 清二・金城政勝 (1987) 沖縄産昆虫目録. 沖縄生物学会. 沖縄. pp. 422.
- Bradley, J.D.(1986) Identity of the South-East Asian cocoa moth, *Conopomorpha cramerella* (Snellen) (Lepidoptera: Gracillariidae), with descriptions of three allied new species. Bulletine of Entomological Reserch, 76: 41-51.
- 朱 耀沂 (1988) 台湾に於けるバナナセセリの侵入とその後の発生. やどりが、

135: 22-25.

江島正郎 (1987) 日本の昆虫⑥モンシロチョウ. 文一総合出版. 東京. pp.172.

藤井 浩・柏尾具俊・氏家 武 (1985) ワタミヒゲナガゾウムシのカンキツ類への加害について. 九州病害虫研究会々報. 31: 202-203.

藤田 宏 (1997) 西表島でオオシマゴマダラカミキリを採集. 月刊むし. (322): 9-10.

街路樹害虫対策検討委員会 (1989) 街路樹害虫対策調査検討報告書. 沖縄総合事務局南部国道事務所. pp.101.

我如古光男 (1974) 沖縄本島に侵入したマツノザイセンチュウ. 森林防疫. 23(3): 42-44.

具志堅允一 (1979) 沖縄本島に侵入したヤシ類の害虫 (資料). 沖縄県林業試験場報告. (21): 133-141.

橋本浩明 (1987) グラジオラスアザミウマ沖縄県で発生を確認. 那覇植物防疫情報. (66): 339.

甘日出正美 (1996a) シバオサゾウムシ. 武田植物防疫叢書 9. 近年話題の新害虫: 154-157. 武田薬品工業株式会社.

甘日出正美 (1996b) シバツトガ. 武田植物防疫叢書 9. 近年話題の新害虫: 158-160. 武田薬品工業株式会社.

原島真二 (1992) 奄美大島でシロテンハナムグリを採集. 月刊むし. (251): 34-35.

早瀬 猛・福田 寛 (1991) ミカンキイロアザミウマの発生と見分け方. 植物防疫. 45(2): 59-61.

比嘉正一 (1978) 沖縄島へ侵入したクロボシセセリ. 琉球の昆虫. (2): 8-9.

比嘉正一 (1979) 沖縄島へ進入したクロボシセセリ (II). 琉球の昆虫. (3): 8-12.

比嘉正一 (1982) 沖縄島へ侵入したクロボシセセリ (III). 琉球の昆虫. (6): 23-25.

比嘉俊昭・宜野座猛・座喜味盛男 (1979) バナナセセリ *Erionota torus* Evans の生態に関する二、三の知見. 沖縄農業. 15: 19-37.

比嘉ヨシ子・岸本高男 (1984) ヒロヘリアオイラガの侵入経過と生活史. 沖縄県公害衛生研究所報. (18): 57-61.

比嘉ヨシ子・岸本高男 (1995) 沖縄県におけるヒロヘリアオイラガによる刺傷被害とその背景. 沖縄県衛生環境研究所報. (29): 57-64.

東平地清二 (1960a) 南北大東島に野菜の新害虫ヤサイゾウムシ発生. 那覇植物防疫情報. (2): 5.

東平地清二 (1960b) 南大東村における害虫分布の状況. 琉球植物防疫情報. (3-4): 12-13.

東平地清二 (1962a) 石垣島にもモンシロチョウ発生. 琉球植物防疫情報. (13): 49.

- 東平地清二 (1962b) 輸入穀類に重要害虫続々発見される. 琉球植物防疫情報、(13): 49-50.
- 平井一男 (1996) 水稻の新害虫. 武田植物防疫叢書 9. 近年話題の新害虫: 33-42. 武田薬品工業株式会社.
- 平井剛夫 (1992) ヤサイゾウムシ. 热帯農業要覧(16)、热帯野菜作の害虫: 80-81. 国際農林業協力協会. 東京.
- 平野雅親・松村雅史 (1996) 沖縄本島におけるドウガネブイブイの記録. 月刊むし、(305):40.
- 平野幸彦 (1995) 那覇空港の移入甲虫 2 種. 月刊むし、(293): 39.
- 平嶋義宏監修; 九州大学農学部昆虫学教室・日本野生生物研究センター編 (1989) 日本産 昆虫 総目録 I、II. pp.1088.
- 外間也子・松井正春・河野伸二・渡嘉敷唯助 (1993) タバココナジラミ新系統の放飼により発生した各種野菜の異常症. 関東東山病害虫研究会年報、40: 217-219.
- 堀 繁久 (1987) カブトムシ. 東清二編著; 沖縄昆虫野外観察図鑑(2) : 82-83. 沖縄出版. 沖縄.
- 市川顕彦 (1986) ミスジキイロテントウを大阪市で採集. Nature Study, 12: 131.
- 一戸文彦 (1976) 久米島でウリミバエコマユバチを確認. 那覇植物防疫情報、(23): 133.
- 一戸文彦・津止健市・豊川善亮 (1984) 沖縄県で採集されたミカンコミバエ及びウリミバエのコマユバチ科寄生蜂について. 植物防疫所調査研究報告、(20): 63-67.
- 幾留秀一 (1999) ミツバチ上科—ミツバチ群. 山根正気・幾留秀一・寺山守: 南西諸島産 有剣ハチ・アリ類検索図説: 549-679. 北海道大学図書刊行会. 北海道.
- 井上 寛 (1982) メイガ科. 井上 寛・杉 繁郎・黒子 浩・森内 茂・川辺 澄: 日本 産蛾類大図鑑 I : 307-404. 講談社. 東京.
- 伊良波幸仁 (1975) *Coelopalorus foveicollis* Brair の食性について. 那覇植物防疫情報、(20): 116.
- 岩橋 統 (1979) 不妊虫放飼法によるウリミバエ、*Dacus cucurbitae* Coquillett, の根 絶に関する生態学的研究. 沖縄県農業試験場特別研究報告、(1): 1-72.
- 岩崎暁生・春日井健司・岩泉 連・笛川光廣 (2000) 日本におけるトマトハモグリバエ (*Liriomyza sativae* Blanchard) の新発生. 植物防疫、54(4): 142-147.
- 金子義紀 (1994) ハイイロテントウの記録など. 月刊むし、(282): 30-31.
- 上宮健吉 (1998) 日本から新しく見つかった侵入害虫「ウーリーコナジラミ (新称)」の 報告. Delfax、(42): 6.
- 加納六郎・篠永 哲 (1997) 日本の有害節足動物－生態と環境変化に伴う変遷. 東海大学

- 出版会. 東京. pp.389.
- 片山春喜 (1998) ミカンキイロアザミウマ—おもしろ生態とかしこい防ぎ方. 農山漁村文化協会. 東京. pp.126.
- 河合 章 (1993) ミナミキイロアザミウマの最近における発生と防除. 植物防疫、47：112-114.
- 河合 章・北村實林 (1983) ミナミキイロアザミウマの生活史と発生生態. 植物防疫、37：276-280.
- 河合省三 (1980) 日本原色カイガラムシ図鑑. 全国農村教育協会. 東京. pp.455.
- 河村 太 (2001) 侵入害虫ドウガネブイブイ *Anomala cuprea* Arrow (Coleoptera: Scarabaeidae) の沖縄島における分布状況. 沖縄県農業試験場研究報告、(23): 61-63.
- 川波敬一郎・伊良波幸仁 (1974) 沖縄県内製粉・飼料工場等における穀類害虫調査中間報告—*Coelopalorus foveicollis* Brair が定着か. 那覇植物防疫情報、(13): 87-88.
- 川田一之 (1996) ミヤコハナムグリを沖縄本島で採集. 月刊むし、(310): 11.
- 川副昭人・若林守男 (1976) 原色日本蝶類図鑑—全改訂新版. 保育社. 大阪. pp.422.
- 菊池健三郎・平野哲夫 (1969) 八丈島の温室新害虫トゲナナフシモドキ. 植物防疫、23(11): 461-462.
- 木村正明 (1996) 1995年6月、尖閣諸島北小島の昆虫(1). 琉球の昆虫、(16): 38.
- 金城美恵子・仲宗根福則・比嘉良次・長嶺将昭・河合省三・近藤拓正 (1996) 沖縄県で発生が確認されたマンゴーのカイガラムシ類. 九州病害虫研究会報、42:125-127.
- 金城早苗・杉本民雄・溝渕三必・一戸文彦・仲座正義・高嶺朝淳・豊川善亮・田盛直一 (1981) 沖縄県におけるウリミバエコマユバチ (*Opius fletcheri* Silvestri) の分布と寄生率. 植物防疫所調査研究報告、(17): 109-111.
- 金城常雄・仲盛広明・佐渡山安常 (1995) 沖縄県におけるシロスジオサゾウムシ *Rhabdoscelus lineaticollis* (Heller) の発生と被害. 九州病害虫研究会報、41: 81-84.
- 記野直人 (1993) オオシマゴマダラカミキリ石垣島の記録. 月刊むし、(269): 36.
- Kiritani, K. (1999) Formation of exotic insect fauna in Japan. In: Yano, E., K. Matsuo, M. Shiyomi and D. A. Andow (eds.). Proceedings of an international workshop on biological invasions of ecosystem by pests and beneficial organisms (Tsukuba, 1997). National Institute of Agro-Environmental Science, Series 3: 49-65.
- 岸田光史 (1996) キク圃場およびセンダンングサ雑草地におけるマメハモグリバエの発生消長. 沖縄農業研究会第35回大会講演要旨：10-11.
- 岸本高男・比嘉ヨシ子 (1986) 沖縄の衛生害虫. 新星図書出版. 沖縄. pp.126.

- 北畠雅弘 (1993) 和歌山県におけるミスジキイロテントウの採集例. 月刊むし、(267):37.
- 小濱継雄 (1990) 沖縄におけるアリモドキゾウムシ及びイモゾウムシの侵入の経過と現状. 植物防疫、44 : 115-117.
- 小浜継雄 (1997) 帰化昆虫. 嵩原建二・当山昌直・小浜継雄・幸地良仁・知念盛俊・比嘉ヨシ子編著; 沖縄の帰化動物—海を越えてきた生きものたち: 136-184. 沖縄出版. 沖縄.
- 久場洋之・照屋 匡・榎原充隆 (2000) 不妊虫放飼法によるゾウムシ類の根絶(9). 久米島における根絶実証事業. 植物防疫、54(11): 483-486.
- 久保田政雄 (1983) アリに関する記録(3). 蟻、(11): 7-8.
- 国吉清保 (1974) マツノザイセンチュウによる被害沖縄に発生. 森林防疫、23(3): 40-42.
- 楠井善久 (1979) 近年人為的に沖縄県に侵入したと考えられるコガネムシ類について. 昆虫と自然、14(5): 26-28.
- 楠井善久 (1989) ハイイロテントウ浜比嘉島(沖縄県)にも分布. 月刊むし、(226): 11-12.
- 松井正春 (1992) タバココナジラミの吸汁によるトマト果実の着色異常. 日本応用動物昆虫学会誌、36(1): 47-49.
- 松井正春 (1995) タバココナジラミ新系統(仮称: シルバーリーフコナジラミ)の発生とその防除対策. 植物防疫、49(3): 111-114.
- 松本吏樹郎 (1994) 石垣島におけるハイイロハナムグリの記録. 月刊むし、(282): 32.
- 松村雅史 (1993) 沖縄本島におけるイチジクカミキリについて. 昆虫と自然、28 (10) : 45-47.
- 松山隆志 (1996) 沖縄県名護市辺野古に於けるランツボミタマバエ(仮称)の発生消長及びその防除対策. 沖縄農業研究会第35回大会講演要旨: 8-9.
- Minkenberg, O. P. J. M. (1988) Dispersal of *Liriomyza trifolii*. Bulletin OEPP/E PPO Bulletin, 18: 173-182.
- 宮田 彰 (1984) 偶産蛾考—海を渡る蛾—9. ちょうどよう、7 (4) : 2-16.
- 宮武頼夫 (1988) 農林害虫としてのキジラミ類の見分け方(1). 植物防疫、42(12): 603-610.
- Miyazaki, M. and I. Kudo (1987) Occurrence of the gladiolus thrips, *Thrips simplex* (Morison), in Japan (Thysanoptera: Thripidae). Applied Entomology and Zoology, 22(2): 230-232.
- 宮里勝雄 (1979) 沖縄県内穀類害虫調査結果から. 那覇植物防疫情報、(36): 185.
- Morimoto, K. (1985) Supplement to the check-list of the family Rhynchophoridae

(Coleoptera) of Japan, with descriptions of a new genus and four new species. *Esakia*, (23): 67-76.

森本 桂 (1986) ゾウムシ類－世界各地への侵入者. 桐谷圭治編; 日本の昆虫－侵略と撲滅の生態学: 132-139. 東海大学出版会. 東京.

森本 桂 (1988) 日本へ侵入したゾウムシ類の見分け方と被害. 農業研究、35(1): 28-44.

森内 茂 (1982) キバガ科. 井上 寛・杉繁 郎・黒子 浩・森内 茂・川辺 淳: 日本産蛾類大図鑑 I : 275-288. 講談社. 東京.

村山 望 (1994) セイヨウミツバチ. 渋 和雄編著; 写真で見る虫たちの世界－沖縄の身近な昆虫図鑑: 191. 沖縄出版. 沖縄.

長嶺将昭 (1959) モンシロチョウについて. このは会々報、(1): 17-23.

長嶺将昭・仲宗根福則・金城美恵子 (1996) 沖縄におけるマンゴーの害虫. 病害虫防除所ニュース. 沖縄県農林水産部. pp.24.

長瀬正義・吉富博之 (1993) ミスジキイロテントウの愛知県での採集例. 月刊むし(274): 27.

Nakamori, H., Y. Sadoyama and T. Kinjo (1996) Ecological feature of Asiatic palm weevil, *Rhabdoscelus lineaticollis* Heller, newly invaded in sugarcane field of Okinawa Islands, Japan. In Proceedings of International Workshop on Pest Management Strategies in Asian Monsoon Agroecosystems (Kumamoto, 1995): 209-219.

中尾健一郎 (1974) 石垣島におけるクロボシセセリの早い記録. 昆虫と自然、9(14): 2-3.

仲宗根福則・比嘉良次・長嶺将昭・金城美恵子 (1996) 沖縄県で発生したマンゴーの害虫. 九州病害虫研究会報、42: 122-124.

中沢啓一 (1978) クリスマスとともにやって来た害虫－オンシツコナジラミ. 遺伝、32(10): 73-80.

名和梅吉 (1903) 蟻形象鼻虫に就いて. 昆虫世界、7 (72): 327-330.

西平良雄 (1977) インゲンマメゾウムシを発見－貯穀害虫調査の結果. 那覇植物防掲情報、(27): 148.

西野 操・高木一夫 (1981) 中国から導入したヤノネカイガラムシの寄生蜂. 植物防疫、35(6): 253-256.

西野 操・古橋嘉一 (1982) 中国から導入したヤノネカイガラムシの寄生蜂. 農業グラフ、(82): 4-7.

野田正美 (1994) ハイイロテントウの宮古諸島における記録. 月刊むし、(285): 34.

- 小田義勝 (1993) 植物検疫で発見される微小害虫. 植物防疫、47(3): 103-107.
- 沖縄県 (1984) 昭和58年度有害動植物発生予察事業年報. pp.350.
- 沖縄県 (1985) 昭和59年度有害動植物発生予察事業年報. pp.358.
- 沖縄県病害虫防除所 (1992) マンゴーフサヤガ (仮称). 平成4年度病害虫発生予察特殊報(1).
- 沖縄県病害虫防除所 (1993a) 热帯果樹におけるカイガラムシ類の新発生について. 平成5年度病害虫発生予察特殊報(2).
- 沖縄県病害虫防除所 (1993b) マメハモグリバエの発生について. 平成5年度病害虫発生予察特殊報(3).
- 沖縄県病害虫防除所 (1995a) ドウガネブイブイ. 平成7年度病害虫発生予察特殊報(1).
- 沖縄県病害虫防除所 (1995b) マンゴーカタカイガラムシ. 平成7年度病害虫発生予察特殊報(2).
- 沖縄県病害虫防除所 (1995c) ミカンアシブトクチバ. 平成7年度病害虫発生予察特殊報(3).
- 沖縄県病害虫防除所 (1999) ミカンキイロアザミウマ. 平成11年度病害虫発生予察特殊報(1).
- 沖縄県病害虫防除所 (2000a) ハモグリバエの一種 *Liriomyza sativae* Blanchard. 平成11年度病害虫発生予察特殊報(2).
- 沖縄県病害虫防除所 (2000b) タマバエの一種 *Erosomyia* sp.. 平成12年度病害虫発生予察特殊報(1).
- 沖縄県病害虫防除所 (2001) マンゴーハフクレタマバエの防除対策について. 平成12年度技術情報(13).
- 沖縄県農業試験場 (1982) 昭和56年度植物防疫事業年報. pp.564.
- 沖縄県農業試験場 (1983) 昭和57年度植物防疫事業年報. pp.640.
- 沖縄県立農事試験場 (1934a) 甘蔗小翅椿象ノ卵寄生蜂放飼. 昭和7年度業務功程: 383-384.
- 沖縄県立農事試験場 (1934b) 瓜実蠅寄生蜂ノ放飼. 昭和7年度業務功程: 384.
- 沖縄県農林水産部 (1989) 昭和63年度植物防疫事業概要. pp.102.
- 沖縄県農林水産部 (1990) 平成元年度植物防疫事業概要. pp.123.
- 沖縄県農林水産部 (1991) 平成2年度植物防疫事業概要. pp.124.
- 大林隆司・竹内浩二(1996) マンゴーのアカオビアザミウマの生態と防除に関する試験. 発生消長と性比について. 平成6年度小笠原亜熱帯農業センター試験成績書: 59-60.
- 大桃定洋 (1999) ミスジキイロテントウは石垣島に定着か?. 月刊むし、(344): 40.

- 大桃定洋・佐々治寛之 (1989) 北米産ハイイロテントウ (新称) を沖縄本島で採集. 月刊むし、(223) : 38.
- 大城安弘・奥島澄子 (1980) タイワンカブトムシ *Oryctes rhinoceros* Linnaeus (鞘翅目: コガネムシ科) の生態学的研究 1. 琉球列島における分布及び侵入経路について. 沖縄農業、16 : 15-22.
- 大戸謙二 (1990) タバココナジラミの発生とその見分け方. 植物防疫、44(6): 264-266.
- 琉球植物防疫所 (1965) 琉球の植物検疫. pp.69.
- 琉球政府経済局農務課 (1960) 甘藷野めい蛾 (*Omphisa illisalis* Walker) 宮古本島に侵入す. 琉球植物防疫情報、(3): 2-3.
- 佐渡山安常 (1997) 雌性產生単為生殖卵寄生蜂カンシャコバネナガカメムシタマゴバチにおける雄成虫の発生. 第18回個体群生態学シンポジウム発表要旨: 75.
- 税所康正・税所智子 (1999) 南大東島でハイイロテントウを採集. 月刊むし、(345): 42.
- 西東 力 (1993) マメハモグリバエの最近における発生と防除. 植物防疫、47 : 123-124.
- 栄 政文 (1968) 奄美群島に発生する特殊病害虫. 鹿児島県農業試験場大島支場. pp.80.
- 栄 政文・松田鋤男 (1965) サトウキビ病害虫図説. 農林省園芸局特産課監修. 甘味資源振興会. 東京. pp.70.
- 酒井 香 (1985) 宮古島のシロテンハナムグリ. 月刊むし、(178): 35.
- 佐々治寛之 (1992) 日本から最近新しく追加されたテントウムシ類. 甲虫ニュース、(100) : 10-13.
- 佐藤文保 (2000) 沖縄市の昆虫ーフィールドから. 沖縄市立郷土博物館. pp.75.
- 添盛 浩・谷口昌弘・伊禮 信・仲宗根福則 (1996) 沖縄県八重山群島におけるマンゴーフサヤガ *Chlumetia brevisigna* (Holloway) の発生と被害状況. 九州病害虫研究会報、42 : 128-130.
- 楚南仁博 (1922) タイワンカブトムシ石垣島に産す. 台湾博物学会会報、(16): 72.
- 外川内国隆 (1976) オンシツコナジラミ那覇市に発生. 那覇植物防疫情報、(23): 133.
- 杉 繁郎 (1998) 1997年の昆虫界をふりかえって—蛾界. 月刊むし、(327): 28-31.
- 杉本俊一郎・仲井間 寛 (1985) 沖縄本島でイネミズゾウムシの発生を確認. 那覇植物防疫情報、(59): 296.
- 杉本 肇 (2000) 2種のゾウムシ類の起源、分散、我が国への侵入. 植物防疫、54(11): 444-447.
- 鈴木 寛・宮良安正 (1984) ミナミキイロアザミウマの生態及び防除に関する研究(1).

- 農業被覆資材による物理的防除技術. 沖縄県農業試験場研究報告, (9):85-93.
- 田端 進 (1974) 特許品としてトノサマバッタの天敵を導入. 那覇植物防疫情報、(13): 88.
- 高木真人 (2001) 四国から初記録のミスジキイロテントウ. 月刊むし、(361): 44.
- 高橋敬一・M. V. Romero (2001) 沖縄本島および石垣島における貯穀害虫およびその天敵相. 昆虫 (ニューシリーズ)、4(3): 91-97.
- 高嶺朝淳 (1978) ウリミバエコマユバチを確認. 那覇植物防疫情報、(31):165.
- 高野秀三・柳原政之 (1939) 台湾甘蔗害益虫編—甘蔗の害益虫並びに有害動物に関する調査研究. 台湾蔗作研究会. 台北. pp.313.
- 高良鉄夫 (1954) 琉球におけるサツマイモメイガ並びにイモゾウの伝播と防除. 植物防疫、8(10) : 436-438.
- 高良鉄夫 (1955) 琉球における重要害虫の分布と害相. 植物防疫, 9(7) : 279-284.
- 高良鉄夫・東 清二 (1969) 沖縄から新らしく記録される害虫3種. 沖縄農業、8 (1) : 28-33.
- 高良鉄夫・東 清二 (1971) 沖縄における侵入害虫. 植物防疫、25(11) : 449-452.
- 高良鉄夫・東 清二 (1974) タイ国から導入したバッタタマゴヤドリバチが南大東島で定着す. 沖縄農業、12(1/2): 36.
- 竹内幸夫 (1987) 沖縄本島に産していたイチジクカミキリ. 月刊むし、(196): 36.
- 竹内幸夫 (2001) 宮古島に出現したオキナワクワカミキリ. 月刊むし、(365): 47.
- 玉城信弘・仲宗根福則 (1991) ミカンカメノコハムシ (仮称) の生態と防除対策. 沖縄農業研究会第30回講演会要旨: 23-24.
- 田中 洋 (1989) 南西諸島におけるクロボシセセリの分布拡大. 日本の生物、3(10): 69-75.
- 田中 洋 (1997) 鹿児島県未記録のバナナセセリを与論島で発見. SATSUMA, 45(114): 30-31.
- 田中 洋・田中 章・大山清照 (1992) 奄美群島に侵入したタイワンカブトムシ. SATSUMA, 40(105): 64-69.
- 田尾政博 (1984) 沖縄本島で発見された新害虫アルファルファゾウムシについて. 那覇植物防疫情報、(54): 267.
- 多良間恵栄・伊波興清 (1973) 最近沖縄に侵入定着した鱗翅目害虫. 那覇植物防疫情報、(4): 20.
- 築山 洋 (1976) バナナセセリの話. TSUIISO, (69): 207-210.
- 寺山 守 (1986) アリーその分布拡大と種組成の変化. 桐谷圭治編; 日本の昆虫—侵略と

- 搅乱の生態学： 43-51. 東海大学出版会. 東京.
- 寺山 守 (1999) アリ科. 山根正氣・幾留秀一・寺山守；南西諸島産有剣ハチ・アリ類検索図説: 139-317. 北海道大学図書刊行会. 北海道.
- 照屋 匡 (1977) バナナセセリについて. 今月の農業, 21(8): 104-107.
- 照屋 匡 (1997) 台湾のバナナセセリ発生状況視察報告. 沖縄農業, 32(1): 62-67.
- 照屋 匡・新城安哲・長田 勝 (1973) バナナ類の新害虫バナナセセリ. 植物防疫, 27(5): 191-193.
- 徳丸 晋・阿部芳久 (2001) 新害虫トマトハモグリバエの京都府における発生生態. 植物防疫, 55(2): 64-66.
- 友国雅章 (1989) 奄美諸島の異翅半翅類 I. カメムシ型類. 国立科学博物館専報, (22): 185-195.
- 上野勝広 (1989) ゴマダラカミキリ属の一種の石垣島での記録. 月刊むし, (226): 35.
- 上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝編著 (1985) 原色日本甲虫図鑑 (II). 保育社. 大阪.  
pp.514.
- 上野輝久 (1988) メツブテントウ亜科の日本新記録種. 月刊むし, (210): 34.
- 上野輝久 (1990) 沖縄諸島に侵入したハイイロテントウ. 月刊むし, (227): 41.
- 上野輝久・佐々治寛之 (1989) ハイイロテントウは沖縄本島に定着している. 月刊むし, (223): 38.
- 梅林満智也・野原堅世 (1976) ヤシオオゾウムシ・タイワンカブトムシ沖縄本島に発生－徹底した応急防除が必要. 那覇植物防疫情報, (22): 126-128.
- 梅谷献二 (1963) 輸入穀類とその害虫. Japan Food Science, 2(8): 35-41.
- 梅谷献二 (1998) ベダリアテントウ. インセクタリウム, 35(12): 351.
- 矢野栄二 (1993) オンシツコナジラミの最近における発生と防除. 植物防疫, 47(3): 120-122.
- 矢野栄二 (1994) アメリカのコナジラミの話－大発生と生物的防除. インセクタリウム, 31(12): 402-405.
- 屋代弘孝 (1934) 沖縄県石垣島に於ける瓜実蠅天敵放飼事業概要. 昆虫, 8(4・5・6): 300-301.
- 屋代弘孝 (1959) 琉球島弧の昆虫相の推移に就いて. 日本生物地理学会会報, 20(12): 59-65.
- 安田慶次・桃木徳博 (1988) 東南アジアから導入したナスのナスノメイガおよびミナミキイロアザミウマに対する品種抵抗性の差異. 九州病害虫研究会報, 34: 139-140.
- 安田慶次・上原勝江 (1994) 沖縄県の洋ランに発生する害虫について. 九州病害虫研究会

報、40: 134-136.

安永智秀・高井幹夫・山下 泉・川村 満・川澤哲夫 (1993) 友国雅章監修: 日本原色力  
メムシ図鑑. 全国農村教育協会. 東京. pp.380.

安富和男・梅谷献二 (1995) 改訂・衛生害虫と衣食住の害虫. 全国農村教育協会. 東京.  
pp.310.

Yoshimatsu, S., A. Miyara, N. Arakaki and K. Kawasaki (1993) Occurrence  
of *Chlumetia brevisigna* Holloway (Lepidoptera: Noctuidae) on mango in  
Japan. Applied Entomology and Zoology, 28(3): 401-403.

吉元 浩 (1997) 沖縄で採集された日本未記録のハスオビイラガ. 蛾類通信、(192):  
273-288.

吉澤 治 (1993) わが国において根絶に成功したミバエ類の根絶防除事業の概要. 植物防  
疫、47(12) : 527-533.

吉沢 治・早瀬 猛・中垣至郎・藤野宣博 (1987) グラジオラスアザミウマの発生と防除.  
植物防疫、41(8) : 361-365.

## 博物館紀要執筆規定

- 1 誌名：沖縄県立博物館紀要 BULLETIN OF THE OKINAWA PREFECTURAL MUSEUM とする。
- 2 目的：本誌は広く自然、歴史、民族、考古、美術工芸、教育普及等に関する原著、短報、資料紹介、論文紹介等の研究成果を公開する事によって県民の博物館についての関心を高め、理解を深める。また、この紀要を通して国内、国外の博物館職員や研究者との交流を深める。
- 3 執筆者：博物館職員及び博物館職員との共著に限る。
- 4 別印：原著については1論文につき30部の別刷を無料で進呈する。それ以上必要な場合の超過分は著者負担とする。

### 沖縄県立博物館紀要

第 28 号

2002年 3月29日 発行

編集・発行 沖縄県立博物館  
〒903-0823 那覇市首里大中町1-1  
TEL (098) 884-2243  
FAX (098) 886-4353

印 刷 株式会社国際印刷

# BULLETIN OF THE OKINAWA PREFECTURAL MUSEUM

No. 28

2002

## CONTENTS

Kenji TAKEHARA : Notes on Breeding records of rare three residential birds (subspecies) in Okinawa Is. The Ryukyus .....	1
Ken SONOHARA : A note of <i>Okinawa-ken kyouikukai fusetsu kyoudo hakubutsukan</i> , heimat museum .....	13
T. KOHAMA and K. TAKEHARA and : Exotic Insects in Okinawa .....	55

OKINAWA PREFECTURAL MUSEUM